へ 5
678
3

増補俳諧歳時記栞草

汪豊亭主人纂輔
藍亭青藍増補

秋

漢書律暦志少陰者西方西遷也陰然遷落物於時為秋秋襲也物斂成熟

帝禮月令其帝少皞注云少皞白精之君金天氏也

少皞

月令其神蓐收注云蓐收金官之臣少皞氏之子該也

蓐收

尔雅秋為白藏一曰收成注云氣白而收藏萬物故曰白藏

白藏

秋五行属金五音属商故有金風素商之称唐高宗九日詩云端居臨王扆初聞律啓金商

金商

元帝纂要秋景曰爽朗景朗明義同

爽

月令廣義増韻爽清快也尔雅吹物有声曰籟

籟

夷則法也言金氣始肅萬物于此凋傷猶被刑戮之法

夷則

門 制
號 678
卷 3

明治卅六年十一月五日
坪内氏寄贈

七月

立秋 節 月令廣義 孝經緯云大暑十五日斗指坤為立秋七月節

新秋 韻文 是時新秋七月 廣韻 孟勉初金神按節炎氣除 **孟秋** 也始也又始初也共謂新秋也

初秋 中院通茂公御説 和歌 初秋ハ、七月十四日ヨリ

處暑 中月令廣義 立秋十五日斗指申為處暑瀆暑將退伏而潛處也、處上声止也暑氣止息也是七月中也

文月 清浦奥儀抄 此月七日ふみをとふつき 文ひろげ月 藏王 七夕のあふよの空のうげうえて書ふらべるを暑しとふつきともいふ、

機棚月 藏王 鶴のよろせよたなばこ月のころ待えらん家隆

女郎花月 藏王 なをこれちぎりのろふぐてゝ名をとゝ月

涼月 月令 孟秋月涼風至 **盆秋** 經曰 もとゝゝ月、顕昭

毎年七月十五日、為父母設盂蘭盆供十方自恣僧得庚則 淮南子 一葉落而天下知秋 **相月** 尔雅 七月為相疏云七月日室相 **桐秋** 甲書 梧桐立秋之日一葉先墜

蘭月 **蘭秋** **肇秋** 纂要 七月旦首秋上秋肇秋蘭秋 月令廣義 提要抄云

親月 和尔雅 此月諸人詣親墳墓故曰親月 蘭月

餞月 餞字 量曰送行燕説文送去也餞と訓ぜ、暑の去を送る意なり

八月

葉月 此月肅殺の氣と生じ百ヤ葉と落る故小葉落月とい今暑して葉月とのへ

南呂 律 礼記 律中南呂高誘註云南任也言陽氣内藏陰侶干陽任其成功

白露 節 月令廣義 孝經緯云處暑後十五日斗指庚為白露言陰氣漸重露凝而白也

秋分 同上 白露後十五日斗指酉為秋分陰生於午極於亥故酉其中分也仲

月之節為秋分秋為陰中陰陽適中故晝夜長短亦均焉、**仲秋** 月令八月為仲秋、

壯月 纂要八月為中 商又曰壯月 **桂月** 同上八月亦曰桂月、○桂の花のひらく月 芋環ゐ出せり、あんげつ **難月** 芋環ゐ出せとあるもの、唐類函出處未考、

中律 八月乃難以達秋氣難ハあきのけはひ、あふやらひちがと難月の誤ちか、**秋風月** 藏王萩の葉ゐ露見みざめて音あらしやゝ身ふるそくんしあき風の月 定家 **月見月** 藏王名ふしおいぐ秋の半

雁來月 月令仲秋之月鴻雁來、

九月

無射 律 礼記九月律中無射、高誘註云、無射陰氣上升陽氣下降、萬物隨陽而藏無有射出見、

寒露 節 月令廣義孝經緯云秋分後十五日、斗指辛為寒露、言露冷寒而將欲凝結也

霜降 中 同上寒露後十五日、斗指戌為霜降、言氣肅露凝結而為霜矣、

季秋 月令季秋之月云云

紅樹 通俗志ふ出さ人疑らくハ紅樹月の誤ちか、藏王ありてこ山はちくゐぐゐろとてもゝ紅葉の月の色とそくふゝん後鳥羽院御製○朱熹詩云秋山有紅樹、忽憶田野中○韓退之詩云春風紅樹當眠處似姬歌章作艶声云云と云云紅樹とゞりハ、紅樹の異名ふゐゐべゐらゞ、

玄月 范蠡曰王姑待之至于玄月註云玄月九月也、

長月 夜長月とも、

素秋 素秋八九月ゐ限らも、秋の總名ゐり、素ハ白ふり四時と五色ゐ配もゐ、秋ハ白ゐ中るゐもゐ、素秋の名ゐり、

菊月 又菊秋ゐらゐ、月令季秋月菊有黃花、

晩秋 對早秋曰晩秋、故曰菊月、

梢の秋 李吟云紅葉もる故、木梁月

紅葉月 證歌紅樹ともいふ、

寐覺月 藏王ゐくたびゐれの下ゐ出つ

ふゞ枕のねざめ月、秋ゐハ、

くゝぬ長き夜もぐら 家隆

小田苅月 藏王さひゝさハ鳴くゐくまの

露をげく袖うち拂ふ　色どる月　梢の秋とい
小田うりの月　頭昭　ふおおぶし

い　七月

糸織姫　棚機七姫の内　異名分類
織神衣三五是　旧事紀ふ令天棚機姫神
あやはとり

犬飼星　志の部二星の条ふお　**石枕**　仙覚抄
八真の石ふあらぞ王ゝたなぞとの言ふ夜の王の枕とえう　いと枕と

芋の葉に露　藻塩草　露
取草と八棚機の歌と書付るふ芋の葉の露をこ書ゝ云

曬衣裳　星のらし物　小袖
四民月令七月七日麴を作ゝ藍丸及び蜀漆丸と合し經書及い衣裳を曝し俗ふ習ふと然り　世說郝隆七月七日鄰人とゝ皆衣物を曝を隆仰ぎ臥して腹を出す人其故とゝ云曰腹中の書を曝のゝ〇星のこの物衣裳を曝を物とゝ云も七夕ふ巧ゝを乞ん為ゝ

貫之家集　世とゝて我ゝを糸ハ七夕の涙の玉の緒とやゝゝん秋さても露ゆく袖のせばくまでばたまゝつゝふ何とゝきまし　**弁内侍**　**荒野集**　七夕よ物ゝをとも見ひし

越　**池の坊立花**　洛の六角堂頂法寺雲林院八三
八、池の坊ふ立花　條の南ふあゝ三十三所順礼の
一箇所也、近世僧專光數品の花枝と一瓶のらもふそ山
水の景象と模をるとを得ゝゝ和俗ゝとと立花とゝ今
ふ至て代々ゝとと玩ぶ僧俗此徒弟とゝゝめれ多し例
年七月七日立花數瓶砌の物等ゝあゝ人爭ひてこれをゝる
ゝとと池の坊の立花とゝふ豈　**伊勢踊**　骨董雜談
ゝ又二星ふ供をるの意ゝあゝ、
とゝくむゝ　ゝゝ侍るゝゝ

生身魂　蓮の飯　閑窓
〇世ふゝふ松坂音頭ゝあゝ、　さし鮨　倭華
本朝の世俗、七月ふゝふ日バ生る二親と供養ゝて、生身魂と名
づゝゝゝも盂蘭盆の修行ゝあゝ人　盆經　願ゝ八現在の父母
とゝて、壽命百年病ゝゝ一切苦腦の患ゝらゝむ、是七月十
五日、僧自恣の日、現在の父母の壽命長久と祈る願の文
ゝあゝ、是生身魂の修行ゝあゝ、　和漢三才圖會　剌鯖中元の日
祝用ゝゝゝ但し背ゝゝ晋ふ傍て割開きゝゝゝと鯰ゝて、
三枚と一重とゝふゝゝゝとと一刺とゝゝ〇同書云蓮の飯考
姉の靈前ふ供ゝ又以て親戚ふ贈るとゝ礼式ゝゝゝゝと称

して生霊祭とり、荷の葉と以て蒸せる糯飯と包み、稲
観音草と用てこれと縛る佛名と以て好とするの、

妻 稲つま〻 むかう

和漢三才圖会 秋の夜晴て電りる常に、
俗傳ていふ此時稲實る故ふ稲妻稲交の
名あり、御傘 稲光ハ雑あり、稲妻ふ對して、
說文 電ハ陰陽の激耀するこ、

稲の殿 稲の殿といまつ

べし、續猿蓑 獨ゐて留守
ゆけるこ〻 稲の殿 一束、

稲葉の雲 詩三云 多
稼如雲○
秋風ハ田面ふ冬とさそ〻ふ〻いるぞの雲の露ぞ〻〻〻
う〻中院通茂公○稲葉のおひとゝのひる景色とのすぞ

稲の花 夫木 ゆふぐれとハこゝ世のあらしふ我家の

糸秋 大和

門田の稲の花の涙よる 後久我内大臣

本草 糸萩ハ花紅ふ盛こ、

隱元豆 大和本草 近年中華よりこゝ〻〻
春子と植秋の末ふ實多く花紫
こ、蔓生て嫩きこ紀英とゆふ煮食ふ京都ふて隱元豆と云、
筑紫ふて南京豆とい〻、○此種黄檗隱元禪師來朝しく
諸種と持來る其一種こ、故う隱元豆と名づく、

稲蓑虫 和漢三才圖会 蠶蛹 蓑蟲、和名以

祢豆岐古萬呂 俗云祢宜 按ぎろ〻ふ蓑蟲、蓑蟲斯ふ似て小く、
長さ一寸ばかり、青色尖て〻る首兩眼の間廣〻但し蓑蟲斯
ハ兩眼の間狹しこと以て異ありとするの、社人立烏帽子
と者さる狀ふ似こ〻、故ふ俗呼て祢宜とゆふ小兒兩足と捕こ
ばこ身と伸して首と俯き仰ぐ稲と蓑形ハ似こ〻故
ふ和名稲蓑とい〻古萬呂とハ蓑蟲の類の和訓の總名、

蟲 本綱 蟲蓑蟲ハ總名ふり數種あり、草の上ふ在と草
蟲とゆふ冬ふ至て土穴の中ふ入夷人炙てこ〻と食ハ
辛く毒あり其類十中ふ乳む深く其卵と埋む夏ふ至て
始て出づ○按ぎろふ蟲蟲方ある首形蕊雛ふ似て小く、
青白の色田の稲ふ生る夜ハ株ふあり、朝ハ梢ふ上り、稲の
露と飲む故ふ稲子と名づく、こと取て炙て食ふ味甘
く美あり小蝦の如し、形同うして灰色

蝗 本草綱目 蟲名蝗集解
田野ふ在て地ふ跳る者即ち土名蝗也、
三云蝗亦蟲ふ類して方首ふ王字ゆり冷氣ふ生ぜる所、
天と蔽ひて飛ぶ性金の声と畏る、一さひふ八十一の子と生
じ冬大雪あるとき八土ふ入て死も、和名抄 蝗 訓無之 天

和本草 管子ふ凶年の五害水旱風厲蟲とい〻、蟲八

蝗之和俗ふ實盛虫と称するあり、蟷螂ふ似て小く青色あり、音ハ兜と者くるゞ如く、稲葉と食ひて大ふ害をなす夜松明と燈し、鐘鼓とふらしてこれを送る

芋虫 大和本草 蝎、又菜の葉ふも青虫と生ず、草蔡ふ生る、大ある拇指の如く、長さ三四寸あり、芋虫〻〻といふ青色又褐色ありて、後ふ化して蝶となる

蟷螂 時珍曰両臂斧の如く、轍ふ當て避ず故ふ當郎の名を得たり、又螳蜋、首と驤臂と奮ふ頸脩く大腹二千四足疑と以て鼻ふ代ふ人の髪と食ひよく葉と翳くして蟬と捕ふ深秋ふ子と乳房と作るふ枝の上ふ粘着す即螵蛸也、房の長さ寸ばかり、拇指の如し、其内重々として隔房ありて、房毎ふ子あり、蛆卵の如し、芒種の節後ふ至て一齊ふ出

滑稽雑談 俗ふ鎌きりといふ、がの両臂斧の如し、又鎌とめくらもぐらとしよりよるといふ、○時珍曰今人抗と病者往々螳螂と捕へて食しむ、

竈馬 三才図会 こおろぎ二名一物この部蟋蟀の条ふ註す、

兼三秋物 居待月 藻塩草 十八日〻

万葉ふ座待月と書り、

絲芒 葉細く絲線のごとし、長三四尺一株ふ數百の莖最生す、秋莖と抽で花穂とする也、

色草 草あり、秋の千穂とする也、

芋 時珍曰芋花とひら間ひらく者あり、莖と抽で花と生ず、黄色多ふ長薯あり、こゝと護る半辺蓮花の状の如し、○粒芋、唐の芋、青芋、蝶芋、甘藷ホの種類あり、頭字の部ふ重ねて註しあり、

田舍杵 和漢三才図会 北國ふて渋し、酬し杵 形田く諸杵ふよりて大ともいふ、俗ふ塔杵と、

大殺梨 最多し、奥羽津輕秋田の産、他國ふ倍して大あり、周り一尺四五寸、俗呼て大殺と名づく、狗子樹下ふ有ときは梨落ちず撲ちく死も、故ふ名く、

稲 禹錫食經ふ云稲ハ徐く雅ふ云稲ハ徐く古ハ麥稲の穂と扱ふ二ツの小き管と以て繩と通し繋ぎこれと握り持穂と挾み扱迫年稲扱と製て其捷ふて扱竹ふ十倍也、

稲刈 字彙刈獲也取也、

稲扱

稲舟 古今 最上川のくれバくるる稲舟の、いなふあらぞ此月とり○出羽

國家上川、水そゝくして舟を引のおもふ舟のうしろのかた
うがふ人の物といふを言てうかりかゝるに似されば、いふ人、又一説に
稲とつゞくる舟といふ、讀方物といひやとらいふ心とも
稲舟によせてよむなりと 藻塩草 すこえる

稲莚 新撰 會

莚とちゞまるやうに稲の面の平々とあるを申すとぞ よりて
夜分にも居所にとりあはせ○又新蒙みて織る莚とも又
かやの稲とて木の枝にかけ、狗いねとうけもとしたるとも稲莚
とよめり、万葉 至わとの道行つゝぞ稲莚もちてそ人をと
るよしもがな 人丸 新古今 秋の田のかりねの床の稲むし
ろ月やどれともしける露かな 定雅○大かた是にて心
得べし

鰯引 裂鱠

和漢三才圖会 鰯 俗字 鰮、和名伊和
之、性柔弱故に俗字弱に従ふ、與
和之と訓ス、乃相通ス中畧 群行して至る時海波稍赤し漁
人豫知て網を下してこれを来る、鯨好て鰯を吮ふ為に逐
るゝ若數万群をなして浪撻の如くしこれを取て膾に作
て炙として食ふ又脂を取て燈油とす○鰯引とハ網
と引の義、裂膾とハこれ魚、刀を用ゆるに及ずて指を以て
さくと解故にいふ、本朝食鑑 一名御紫或ハ紫といふ、本朝

宮閨の兒女鰯の賤名を忌て御紫とす、

鰯雲 秋天 鰯先

鰯の塩糟其内色紫黒故に名づくるか、
あらんとする時、一片の白雲ありその
雲段々として波の如し是を鰯雲と云

八月 芋名月

つの部 月見 の条にしるべし

十六夜月 既望

古今 君やこん我やゆか
んのいさよひに槙の板戸
もさゝずねにけり○いざよふとハたちやすらふ意也十六日の
月、暮てのちすこしかりていづる故也○ゆるやかに出ていざ
よふ月の雲 芭蕉○此句意ハおそくいづる月ハ出さまにも雲
のさゝめにいざよひてこゝろをとめへるる曲節なり 蔡氏集傳 日月
相望むこれを望といふ、既に望む十六日之

羊肚菜

和漢三才圖会 羊肚菜今
云莧口蕈 八月の中湿地に
多く生す其繖の表褐色端曲り捲裏ハ黄白色 細蕈
あたかもしてみれば孔あり、蜂の巣のごとし妻あり

石茸

同上 状木耳のごとし繖柄ともに黒色裏灰
白色、峯の頭巖の上にあり其已得

小屋

同上 守舎禾を看守かり○
田間に建て稽麓を追ふ也、

稲木 稲 稲掛

稲干

多識篇 喬杆 加計奈 ○稲木、俗稲掛とのふ。

と掛ける具。竹の長短相等しきかの二茎と取て一ふ幾か用てそれを縛り田中ふかたて禾と上ふ引けて乾すなり。

稲束

和漢三才圖会 稲こ刈て束ねて一把二把こすり長ふなり又稲塚あり刈稲を束ねて後積て堆くもの恰も塚の如し是を稲塚と云。

稲

負鳥

古今 我門ふいふわせ鳥の鳴なつけさく風ふ鳴ハきゝふゝ」真淵翁云、稲負鳥ハいとくゝ多くがきこゆるを世人ハ此哥をよくも心得ぬ故ふ或ハ鶴と田人とをもとゝ皆りゝふ足らぬ歌とする也ゆゑ也。

実ふ秋の半ばすぎて來鳴かのふり。綺語抄 いとくゝ稲負鳥のとゝくゝ人ハ恵路ふまどハざらまし。鶺鴒、稲負鳥、産こゝきつゝふゝ色鳥とつゝきとゝ。鳥ふの諸名けり。三才圖会 鶺鴒 雀のごゝ飛ときハ鳴行ときハ揺く太と鶺のとゝ御長く尾腹の下白し頭の下黒く連銭のごし、故ふ杜陽の人こゝとと連銭とりゝ。

色鳥

御傘 いろ〳〵秋ゝとる小鳥とりゝ。雪王 さらふ又やゝ

もかふ〳〵山路ゆく秋やいろ〳〵

限りの色鳥のゝ多い故為、

桑鳶

和漢三才圖会 鶺鴒 青雀 鷽 蚊角雀 状鳩

とり小く頂黒く腹灰青色羽の末黒く白き斑あり、

背微曲て厚く浅黄色尾短く好て豆粟を食ふ故ふ豆甘美と名づく俗以て豆鵤と名づく常ふ鳴て春月ふく囀る此志利古木利とゝ。

伊須

加鳥

正字未詳 同上 状鶺鴒のごとくふ〳〵て頸背蒼く又腹臆最赤く紫あり背青くゝ〳〵

翻譯 又とふゝ故ふ事物

翻譯と伊須加の背とりゝ。

九月

生王祭

九日

神社啓蒙 生王の社ハ摂津國東成郡天王寺の辺ふあり祭る神一座天の生王の命。社家註進記 明應年中本願寺の僧ゝふ来ゝて寺院と創し神地と以て境内ふ接し神其不潔と惡ゝて彼僧と罰を僧ゝをして神殿と今の旅店の側ふ遷し、こゝ〳〵造営を其後信長の兵火ふかゝゝ殿社灰燼とゝ。縱ふ神主と別所ふ迁し、慶長年中秀吉城廓と築ゝの日、今の地ふ迁し、

○例祭九月九日、神輿一基、遊行流鏑馬あり、社内ゝ

十坊ありそのうち南坊と別當寺、

岩倉祭 十五日

八所明神の社は洛の北、長谷村の西岩倉にあり、王城の四隅に岩倉と置るこゝ其一なり、

[拾芥抄] 大雲寺岩倉觀音○親長卿記に云、文明三年三月廿九日、岩倉長谷の觀音に參る、十一面圓融院の御願、日野中納言文範卿草創なり、○鎮守岩倉大明神、所謂八所と八、八幡 加茂 松尾 山王 住吉 春日 新羅 大座是に太神宮 貴船 稲荷 平野と加へて、以上十二社なると十二所明神と称す、是大雲寺の鎮守にして、土人本居神とす、例祭九月十五日、神輿遊行す、神主八村中の氏子交るゝ〻と勤む、大雲寺衆徒四人名代として公人法師二人供奉、夜宮に大炬火二ツ立、深更に及て角力五番あり、

[滑稽雜談] 俗に岩倉の尻〻き祭といふ、夜に入て神供と奉る、一村の内新婦どもらして、婚礼の服と着せ〻め、神供の器と頭に戴き、神前にまゐる〻、一村の老若ちいさき枝木と持、新婦の尻をうつ、新婦うつまゝにこゝるゝと、立まわり、故に尻〻きといふ、

一宮祭 十五日

○河内国交野郡北枚方村にあり、祭る神牛頭天王八王子、北野の天神、摂社、帝釈天王、服立寄姫大明神、淺原大明神、鎮座年暦詳らかならず、例祭九月十五日、今八十六日神輿出て、神楽神湯ホあり、氏子八郷坂村 小倉村 招提村 田口村 甲斐田村 中宮村 禁野村 濃村是社僧神宮寺、及社家岡田氏記す處、又一説に一宮平岡大明神八、河内國河内郡にあり祭る神天の児屋根命姫大神、香取神、鹿島神、若宮の社末社、社神武天皇の御宇鎮座、例祭九月八日九日社務水足大炊、下称宜神子五六輩、皆農民なりてこれと兼務ひとしく、

伊勢御遷宮 紀事

九大社造替毎に陣の義ありて、時日と定らる、勅使あり、伊勢大神宮春日の社廿一年を經るときは必造り替あり、遷宮の時納る所の神宝、行事官、調進をこの月伊勢參宮の人多〻京師と出て、十六日の御祭會並に御遷宮あるもんとせ、九參宮の人、先霊山の國阿の像に詣て、その杖履と戴拝す、相傳に國阿深く太神宮と信じ、時〻木履と着、杖と携へて參詣とゝまず、終に行路の難あり、故にその福に倣ひて以平安と祈る〻、○二十一年毎に遷宮あるゝ故に十五年

り木至るとき木引かしめあり、三年うゑて木引成て又三年木拵のことあり、材木ハ木曽山並紀州大杉山より出ス○内宮御鎮座ハ垂仁天皇二十五年三月外宮ハ内宮鎮座の後四百八十四年と經て雄略帝の時遷跡く、

色ふ

ち風 九月の風なり 新古今 ものおもふころのいろなき風もあはれとぞ聞く秋のこころを 久我内大臣

隱君子 菊の異名なり 范至能菊譜序 山林好事者或以菊比君子其說以謂歲華晚矣草木變衰乃獨燁然秀發傲睨風霜此幽人逸士之標雖寂寥荒寒而味道之腴不改其樂也 愛蓮說 菊花隱逸者也

いあて草 菊の異名なり 藻塩草 長月の九日よさくいあて草花八重そ百代ぞ

毬栗 其實苞中に在て未地に墜ざるとゝふ毬和名抄

無花果 和漢三才圖会 其實枝に似て本窄く俗に唐枝とゝふ一月わゝて熟す故に一熟と名づく其樹枇杷に似ゝとゝ然らず葉苧麻に似て小く皆色淡く潤ふ文理隆明なり五痔を治すと

識て魚毒を治

櫟 櫟に似て花ハ栗の如し實ハ雄より少しく大く木硬くして多く船の櫓に作る 藏王 秋もそ色もそゝくの實を以て秋とも

色見草 ころのいろ見草ちらまくをしき山

色不變松 荀卿曰隆冬と經て凋まゝ雪霜と蒙りて愛せゝ其貞と得とゝふべし 新拾 いろゝなる色の山のこゝ

岩蓮 花の松君をそ千世の友とゝ 入道前内大臣

花 大和本草 岩蓮花俗の名其草の形葉のゝ恰も蓮花の開るゝ知し異名或ハ云佛甲草是なり

鰯の黑漬 豫州の産なり宇和鰯と称ゝとゝ製両鰓と切削て鮓とゝ鰯の性と非なり腸の中に黑汁あり塩水に和して其魚黑しゝとゝを黑漬とゝふ

道忝 九日 迎鐘 山城国名勝志 八道八五條の末北禎賣 建仁寺異の角にあり今の建仁寺大昌院管領也藥師堂あり是珍皇寺の本尊○雍州府志 弥皇寺八弘法大師の開基なりて元葬場

ろ 七月 六

小堂ニ地蔵ヲ安置セ、世ニ六道ト称セ、傳ノ云フ所、其逢ヒ遇セ故ニ小野篁この所より親ら六道ニ行て帰ラリヤ、是ヨリテ、毎年七月盂蘭盆前、九日ニ男女泰清、紀事今日諸人六道地蔵ヲ詣て、男女鐘ヲ撞て聖霊ヲ迎フルトイフ、各槙の枝ヲ買て携帰る、又新穀ヲ買て聖霊ニ供ス、是ヲ祖ト称ス○六道森ニまうで槙の枝ヲ買ひて家ニ入ル、霊前ニおく、俗聖霊槙の巣ニ乗テ来ルトイフ、是聖霊ヲ迎フル意ナルベシ、古事談 珍皇寺の別當業云、當寺の鐘ハ慶俊僧都こまとを鋳る、慶俊入唐の時留主もる僧ハ、いらく、此鐘土中ニ埋三年ヲ経て堀撞べし、衆僧三年ヲ待ハ堪ヒ、絶ハ一年ヲ過ベシ、てこまヲ堀、楼ニ掛ク撞ハ其声唐ニ聞ユ、慶俊日我寺の鐘声ハ三年ヲ待て是ヲ掘、楼上ニ掛ル時ハ、撞ヲ待て六時ニ声ハ三年ヲ待て是ヲ掘、楼上ニ掛ル時ハ、撞ヲ待て六時ニ声ハ聞ベシト、歎惜セ、○かゝりの所謂ニて、聖霊ヲむかへ迎ヒ撞ヲ、是ヲ迎鐘トイフ、○六道ハ桓武天皇延暦十三年長岡より今の京ニ遷サレ、ときに諸人の葬場ト定メラレ、よりて遷都記ときこえり、本尊薬師製傳教大師の作、七佛薬師のその一とぞ、

初涼

王勃鰲詩云、昊天清旦高秋風発、初涼

墓参

七月朔日より十五日ニ至リ

て、各祖考の墳墓ニ詣ることと唐山の人、清明の日上墳祭掃ニ同ジ○源順家集ニ七月十五日ごんゆくさせて山寺まゐりする所にてくめとれる蓮の葉をひろこ露おく山ニ我ハきぶるゝ、是盆の墓参ニ、和漢文選 前文一家を書之

ニ杖ニ髪の墓まゐりはゆるこゝろのかくこゝろぶらふ芭蕉評ニ云、故翁伊賀の西麓帝ヨリ例の文稿とゆるしたまふ、今思フニ白髪の冤祭ハ其日の感情ハ演ずること発句ハ祭る姿にあらず、此故ニ参の字と以て歩行の様と形容せしニ当李の詞も慥ニ増て切字の入所りニ、此等や有様躰と云て、まゐるこゝろのうつくしさぶらふと下の句と云ひ次て、俳諧の

蓮の飯

いの部生身魂の条ニ註セ、

花燈籠

造テ花ごとくして美ニ飾

初鳥狩、初鷹

貞徳曰、とや出の鷹ニ、はじめてつくふと、初鷹とも、初鳥狩ととゝいふまり、鳥屋出の鷹ニ、夏の羽のぬけかはるを鳥

屋にこめて羽の出そろひたると盆の聖霊の箸とよりて夜鳥屋より出るをよりて箸鷹とも申ときこゆ○小鷹狩の条をも見合すべし

鳩吹　鳩とるとて手を合せて鳩の声のやうにふきなすをいふなり［八雲御抄］［歌林良材］［藻塩草］［袖中抄］等説同し［炭俵集］名月や誰が吹おこす夜の鳩　酒堂

花火［和漢三才圖会］燈籠に代ふべきものなり又夏月河辺の遊興にもこれを［御傘］正花と持之

萩［和漢三才圖会］天竺花ハ花史にみゆるが如し桜ぶるに枝葉長く垂地と蔽ふ状糸櫻に似て一樹三葉束の葉に似て又南天燭の秋に似て尖らず柔軟之秋小花と着淡紫色俗専ら萩の字と用ふ奥州宮城野方二里ぞり萩生茂り山萩あり白花の者あり白紫開分の者あり○或書に宮城野の萩ハ草にあらん本萩くらぶといふ作る木あり梢に青き枝生て其の枝に花さくなり○ともゑあの萩鹿鳴草古枝草糸萩小萩さる其萩に其頭字の部にわちて註せ

萩の錦　錦にまくてふなり［新後拾］ひくまくあかてぞはさる秋ちきの花のにしきの露のたてぬき　法皇御製

萩殿

萩の戸［禁秘抄］萩の戸ハ常の御所之［八雲抄］萩に限らずと色々秋の花を植らる清凉殿の西の方貳間の前［五社百首註］菊戸萩戸同しとこそ

蓮の實　とふ　孫綿頌曰其菂秋至て黒くして水に沈む石蓮子とも○山谷詩倒剝收蓮菂云々こまも蓮の子の房中より抜出る穴を剝と見立し也

初嵐　あらし［和漢三才圖会］山の氣を嵐といふ蜀音に山岳不正の氣といふ是より今初秋以後朝夕山より吹風を俗に嵐と名つく［連哥新式秘抄］初嵐ハ七月末より八月中ごろまでの風なり

絡線虫［こくろせうと］六月の内より鳴初て七月中ごろまで野最の中昼盛に鳴く其声ギイスといふが如し一二声の内にチヨンと舌打を俗是と蛩と云て小籠に入て市に賣て小兒の翫とすその形蟲螽に似て大なり是をさわぎともギイスといふ機蝶の音チヨンと箴打音あり又ギスともいふなり［續猿蓑］夏の附合に砂と這ふ藤の中の絡線のこゑ　沾圃

蟿螽　はたはた　蟲螽の属長サ三四寸身ほそく痩て方ある首両額に眼あり目の上に二ツの鬚あり翅灰赤色黒

點あり腹の下白く善跳て捕へゞ

櫨 和漢三才會会黄櫨以て黄色を染

さゝ〇今の俗ゝとをゝらさゝるふ、

む天子の御袍黄櫨染と称ゝ是あゝ帛と染て上ゝ

磁水と用ゝ暑染をゞ黒茶色とあゝ其葉小く淺青色、

莖微赤し三月小白花と開き細子と結ゞ秋に至て紅葉

も亦美し 漆 漆の類多して葉柳の如くあゝて滑ゝ元山

木今世子と採て專ら蠟燭を作る、

依て多く平原の地に植て利とす、

兼三秋物 廿

日 亥中月 廿日の亥の正刻

に出る故あゝて、 簇芒 袖中抄花芒紫也

同じひゝきあり或ハ万葉裏書に芒と薄と穂

を出て簇とさゝけゝるゆゝうゝる薄といゝて能因中し

けゝと

花野 千草の花の野に咲ゝまてゝるといゝく、

ぞゝ云、

野の花とゝきハ花休とあゝて野ハ

用ゝゝ花野とゝふゝきハ野、

芭蕉 大和本草 本草に

休とあゝて花用ゝゝ心得し、

濕草に載せ軟に

ゝ地に植て茂易し春葉を生じ秋に至て上形多根

莖枯て年々發生も冬と歴て大ゝく黄花と開く極めて

稀〻東鑑に其花と優曇華とゝゝよゝ〻まゝるせゝ、

葉雞頭 雁来紅をゝゝゝ、

加の部見る べし、

薑 和漢三才會会 生薑音姜今俗多く姜字と用ふ 剌

我の音ゝとて未其擾ゝとゝゝゝゝ 倭名抄 生薑 久礼乃波之加

美 蜀椒 奈留波之加美 蔓椒 以多知波之加美 吳茱萸 加波波比美

以て考ふるに往昔波之加美とゝゝふれハ辛果の總名と

蓮芋 其葉荷葉に似て四く其根栗の形の如し味

美あゝ或ハ呼て栗芋とゝゝ、茎ゝゝふ水中に種る

もと蓮芋とゝゝ、園圃に

種るものを栗芋とゝゝ、

彈 うの部案山子の条に出ゝ、

班龍 鹿の

異名

鮒 和漢三才會会 彈塗魚俗波世川の末海

ゝゝ、

鈎 近き處に多くこれあり常に水底と昏

行小鰕と以て餌とゝて綸の端鈎と去ると二三寸許の處

に鉛の錘と著鈎と地に附しむ微動の響と候て竿と揚く、

秋月貴賤以て遊興の一ツとゝて形色鯽に似て小く細鱗

體畧滑にして口濶く腮大に眼上に向く、班點微黑と帯ゝ

尾に又小斑あり、 虎彈魚 納彈魚 飛彈魚 ホの類色し、

八月 八朔 田の實の節 憑の節供

特牛の節 紀事 凡毎月朔ハ吉日ゆゑて相賀ぶもの中田面の節 華と同し、今日殊ふ八朔と称し、又特牛の節と称も、又田面の節と称も、又憑の節供といひ、或ハ田實の節と称も、又田面の節と号も、中世農民稲の初穂を 禁裏ハ献ぶ故ふ田の實の節といふ世ふ又其訓と借用て、憑の節供と称も、蓋君臣明友相依て頼の義ふ取、君臣明友の明互ふ贈答の義あり、今日貴賤各白帷子と著し互ふ慶と修も、公事根源 八朔の風俗、後嵯峨院潛龍の時、外戚源の通方卿の亭ふ在〻ふ、近習の男女密ふ斯義とふして、賜素を慰め奉る、後皇位ふ即くあ、不来嘉事と云、

初月夜 或説ふ四日五日六日迄をいふ、

初潮 初月を賞する、三五の月を待ところよりいふ、

あるべし 核叢集 栗柯とめたくあり、初月夜半残、十五日の朝をいふ、説ふ初潮の初の字ふ某月の潮をいふ、

五雜組 海潮八月獨大なる、何を以、潮八月ろ憑もるの故ふ月望ときこ潮盛ふて八月の望尤盛、

御傘 伍子胥ろ死靈、八月十五日夜ふ風波をおこすと云

箱崎祭 十五日 神社考 筑前國那珂郡、此社ハ誉田帝の祠あり、博多ふ近し、○祭る神三座、中ハ應仁天皇、東ハ神功皇后、西ハ武内宿禰ろ、仲哀天皇三韓を討んと欲しまひ、神功皇后ろふ筑紫橿日の宮ふ至て給ひ、軍旅を催こと、この時、天皇崩御あり、この時皇后懐妊臨月ふらんとを乃自ら男子の貌とあ〻弓鷲斧鉞をとらひ、祝て曰、請、征伐の後降誕ぶられと、三韓ろ〻〻平定し、筑紫ふ歸りくあ、男子降誕〻あ〻應神天皇是ありこの地を立て宇佐邑とい〻、恥衣を宮ふ籠めて地ふ埋み、松を栽て標ふもその地と呼て箱崎と号ハ、醍醐天皇延喜廿一年六月廿日、託宣ふあ〻て宮と宮崎の松原ふ遷ふ、例祭八月十五日、○古老傳て云、昔この松原ふ戒定慧三守の箱を埋む故ふ箱崎と号も、松をその所ふ植て標とも、その松猶在〻て、縁起 昔白幡四流、赤幡四流、虚空ろ降其所ふ松を栽て標くも、故ハ八幡の号あ

貞享式 御傘ふ正花ふ春迄ふ異ふ、

花笠 細ふ穿鑿をれハ種々の理

屈あるとどおの分にて置方ゞよきこゝろうこ如何ある歟
事ゝ考ぶ今按ずるふ花檀も花畑も共に秋ふ定
むべきなり○花畠 初花初櫻といふ同
ハ草花なるまバなり、**初紅葉** 初花初櫻といふ同 [新拾遺] タいく山
本々の梢のもろもろ、けさの
もゞ色ふあがそ染る 宗良親王

薄荷 [和漢三才圖会] 薄荷、薄荷、
蕃椒菜ふの諸名あり、本綱曰二月宿根より苗と生ず、
清明の前こゝと分つ方ふる莖赤き色其葉對生、初
時形長くして頭円し長ずるふ及て尖る其莖葉茎う
似て尖ると長し冬と經て根枯ぬ翌ふ出
花紫 [花彙] 大和地方多く藝春種と下す長ず
苗の高さ一尺以来葉ハ謝落金の葉ふ類し
て小さく、又俗ふよぶ琉璃草ふ似くり差互して生ず三月
花と開く梢の葉の間ふあり、形状円く瓣五出ゆて内
ふ黄鬚ふ一又瑠璃草の花ふ異なりとふ一さくそのの
色白し又粉紅及ひ黄色のもけあり、下ふ長甘苟あるて
ことゝくく実と結ぶその形円く尖まり、莎ふ類して
大なり、秋ふ至て熟ず黄白色なり○按ずるふ御傘

ふの俳書ふ花紫と秋くゝ、若紫と春ゝ然るふ本草花
彙ふの説三月花と開くなり、紫草と種て試る人あり
て曰、此草秋種るものハ春花と開き春種るものハ秋花さ
くと云て御傘ふ花秋ありと云くるも亦據ふとふあらず、
○絹帛を紫ふ染る者此草なり、**花芒** の条ふ出ル、**濱木綿の花**
[大和本草] 和品濱木綿万年青ふ似くり俗濱おもとといふ、
海辺ふ生ず七八月白花と開く、莖高く出て只梢ふ
数花あり、まりひらく、巻丹の花の形ふ似くり好花う
あり、秋実と結ぶ花咲る跡ふ數顆ありて一顆の
大さ胡桃の如く、内ふ核ふ白肉あり、中 畧 馬信曰今按ふ
西土ふもあり、濱芭蕉といふ紀州熊野ふ多し甚ず雪寒
と畏る宅中ふ植て八冬月葉なて厚く包ず或ハこもて
ておわふべくしなるせざるハ枯る、盆ふ植て屋下の暖き辺
ふ置べくし海濱ふありてハ潮風温にて雪早く消る故
なるべし二種あり、一種ハ葉柔く薄く其莖の皮多く重
まり是百重なるとなくしふ云ふ一種ハ葉つよくあつ
く莖の皮重ならず [万葉] 三熊野乃浦乃濱木綿百

重成心者雖思直ニ不相鴨人也 滑稽雑談 此者
末俳書ニ載ル然ルトノヘドモ古哥ニ多クアリ、尤花と
以て李ニ

針蕈 和漢三才圖会 鼠茸ニ似て繻あり、
長さ二寸ばかり、灰白色平地ニ叢生
ス用ル、

初茸 同上 浅山松樹の陰處ニ生ず、狀松茸ニ似て
小く、初生より傘ありて、内ニ細き刻あり、内外
赤黄色、立秋の初ニ出ず、柔ありて味
甘く、諸茸より先ニ出ず故ニ初茸と称ス、

白雁 白くして、
翅翮黑く觜と脚と赤色、其肉脂少し、凡中秋白雁先
来て雁金ニ至ル次ニ真雁又ハ次て遅し、春ハ真雁
先て帰り白雁ニ至ル次ぐ、

初鰍 和漢三才圖会 鮭ハ鯉の本字
魚臭あり、正字未詳、狀鱒ニ
似て円く、肥大なるもの二三尺、細鱗青黄赤章腹淡
白く肉赤し、細刺あり、脂多く味厚美、頭の枕骨軟る
ありて瑪瑙の如し、氷頭と称ス、味亦佳ク 大和本草 本
邦東北州の大河ニ多し、南州ニハ之なし、和名抄曰鮭
和名佐介俗鮭字 鮏 鮭の子ニ 同上 其子二胞あり胞
と用ル非なり、 鮏 中數千粒明透上ニ一紅點あり、

鮏と云ふ又筋子
甘子と云りあり、

放鳥 やの部八幡 祭の条ニ詳ス

九月海 九月

瓶廻 紀事 この月九日、小兒小石を以て海螺の殼
と穿ち、鉛と鎔して売の内へ入れ、或ハ洲濱飴
と売の内へ充て、其力を助け、各緒を以て海螺を纏
ひ勢ひ来して臺中ニ投入れ運轉せしむ、その力つよ
きものハ其力弱きものを盆外ニ出を互ニ勝負を争
ふ、之を海瓶撃と云ふ、席の両端を巻て之を盆と
云ふ、 和漢三才圖会 いづれの時より始ることを詳ニ
夫野人の玩ぶ所なり、海螺の売を用て、頭の尖ること碑
き平げ尻の尖りと摩ア四め、糸繩を巻て引て之を
と席盆の中ニ舞ふ、二三の螺を以て勝負を爭出
さるる者ど負とも、その先ニ入るものを伊加といふ後ニ
入るものを乃宇といふ、之を一打合て同く出るときハ伊加と勝とも、
張とのふ張のときハ伊加と勝とも、

婆利女祭 凡熊野より云る海螺夏ハ堅し、
廿日○婆利女の社ハ洛陽高辻の北室町の西ニあ
て祭礼昔ハ七月なりしを中ごろより九月廿日とな

雍州府志 繁昌の社、元針才女と祭る所やしろ、實ハ舞才天なり、針才女と繁昌と、和語相近し、依て誤傳ふるあり、宇治拾遺 むかし出雲の前司なる人のむすめ、此所にてうせにけるを葬てとさめんとて、鳥部山に具行なりけるに、その死骸やしろの所ふつりて後ハさらに動うごかべくもあらざりけれども、せんかたなくて、此所にとどめ侍りけ、その塚のもとに六七間ばかり、人も住つゝ荒地にて有けるを、後に何人かやらん社と建つゝ侍りけ故有て舞才天と祭れり、

簠簋内傳 牛頭天王娑竭羅龍王の三女と娶たまへり、その名を婆利女といふ、○安藝嚴島の弁才天女娑竭羅龍王の才三女なるゆへ、いひつたふ、その母ハ婆利女を弁天といふ、もとこと故あるにやらん、○大閤秀吉ハ、社と東山佐女牛の八幡宮の傍に、ふもとの所に安置せとこ、祟つるをふるふ、ふもとの所に安置せとこ、

花の弟

異名多類 花の才といふハ、ろく の花にをくるゝて咲ものをふるいとど、夫木 もゝ草のもゝあのゝとゝとゝあるゝ、とゝ八重 くゝふのゝこゝみゝゝるゝゝ 萬葉 頭、胎

榛 時珍曰榛樹低く小ゝして荆のゝ、

最生も冬の末花とひらく、榛の花の如し、條とゝし下垂る、長さ二三寸、二月葉と生も、初生ハ櫻桃の葉ゝゝし、皺文多くありて、細き齒及ひ尖てあり、其實苞とゝゝ、三五相粘、一の苞に一ツ、實をゝして榛の實の如し、下壯に上鋭し、生ハ青く熟もれハ褐ゝ、其殼厚くして堅く、其仁白ゝして圓く大さ杏仁のゝとし、亦皮に尖てゝり、然もゝども空ゝかの多し、故に諺に十榛九空、その葉悉く皺む、依て和訓ハしばみ、実を以て秋季と、

柞 ゝくの世ゝ 山木なり、高き者二三丈、葉ハ柏ふも、似て秋紅葉ゝゝ、冬落つ、城州柞の森名所なり、且奈良の西南に祝園とゝふ所あり、城州の内ゝ元柞園ゝ、後祝の字に改む、祝園の神社春日大明神ゝ、此神の森皆柞の木にして秋甚さ紅葉も、他邦にも稀なる木なり、

番綿、番船 摂州大坂にあり、江戸へ積出す綿ゝ、その廻船に一番二番三番のりゝ、江戸へ着岸の遲速を以て損益を定む、商賣專ら勝負を爭ふ、

初鴨 貞享式 此名ハ全く新撰なり、或ゝ賞翫ゝゝ加減ゝもゝゝ、今按ぶに

奉勝式ゝと雁鴨と並あげゝ賞する処ハ秋冬の差別ありさまなれども見聞の姿情と論ぜば、初雁といハ風雅と思ひ、初鴨といハ風味と思ふ美と天眼とも天耳ともいへども、警ハ初雁と音ふ喚とも風味を充ふ思ハべきや、鴨の冬ものゝハ勿論なり、初の字をこゝ〳〵秋とかまゝ爲さん、

肌寒

秋声賦 其氣慄冽砭人肌骨

江次第 乞巧奠ふ御所うり筝一張を申正、

七月 庭の立琴

東北西北の机上の妻ふ置く、註ふ延喜十五年の例和琴を用ふ裏書ふ云柱と立るふ三様あり、常ふ半呂半律と用ふ秋の調子あり、公事根源頭書半呂半律とハ樂書ふ云黄鐘調大食調ハ律呂の調ゝ半律の調也、

夫木 ものゝあハれとのあふ夜の庭ふかく琴のあらしふ引ハさゝりふの糸寂蓮

新綿

藻塩草ふ

十六日あり、内裏の貢の綿あり〇俳諧ふ

ハ貢ものゝぎらざるハ作者ものゝうゝ多〳〵、

二百十日

正月の節立春の初日より数へて二百十日とハ此ろ秋の最中ゝて、金氣殺伐の氣意動する時ゝ故ふ必風雨あり、此時節中稲の花盛ゝそ、その花とそこなもんと

農民恐ふ續猿蓑 公羽草二百十日ゆ恙ゆ萬平ふ

廿六夜待

江戸の俗今月廿六日の夜月の出ふ三尊佛の影向を拜むとて、高輪ふ群集を、此夜蔭芝居手踊、或ハ音曲八人藝うつし繪等と仕組者あり、是と一夜藝者といハ、酒樽ふ月と待遊客是と招て與とゝ、又出賣菓餅餅ゝ〳〵の商人来て賑〳〵ゝ土人幇間虎八云、土人廿六夜祭〳〵称ふ其由来と尋るふ審ふ〜〜む〜〜近村の民、此處ゝ来て海岸ふ生る菰を折取圓座ゝて月のぼるを待〜〜このへん今聖美棚ふ敷さる菰と敷物ふ賣ハをの名殘なるべ〜〜云云此外田安の臺湯島の社地、群集ゝ高輪の賑ハひ及べ、

兼三秋物似柳

卿所柳ふ似て肥滿ふらゝ、味大ふ劣る、

八月 庭たゝき

鶺鴒こせの部るゝし、

濁酒

醪ハ汁滓の酒なり、和名毛呂美今俗濁酒とい、

九月 鬼笹前

良安云衛矛和名久曽末由美

其葉秋ふ至て紅葉す、面色丹の如くゆゑて青赤相
襍錦の如し、故ふ俗錦木といふ、子と結ぶ一顆ふし
て尖こ小正りて紅まり、信州野州の山谷ふあり、

ほ

七月 星合、星の契

齋諸記 天の河の東ふ織女あり、乃天帝の子ふり、機梭ふ労役して、容を理るふ遑あらず、天帝其獨居を憐まて、將ふ嫁せんとして、河西の牽牛に天ふ與ふ、嫁して後竟ふ女工を廢を、天帝怒つ責て河東ふ歸らしめ、惟一年ふ一會せしむ、

星祭、星の手向

周處風土記 七月七日の夜庭を洒掃して、露ふ几筵を施し酒脯時の果を設、香粉を河鼓織女ふ散し、注云二星辰会まるふ當て夜を守る者皆私願を懐く或云天漢の中を見るふ爽爽たる白氣あり、光曜五色あり、此をもつて徴應ありと、見る者拜して願ふ富を乞ひ壽を乞ひ、子まをさい子を乞ふ、唯一を乞ふると得、兼求ることを得むと、三年あして是をとりへ、願る其祚を受る者なり、○牽牛、犬飼星、織女祭、河鼓、秋さり姫、薫姫さゝぐふ姫、百子姫、糸織姫、朝顔姫、梶の葉姫、ゝとめ〜妻、梶の葉、天の川、秋去衣、石枕、九枝燈、庭の立琴、紅葉の帳、火取香、願の糸、衣裳を曝を、芋の葉の露、素餅、銀河、銀漢、雲漢、烏鵲の橋、紅葉の橋、年の渡、二星の屋形、乞巧奠、乞巧針、乞巧瓜、七箇の池、百箇の池、妻迎舟、妻まし舟、七種の舟、以上各頭字の部ふすちて註を、

星のかし物

いの部衣裳を曝す

星合の濱

増山の井 伊勢ふあ

ま、星の逢ふ所まり、

本願寺の籠花

七日 紀事 昨日の晩、東西の本願寺末流並家礼花數種を以て船の狀と作て又槽の形を作て中ふ草花數品を建て、御門主ふ献ぜらるゝと堂上ふ立ちべ

盆市

草市 荷の葉賣 麻ら賣、盆大鼓賣 おく今日七諸人これをとる、

紀事 凡七月街市ふ大鼓圍鼓大小、加伊羅木、三尺手拭、寺特頭巾、作鬚、金銀箔の紋所ふと賣是盆踊必用の具〻又盆前截子燈籠、亀、臺燈籠、亀、金灯籠、草挑灯、小行灯と賣是皆中元の夜点ぜる所〻又索麺、梨

乾瓢茄子、角小豆、空閑梨、木蘇枝、鼠尾草、荷の葉
麻ら、大小の土器供饗膳、破子、くんあらけ水と賣是民
間聖灵会

穂屋

みの部御夜山

鳳仙花

時珍曰其花ハ
の處用〳〵祭の條ハ出ず
頭翅尾足具まり、翹然として鳳の形の如し故ハ名く、
三月子と下し五月再び植べし苗の高さ二三尺莖ハ紅
白の二色あり大指のごとく中空あり脆し葉長くして
尖り桃柳の葉ハ似て鋸齒あり梗の間ハ花とひらく或ハ
雜色亦変易まり狀飛禽の如し夏の

木瓜の子

初より秋の尽まで開謝相続て実を結ぶ
時珍曰其實小瓜の如くして臭あり津潤ハ味不木ま
るものを木瓜と呼臭ハ乃チ花の落し處臍蔕ハあらず
木瓜灰ハ焼て池中ハ散すれば魚ハ毒をとべし、和漢三
才圖会世ハ木瓜と称をものを本草の註ハ合ず是木
桃わ〳〵て木瓜ハあらず武州江州より多くこれを出す、
藥肆以木瓜ハ充道頃唐木瓜といふ者あり人其花を愛
ま是真の木瓜なり

穂掛

藻塩草田舍の稲のごとく初め新
らき藁のすりめをとくめを入
て穂と組合せ門戸あるとくらも
掛て神ハ奉るを、ほくのをとこと
ハ

兼三秋物鬼

灯

和漢三才圖会酸醬五月小花を開く純白其色赤
白色あり蔕ハ青し宿根より自ら出る小児中に
白子を鑿去空殼をとりて舌上ハ含て厭吹ば紙ハ
音あり○今の世ハ童のあそびを吹ハ栄花物語
初花の巻寛弘五年の所ハ御色白くこれ花
ぶとと吹ものとて源氏物語野分の巻こわいぶきとて
いとめるをふくらかして南瓜時珍曰南瓜
いとふるさと事なるべしと醒齊記の種南蛮ハ
子出三月種を下を沙沃の地ハ宜し四月苗を生ず蔓
と引ばと甚繁し一蔓十余丈延て節々ハ根を下り
地ハ近て即着其蔕中空其葉の狀蜀葵の如く大ち荷
の葉の如し八九月黄花をひらき瓜と結ぶ正圓にして大
さ西瓜の如し皮の上ハ稜あり甜瓜の如し一本ハ數十
顆と結べ〳〵其色或ハ緑或ハ黄或ハ紅あり霜と経て
収む暖處ハ置ハ留て春ハ至る〳〵一種南京瓜
一名東埔寨一名唐茄子本草南瓜の下ハ所謂陰瓜

是、螺芋形螺に似て大し、故に名つく、ほど鶴志の部鳴の条に出ず、星

月夜 つくよ 闇に星の多くて明きを夜とす、東花式古物に星月夜の名を
あり、秋季なり、あるいは云捨て月に去嫌の論あるまでも、
是、秋なりと月をあはせ、発句服部三子そこに此名目なる
ときは其三句に素秋中なりて七句目の月の座に他の季
なりて異名とまぎらはしとまらは例の埒ありとまぎらはし故
翁芭蕉の遺訓なり、

八月

誉田祭 十二日 河内國長野山護國寺地蔵院

の縁起に云、當社は人皇十六代應神天皇の御陵なり、
母后神功皇后の御胎内にはらみて三韓征伐の後、
筑前の國に於て降誕御腕に鞆の形ある故に誉田別
の皇子と号し奉る是弓矢の家と守護まします、
此時に顕まさず治世四十一年仙齢百十歳の春、大和
國豊浦の宮に崩ず、王躰を瑪瑙の棺に納め、河内
国藻伏の岡に葬り奉る、三十代欽明天皇の勅によ
りて宝殿を營み三所の神明を祀る、所謂中殿は八幡

大菩薩、左は仲哀天皇、右は神功皇后なり、世に神祠多し
といへども、當社は王躰を納め奉るの霊廟なりて八幡
宮の根源威験深きものなるべし、元亨〇神祭八月十五日
なり、先ッ十四日の夜奥の院の御廟前本堂に鳳輦を行幸
ふり、翌十五日午の刻還幸舞樂あり、四月八日若宮祭
申祭児舞隔年ふるまひと行ふ放生会は當社にこまとまた
よりは但し社説の逃と記す、

放生會 やの部八幡廿三日の条に出ず、

肥前國長崎に於て来船人船神と祭る八月廿二日これ
をぼさまつりといふ、和漢三才画会舟の神と媽祖祠々
との人俗ぼさと舟菩薩といふ唐船長崎に来て往々祭
る所の神是なり、船中の品物と水揚
とて四ヶ寺あり、福州は石灰町崇福寺漳州は下筑後
町福済寺、南京は寺町興福寺、この三ヶ寺昔は唐僧
住せ今は看主持なり、外に目付寺にて筑後町に聖徳寺と
いふあり、昔より和僧持なり、ぼさ祭の日は和僧の唐將装
束にて法事修行あり、本尊は観音なり、此日来船人と
その寺院へ参詣して其異体とうんとして諸人群集せり、

て、四箇寺に
ふ黄蘂流れて、穂花 花芒 芒の穂と尾花とのごとく
尾花 穂とふ〜〜る形獸の尾
ふ似くり、故ふ名く

牡丹の根分

和漢三才圖会 夏月川の圮を採晒し
まさ花芒ともふ、
乾し、古き畑の土と細き沙と以上三品節和八九月紅き
芽と出そと移し栽べし、そとを培ふ糞溺と用ふへ
らず冬月油渣と用ひて少し根の傍ふ入
る或ハ鮮魚の洗ひ汁と灌くも亦佳あり

頬赤鳥

正字未詳 和漢三才圖会 状雀あり小く背の色も亦
雀のごとし、其頬赤く胸白くして鳴鶉の文あり、声
音鶯ふ似て細く高し、
常ふ蒿間ふ棲む、

畫眉鳥

同上 俗頬白鳥
状ち鶯より大く、
灰赤色眉白く畫くが如し、頬赤白くして間黑し
背と尾黑點あり、翅尾畧黑く、尾の両端ふ白毛あり、
頸微赤黄色 臆下ふ赤き斑あり、其足赤黑く其声
四滑みして多く囀る、小鈴の音ある者、其声と謂て
行給諸鈴

九月

の名あり、

星見草

菊の異名あり 藏王
庭りせふさくて、

異名ふらても星ふ似せてよむあり 古今 ひさかたの雲の
うへふてゝる菊ハあそろ

鬼目

鶏上戸 うくゝせと 人
家の垣根ふ自
ほゝしそでのもまくれる、
然ふあと生て蔓草に、葉朝顔ふ似て小白花と開き秋
実と結び、秋季ともるめれハ其実と賞して、暮秋ころ
実甚く紅く鶏好んてそと啄む依て名く、

菩提子

○時珍曰 白英ハ其花とのひ鬼目ハ其子の形象る
校量類珠功德經 諸陀羅尼及び仏名と念誦
こゝろ、木患子ハ千倍より、浄土ふ生ぜんこと求め
む、此珠と受よ水精ハ百万倍あり、菩提子ハ無量倍、

うくゝせと

昔洛東建仁寺の千光国師宋ふ入此種を
得て帰朝し、筑前の香椎報恩寺ふ植つ〜〜ーよう
傳ふ〜〜ふくり、後其種と京師の寺々ふ傳てこゝと植、
泉涌寺六角堂叡山の西塔ふみあり、宇治の興聖寺ふ
子こ見と見る、一樹ふ巣二色あり、一ツの巣ハ椋ふ似て厚
ハ大く、又一ツの巣ハ木犀ふ似くり、其巣ふ莖ありて莖
より嫩ある細枝と出しそとふ花さき実を結ぶ、

其実淡黒堅硬にして念珠にして香氣芬々たり、興聖寺の僧曰、是経に説る菩提樹なり、天竺此樹下に於て佛成道正覚したまふ人樹なりといふ、樹の高さ一丈ばかり、枝極のふり百日紅に似て甚だ奇樹なり

杜鵑草

大和本草 和品 葉は紫亭に似て短く広く筋多し、又篠の葉に似たり、蒼は筆の如し、花秋開く六出あり、中ちう蘂出て又花の形となる、蘂ごとに小紫の點あり、杜鵑の羽の形に似たり、ちぢり染のごとし、莖の高さ一二尺ばかりなり、

兼三秋物

辨慶草

和漢三才畜会 景天和名以岐久佐俗にいふ辨慶草、本綱に景天極めて種易し、枝を折て土中に挿す、澆灌旬日便ち生ずるなり、二月苗を生ず、脆き莖微赤黄色を帯び、高さ一二尺、ときどき折て汁あり、葉淡緑色にして光沢あり、葉に厚く狀長き匙の頭及び胡豆の葉に似て尖らず、夏に白花を開き実を結ぶ、連翹のごとくにして小く、中に黒子あり、粟粒の如し、人皆盆に盛て屋上に養ふ、といふ火を辟べし、故に慎火草の名あり、按ずるに景天、佛甲草に似て大なり、こまと折取て撫間に倒に懸るに日と経て凋まざる、後地に栽るに亦活る、馬歯莧に勝れり、蓋辨慶は源の義經の家臣なりて、女童相傳へて强勢の士なるを、故に相比してこれを名づく、

以岐久佐も亦活の字訓なり、

布瓜

時珍曰、六七月黄花を開く、五出微胡瓜の花に似たり、蔕瓣臭に黄あり、其瓜大さすべし、長さ一二尺甚だしきは三四尺、深緑色、皺の點あり、瓜頭龍の首の如し、嫩なる時皮と去る、蔬に充て老るときは大さ杵のごとし、陰處に生ず、其織紅色裏白く細き刻有て毒あり、

虵蕈

大毒あり故に人近あらず、

虵

穴に入

八月

紅蕈

和漢三才畜会

月令 仲秋月雷始収声蟄虫抭戸○和俗春の彼岸に出、秋の彼岸に入るといふ、

七月

とゝ〻〻妻

とゝ〻〻は乏の字とよめり、稀少の義、

あゝこゝの稀なるとゝき妻、故に織女年に一度ゑれに

あゝとゝとゝ妻とゝとゝる哥あり、ぐるとと

璎もぐて活法の書ふ、織女の異名のやうふ〳〵出ぢ〳〵ハ、ろろし、かろぢ織女のいらへ有べし、年七渡織女の年ふ一度天の川を渡る意あり、万葉王葛不絶物可良佐宿者年之渡ふ直一夜耳、

燈籠

一切經音義燈籠又爐ふ作る、火の居所ニ允火を盛の器を爐といへ紀事凡中元燈籠を用ふる事、寛喜前後ふ起て、今ふ至て相續て故事ニ定家卿明月記近年民間ふ長竿を建てその末梢ふ燈籠を設け、紙を貼し灯を擧て遠近ニ見る、流星ふ似ること、五雜組宋の初ふ中元下元皆燈を張ること上元の例の如し、太宗淳和年中始てことをやめ、○本邦の俗、中元の夜家々燈を張て廿四日乃至晦日ふ至る、或ハ朝日より三十日ふ至るもあり、又白き提灯を出もあり、○高燈籠、折掛燈籠、花燈籠、禁裡御燈籠、キリコ燈籠、以上各頭字の部ふ〳〵ちて註ス、舟燈籠、影燈籠、舞燈籠、揚燈籠、層山の井ふ〳〵ろ〳〵ろ其形容未考、

燈籠踊

紀事洛北岩倉、花園、両村少年の女子、各大灯籠を戴き、八幡の社前ニ聚ツて、男子大鼓と撃笛と吹踊とをもくむ、是と灯籠踊といへ、頭上ふ載く所の灯籠、踊ル女子の家々、春の初ヨリ之を作ル所の模様と紀文云、

鳥居の火

焼の糸詩せの部施火

鳥屋勝

鷹新毛と生じ羽翼全く備ツて鳥屋と出るの時、逸勢特ふ称まべ、これを鳥屋勝といへ、○去年より八月ハ鷹ハ鳥屋ニ籠リ居ゆくすゑの秋ぞ、この秋ぞ、定家

蜻蛉

秋津虫 あきつ

桑華紀年神武天皇高きふ登ル、此ヤシマ邦の形蜻蛉ふ似ることを以て、秋津洲と名づく、和名抄蜻蛉和名加介呂布ふ〳〵ろとよ、ハ蜻蛉とよ、中略水辺の木葉ふすゝてその飛良数々と水ふ点し、問々と電のごとくふれ、陽炎ふ比して、いとまあり、和漢三才画会蜻蛉ハ總名なり、大小して青色ふる者紺蠻、一名天雞、大ふして玄紺ふ〳〵れ胡黎一名江雞、小ふして黄ふる者馬大頭、最大ふして身緑色、赤卒ハ小ふし、て赤きものあり、

富草の花

風俗哥あらくさふ

そもあてゐつゝ入てゝゆこへまる

らん、ゑゑ稲の花とい入しといへて、

三尺ゐすぎぎて、夏紅花とひらく花繁多

ゆゝて盛り久し、美ゐゝして愛を重し、

頼桐 天和本草 倭俗 唐桐といふ高サ二

苧麻 乙

唐荏 和名 唐荏又ゑらゑゝ、葉ハ大麻の如し、甚ど

大あり、夏冬の間花穂を抽て色黄ゝ、高さ丈余ゑ及

ぶ、實あり大

毒ありとぞ、

兼三秋物

番椒 天井字 和漢三才圖会

番ゝ南蛮の義ゑり、俗ゐ云南蛮胡椒、今唐芥子、二月種

と下し、実柳の如くゐて小、亦胡椒の木の巣ゐ似て和く

五月ゐ白花をひらき、実と結ぶ数品大小長短尖りくるる

と円きとの種あり、初め青く熟もれハ紅あり、秀吉公

朝鮮と伐ゝき、彼國より渡る故ゐ俗又高麗胡椒と

い入、〇天井守、番椒の一種、とぐく上とむく故ゐ名く

とぞ、

椒蓑 附 ちんぞう

まゝりいろゝ色つく、実

唐の芋 是を連禅紫芋と

い入、蘇恭曰毒少し、

煮て食ふべし、時珍曰連禅芋魁大ゐて

子少し、〇楚工紫芋と帯ぶ味美く栗のゝ、

烏芋 かの

部案山子

の条に出づ

八月

富賀岡八幡祭 十五日 名所記江

戸城南深川ゐあり祭る所鶴ゐ岡ゐ同じとい入別

當大乗山永代寺 宗深川ゐ一の大社ゝ或ハい入神体

ハ菅公の作ゑり、源三位頼政深くことと崇む其後

千葉家ゐ移り足利高氏ゐ傳へ、基氏持氏ゐ至り後

上杉ゐ傳へて太田道灌ふくくことを信仰を 磯石集

寛永元年長感法印夢のことありて永代島ゐ宮居

を建立し、同八年成就を、〇深川の土人本居神とす、

祭礼八月十五日放生会あり二三十年ゐ一度ゝ祭を行ふ、

豊浦祭 神社啓蒙 長門國豊浦郡亀山ゐ坐

祭る神中ハ應神天皇左ハ神功皇后右ハ

仲哀天皇ゑり、三十二社註式 人皇五十六代清和天皇貞

觀元年、男山ゐ近座の時行教和尚行宮を造ることを

勸請を、後土御門院文明年中建立を、〇今八月祭ゐ

三月十四十五日の両日亀山祭ゑり、ことと先帝祭とい入、

安德天皇の御祭礼ゐ、阿弥陀寺ゐ御陵ゑり、海辺

ゐ宮ゑりこの祭前後四日の間鳥飛ことを得ず又平

家蟹赤間が関の海辺ふ上る、常ハこのごとくなり〻是光帝の御祢月之と里民のくり、又九月十四日十五日、八幡春日両社ゑ奉る、國主より馬二疋と牽ゑ競馬あり、是八幡祭也、

烏頭 燕頌曰附子其苗高さ三四尺、莖四稜と作、葉艾ふ似て其花紫碧色、穂と作て其実細小糸様の如し、黒色本附子一物と種成熟をるふ至て四物あり、天雄 烏頭 側子 附子是也

黄蜀葵 時珍曰二月種て下し、或ハ宿き子土ふ入り て生ぜ夏ふ至て始て長ぜ、葉の大さ苘麻の葉の如く、深緑色、岐子を開く五の尖てあり父の爪形の如し、旁ふ小き尖あり六月花を開く大さ桃の如し、鵝黄色紫心六瓣ふして側てり且ふ開き午ふ収ず暮ふ落、亦呼て側金銭花とす其莖長きもの六七尺皮を剥く繩索とあるべし、

木賊 唐 錫 日木賊苗の長さ尺ばかり、叢生ぜ根毎ふ一幹花葉もふく、すべふ節あり色青く金と変て凋ぜ四月こまを採、○時珍曰木骨と治る者ゑ色と用て磋擦ゑ八光浄あり、木の賊とのふが如く、

和漢三才富会 物と磋

と磋の如く故ふ磋草と称す、

○本邦秋月ゑ是を採る、

胡黄連 千振 和漢

三才富会 苗の高さ五六寸一根ふ数莖其莖細くして淡紫色、葉地膚草ふ似て小く七月花をひらく桔梗の花ふ似て大く黄色、○千振 天和本草 胡黄連ハ黄連千振と云、秋白花をひらき葉細ふ味甚だ苦き小草山野ふあり、たゝやくといふ、

酸醨酥 天和本草 酸醨花の條下ふ云本邦のハ白花千葉菊の如く依て筑紫ふて菊ぐらとの人中花ハ黄色ある者ありと農政全書ふ記せり、故ふ黄色の酥と酸醨酥とのふ、

唐黍 江戸の俗 ろろ

あゝとらふ 春の日 待意こぬ殿と

唐黍 ろろ〻ろさん 荷兮

九月

杼の実 蘇頌曰三四月花をひらく黄色栗の花ふ似 ろくうせつ 山木ハて大木あり葉の大さ七八寸実ハ栗より少く大く餅ふ作て粥として山羊の食ゑ、木ハ斑文あて諸の器ふつくり箱とも甚美ず、

木曽の山中に多し、是を麪とするに其粉を熱湯にてこね調へ温飩のごとく棒に捲て温なる内に急にこれを伸ばさ冷れば堅く縮つて伸ずして其手廻し甚急なる故に俗諺に擀麪棒なることいふハ是なり、

罌子の桐實

[大和本草]荏桐とも油桐とも云、ダモと訓ずるハ非なり、桐に似たり、其實大毒あり、食ふべからず、實に油多し、民用とたまく、此油をぬりて青漆の如くする法あり○時珍曰罌子桐の實を荏桐と名く、罌子ハ實の状罌に似たるに因てなり、荏ハ其油荏の油に似たるなり[和漢三才圖会]濃州江州多くこれを種て油をしぼりこれを販る其功荏の油に同じ、煉成て漆に代ふ、桐油漆と名く、五色をぬるべし、常の漆ハ白色を塗ことあたはず、又松脂をとりて船槽を塗るに水を漏さゞれをチヤンといふ○年浪草に桐油、ダモ同物といへるハ誤

ろ 唐柿

無花果の異名也、いの部に出し

團栗

の子之數種あり、ドンクリハ槲の一種小楢といふ木の實也、椎に似て大なり、味渋く食ふべからず、楢の形状ハ𛀁の部にあるべし、

ち

七月中元

十五日 [修行記]七月中元ハ大慶の月、道書に云、七月中元の日、地官下て降り人間の善悪を定む、諸大聖普く宮中に詣、道士その日夜に於て經を誦し、十方の大聖ぬかづく、是篇を録し餓鬼囚徒をして解脱を得せしむ[五雜俎]道經に正月望を以て上元とし、七月望を中元とし、十月望を下元とをし遂に三元三官大帝の称あり、是俗妄の甚しきき、

地藏祭

廿四日 [紀事]洛外六所の地藏詣あり、加茂御泥が池、山科、伏見鳥羽、桂、太秦これなり、凡一日六所の行程十四里也、文徳天皇仁壽二年小野篁地藏の像六体を造て木幡の法雲山大善寺に安置ま故にこの所を六地藏村といふその後保元二年平清盛六ヶ所に堂を造てこれをわかち置く、七月廿四日供養、西光法師これを與て行ふ、今に至りて七月廿四日諸人六所に詣まこれを地藏祭といふ、洛下の見童も又各香花を街衢の石地藏に供してこれを祭る、又今日六齋念佛の徒も又六所の堂に詣て、太鼓を撃鉦を鳴し、以て踊念佛をなす、俗これを六斎太鼓と

称も洛東光福寺千菜寺の一流なり、

ちろ〳〵虫

きちろ〳〵その異名 異名分類 ちろうびゝ夜ふく風やさむからんふくむしのこゑ、

本草 白茅本艸に蘇頌云春茅を生ずる針のごゝ、俗に

兼三秋物

茅 大和

こゑと茅針といひ小児好て食ふ毒あゝ、血を破て血を止む

是ゝ、

九月

重陽

潛確類書 重陽は魏の文帝の鍾繇に與る書に歳往き月来ゝ忽ち復九月九日、九と陽数にして日月並び應ず、故に重陽といゝ俗其名を喜て長久かて宜ゝ、故に宴して

重陽宴

公事根源 九月九日は節日にて侍臣に菊の宴行はるゝ、こゝに重陽の宴と申、九月九日八月と日と九陽の數に叶ふゆゑに重陽といふなり、むかしは天子南殿に出御ありて節会行はるゝ、上達部、御子達より始て、其道のいたれる、撰韻給り、文つくり文臺にのせて講ぜらる、十月の旬のこゝにあらず、けふも永魚さまに例あり、又羣臣に菊酒を賜はる、大くとは五日の節会にはゝ、御帳の左右に茱萸の袋とりけ、御前に菊瓶とおく、又茱萸の房を折て頭に挿めば、悪氣をさるといふ本文あり下暑

千代見草

菊の異名あり慈童八百余歳の後出て、彭祖と名を替へて、長寿の術を魏の文帝に傳へ奉て、文帝百歳の寿を成さるゝ、和歌にも菊に千代世の秋を詠ぜるを珍しくもぞ此意

契草

藏王陸奥國に兄弟あるかの世にあまてこゝびて、弟は筑紫へ行りとゞまるを名残を惜み別れるるとき、兄庭前の菊と、一本と二つにけつて、憑ゝ、とりはゞびに此きくをてゝ、ぐさむ〳〵といひ、弟筑紫へかちつゝ下向して、此きくとうるゝり、この菊二に分しまゝに、かゝ枝ごろふかゝ花咲るとなん、

兼三秋物

律

の調

索隱曰按ぜるに律十二あり、陽六を律とし、呂を、大呂、夾鐘、中呂、林鐘、南呂、應鐘是也、名づけて律とゝ、○貞徳曰ちれちらべ、秋と、ちるもの

呂の声ハ春よりあるべき道理なり

共其さとりなるべ呂ハ呂ら雑やうなり、

八月 龍膽 草

和漢三才圖会 其葉、笹の葉に似て厚く、九月花を開く、花紫ゆゑて鈴鐸の形のごとく上ふむく、花中ふ蕊子あり、又正白花の者あり、笹龍膽ともいふ、

八雲御抄 えびこ草 云云 ○思ひ草

八重垣 龍膽といふまと露くさとの八、通具卿説 道のくの尾花ぐもとの思ひ草今さらまでぬ物とおもひん ○ことふ真淵翁云こハ木丹ととぶきて云字書ふ木丹ハ栀子の花也と出る是こ、源氏をとめの巻ふ四季といつるその夏の方ふ花橘撫子、さうびくてふおとゆりの花くさぐさうもてとあり、是ゝれ夏こくてふいくちれゝるとゆらゝ、○尾花ぐもとの思ひ草ハ龍膽と定家卿の御説なまじゝ ぐゝつゝあゝくゝにを龍膽とつるハ誤とちるべゝ、

九月 鯉魚風

九月の風こ 李賀詩 明前流水汪陵道、鯉魚風起芙蓉老、

ぬ 兼三秋物 零餘子

草蘚と蔓葉の形状混雑して、分別をゝ〳〵、草蘚亦零餘子あり て山藥のゝ〳〵、故ふ諸説草蘚と以山藥とし、山藥ハ其蔓紫色と帯ぶ其葉山く尖あり、其花白色穂とふゝて下ゝ垂る草蘚ハ其葉山くして尖か且稜あり、其蔓青色淡黄の小花とひらく、蔕て莢と結ぶ、三稜あり、山藥もまゝ莢とむらぶ故ふ見易ゝらゞ、

九月 白膠木紅葉

時珍曰 楠木、木の形橋のごとく五六月青黄色の穂とふ、一枝ふ累々ゝう、七月賞と結ぶ、盧書子と名ゝ付く葉の上ふ虫あり五倍子と結ハ成ち

八月 縷紅

こくゝせこ 莖葉とふ細く杉藻の如く、莖ふ蔓と出し、八月ふ紅花とひらく、形丁子ふ似て長さ六七分の花ふ愛まゝし、

瑠璃鳥

和漢三才圖会 碧鳥俗云留里、大さ雀のとくふゝて、頭背翮と羣色頗頸臆下ふ至て純黒、胸腹白く、觜脚尾共ふ蒼色、其吉圓滑あり、清く囀る

七月 鬼の洞念佛

七日

十五日 滑稽雑談 洞八瀬河の西の山中ふあり、俗鬼のまど洞といふ口狹く中闊し、高さ二丈許、深さ三丈昔酒顛童子、此洞より丹波の大江山へ移りしといふ、或る昔敵山小一童あり、僧徒其美しきを愛し、勸酒交歡の時時人と敵血ところ、酒ふ和してこもと飲む、一旦魅こゝあり此洞ふ入云々 此話羅山詩集酒顛童子の洞ふ題すること

る序ふ見えたり、 雍州府志 毎年七月七日より十五日ふ至り村中の兒女此洞ふ聚りて鉦と鳴らし、大ふ弥陀の号を唱ふこと、 書言故事 王子醉えりめ濕可と平祖祭こいふ、

踊

遂ふ世ふ甚ど行はる子醉西人と對陣せ、時軍士百余人ふ命じて訝戮とあらしめ隊ふ重前ふ出ここ虜見て驚きこ慢く遂ふこと撃破る注云訝鼓戲ハ樂人雜劇とあして跳躍とあるこ世人皆こまこふ效ハ○李朝の俗七月十四日より晦日ふ至て、毎夜大人小兒街頭ふ踊とあるも、○懸踊 念佛踊、題目踊、燈籠踊、伊勢踊、木曽踊、小町踊、七夕踊ホあり、

折つけ燈籠

用捨箱魂

各其頭字の部ふ入て詳を

祭ふむ〻用ひ〻折つけ燈籠と江戸ふハ絶こり、中略 續虚栗 貞享四年 親ハ鬼子ハロとゝき蓑虫ふ其角 折つけもとん月の文月 野馬中略 竹藪と折つけてその俗垣ふ

もること折つけ垣といふ、此燈籠と竹と折つけてつくる故の名ふ、こゝりかれふそいもく家こふそつくりしたれば〻しく、よく竹とおしてもあるふ、又名のごとく折つけて上を〻く形のもろきてあり、

麻柯の箸

箸こ 聖灵祭ふ供ふる 續蔡蓑 一ツ〻ふ異ふりしこそ、麻木の箸もとこふ〻惟然○時珍 送つ

曰大麻其稭白うして稜あり輕虚燭心ともこし、

火

ひむの部迎へ火の条ふ注を、

女郎花、茶花

和漢三才圖会 女陪之山麓ふ生も、高さ二三尺莖ふ稜理あり蒿の莖ふ似こり、枝兩々對生し、節の間ふ葉と生ず、其葉三七及前故の葉ふ似て細く長し、七月穂と生ず花とひらく、最細小正黄色愛まべし、本朝文粋ふ源順の詩 如蒸粟俗呼爲女郎者是なり、隨て子と結ぶ花白き者男倍之と名づく、

大和本草

敗醬藻塩草ふ白花ありと俗ふとこゝへし

とりて又オホトチハ女郎花ふ似て花白きあり、とゝ
をこなの花ととゝのう敗醤と名づけしハ、此花兼の臭
醤の損じさらゞゞ〜と本草ふいへり今試るふ然ア、
○此花を女子の艶姿ふさゝへて讀と歌俳諧とまふ
同卜、古今名よめでゝとれるゞゞとゝをゝ、われ知ち
みきと人ふゝうれ、僧正遍昭 續猿蓑 とゝろ〜鵜坂
の杖ふゝうゝ 萩の瓜 大和本草 萩ハときゝうゝと
馬苋 萩 萩の声 りハ淀川其外處々ふ多ア、
山野あと水辺ゝも生ゞ、中実ゝよゝ〜ゞ、少ハ其中とわ
ア、葉と ゆゝり生ゞ 似ゝるもれゝ、水草ゝ、○萩の葉ふ亂
わゝりて音ゝるゝと萩の声 おきふぐさ 大和本草 麥門冬の一種
とも萩の正風とゝのふ、翁草 ふて、葉ハ大葉の麥門ふお
ふゞ、暮春及び夏の初め純白あり、故ふ翁草とハふ後
漸く青くふる、根ふ門冬あり尤大葉麥門のごとくふて
異草ゝ、滑稽雜談 按ゝるふ、和名鈔ふゞ白頭翁ゝ翁
草と和らげゝり、然ゝゝと本草綱目と考ふふ別
種ゝ、白頭翁ハ俗ふいハゝ猫草ふ畧似ゝり、今云翁草ふ
あらゞゞ、翁草ハ初生の葉純白あり、秋月紫花とひらく、

穂の如ゝ、猶考ふべゝ又菊とゝ翁草とゝ
とゝ混ゝゝべゝらゞゞ九月の部ふ註を、 弟切草 来醯草 音ゝ
和漢三才圖会 初生地雷子の秋ふ似ゝり、両々相對し枝
ふ趺あり、莖葉ゝゝと按めゞ汁あり、須臾ゝれハ紫色
ふ變ゝゞ六七月小黄花とひらく、單五瓣ゝゝ細き蘂
あり、莢と結ハ三稜あり中ふ細子あり、藥ふ用ふ、旧傳
ふ花山院の朝ふ鷹飼あり、晴頼と名づく其業精ゝと
神ふ入鷹傷と被ゝるゝある時ハ、藥と按ゝそゝこゝ之薄る
ときハ愈ゝ入草の名を乞ひ問ゝゝも秘ゝて言ゞ、怒るふ
家弟密ふゝゝと露洩晴頼大ふ怒てゝゝと又傷ゝ、
ゝゝとゝり鷹の良藥とゝる弟切草と名づく、○又藥師
草ゝ名づく、慈鎮和尚鷹百首 秋の野ふきゝるあゝる
青くそゝりゝて鷹と やゝ〜ゝゝゝん、旋覆花 蘇頌曰二月以後苗と
生ゞ、多く水の旁ゝ
近ゝ、長さ一二尺以来柳葉のごゝ、莖細し、六
月花と開く菊花の如し深黄色、七八月ふ及ぶ、 兼三
秋物 鬼芒 時珍曰葉茅のごゝふゝて長さ四五
尺甚ゞ快利ふゝゝと傷ゝゝ鋒刀の

如芋生の浦伊勢にあり和哥にはとへの浦
、芋生の浦梨 梨えこそえさまとよし おかくのみすゝ、
古今 をふのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならずもねてかたらはん、
稲守 山田守 九田を守りて稲を守るハ、 小田守、晩
入畜の傷殘ことを防ぐためなり 八月 尾
花の粥 大内記田原康富日記 文安五年八月朔日乙卯
云云尾花の粥の事、その由来何事にあるや、自
然見及ぶ人のなし問しめてあれバいまだ見及ばずとその子
細をもしらずといへり返答し畢ると云云 海人藻芥 八月
朔日、尾花の粥、内裏仙洞以下令用給良薬と云云 彼粥
調法、薄黒焼ヲ粥ニ入合之也 後水尾院當時年中行事 八
朔の条ニ云、夕がたこの御いはひ、初献よ 鬼のしこ草
そへておばなのかゆきこしめしと供ん云云
紫苑の事なり志 白粉の花 和漢三才圖会 白粉草
の部にあるべし、 正字未詳 春苗を生し
冬枯る高さ二三尺叢生し葉淡青にて柔く白雞頭に
似て繖小く四出し其花朝以後萎ミ夕陽に至て開く深
紅色五出、單葉にて蕚の長さ一寸余、亦紅花の中に
紅の蕋を出し細く糸の如し、蕚の本に子を結ぶ灰黒
色皺胡椒の如くにして中に白粉あり、これを採て婦人
の面に塗光沢鉛粉に優れり、○中華の書にもみえずし
外國の物なるべし、大 車前子
和本草にみえたり、 蕪頌圖経 春の初め苗を生ず、葉
地に布く、匙の面の如し、年を累し者長さ尺余、中に
数茎を抽て長き穂を作る、鼠の尾のごとし、花甚細密
く、青色微赤き実を結ぶ、葶藶のごとし、今人五月苗を
採て七八月実を採 滑稽雑談 此者苗或ハ花を見
ぎ古来より実をもて八月の部に出せり、故実に准べきこと 尾花 はの部穂花の条に出ッ 思
草 その部龍膽の条にあるべし、黄蜀葵 ソウスケ トロロ二名一物、との部にある
べし、落穂 詩經 此有滯穂伊寡婦之利 注ニ云滯ハ
遺也棄ろの意也、収成の際に滯漏の禾
穂ありいふ寡婦ぞとりて利とせるこゝと得るなし、此
豊成餘ありて尽く取らざる、又鰥寡とこれを共にする

こと見るを、列子拾穂者行歌

落鮎

渋鮎 下簗 八月最長き日ふ

近し、此時鮎苓子の如き者腹ふ満其甘美斑の文と生ず、刀刃の鏞くるぶ如し、故ふ鏞鱗しつ、八九月湍の水草の間ふ子と生ず後漂泊して流ふ適ひて死ず是落鮎ぞり、其下ず落るものを待、簗を構て以てこれを捕へ名づけて下簗と云へり、肉瘦て味甚劣ず

九月

岡崎祭 十五

名勝日或ハ東天王祭、九月十五日、洛東南寄ふあり、紀事東山岡崎正一位十六日志九月十六日祭礼云紀東天王祭神輿一基鉾七本ありて、その内一本の鉾動下ふ埴を以て鷹二連猟犬一疋を造り、彩色を施し是を犬鷹鉾といへり、其傍ふ感神院の三字を彫刻て疑らくハ祇感神院の鉾ぞ云、當社ハ聖護院の杜ふあり、故有て吉田の地ふ移ず、然るふ同神社亦岡崎ふ移ず故ふ東西を以てこれを分つ、雍州府志天鷹の鉾ハ、村人神宇と称して祭獣云月令此記戌月之候祭獣者祭之於天戮禽者殺之食也、

弟草、少女草

菊とりふごとの草同前と藻塩草ふ多し、梅を花の兄といひ、菊を花の弟といひ、故みや、○古寄露ものをあひおひ、少女草、あらきを見ると花ハあてどなし、むきふくと菊とも松ともいふ住吉の里ふ五位の松とて、

公羽草

年ふ久しき松あり、その神やあつけん、後ふハ化して公羽ふ成て住り、常ふ心とを通して拳とちぐ、又庭ふ菊どう名て愛しくく人翁が言の我庭ぞ、の松蔭をのそもむ、翁ず草の花もさかりぬ、○此故事ふよりて、松とも菊とも云ふ翁草といふ、

老母草の實

三四月一莖と抽で淡黄花と開く、穂の如く、其莖高らぬ、随て実と結ぶ、生ハ青く熟すをバ真紅、累々として天南星の実ふ似て可愛三才図会

万年青、乗芭蕉

ふ似て隆々として衰へず、其多寿を以て万年青と名く大和本草

落栗

唐ふハ一切祝儀ふ用るよし、花鏡ふこれ乃ち、熟せんとして子出て、其苞自ら裂けて地ふ墜る物是ぞ、

遅稲、晩稲

時珍

日粳稲早中晩の三収あり、六七月収る者を早粳と
も、八九月収る者を遅粳ともいふ、云云是遅稲ふり、時珍
曰十月収る者を晩粳ともいふ、云云是晩稲ふり、

落水 草環拾遺 田のおもを水といふ、畿内ハ所々稲を苗して後、田ふ菜種を植るゝ故ふ
両作所といふ、田の水を落をハ菜種を植る用意、

おもゆ 鉄懇の木と旧事紀ふ載るる
是ふり、秋甚紅葉を、立花を好む者秘蔵して
こゝもと
挾もて、

七月

早稲 時珍曰、六七月収る
者を早粳ともいふ食ふ
充べ

童相撲 扶桑畧記 延喜元年七月廿八日
丁丑、童相撲廿番を御覧、綾綺殿
よおいて此事あり、古今著聞集 延長六年
七月六日、童相撲廿番終りて舞を奏を、

兼三秋物 木綿取 桃吹 和漢三才畨会 其実桃の如
し、四ツふ裂て中ふ白綿を出
すゝとと桃吹といふ、綿車を以て中の子と繰り去て、
竹を以て小弓を作て弦を牽て綿を弾くそれを匂と

いふ、

若煙草 和漢三才畨会 煙草 相思草 淡婆姑 淡苞菰 羅山文集 佗波古
希施婁、皆番語也、云云 按もろふ天正年中南蛮の商
船始て此種を貢もて、以長崎の東の土山ふ植、二月種を
下もて、五月移し植、新芽を摘去て実を除くて、毎旦
怠るべからずて、高さ三四尺、葉商陸ふ似て長大、七八月
葉を采て、藁莖を覆てこととねゝ、盦一宿して取
出し、一葉ゝふ繩ふゝゝみ、編るごとくして晒し乾し、
一夜露宿して、後晒し乾もて、黄赤色となる、

八月

楓菌 和漢三才畨会 これ
とゝふて笑ひて歩て、

渡鳥 此月諸鳥異国
より群飛して、
山林江湖ふ来る、
是を渡鳥といふ、

九月

度會新嘗會 外宮
十六日、内 内裏より初稲を伊勢両宮へ奉らせ給
宮十七日 ふく大嘗会といふ、御即位の後日本国中
の神々へ御饌を奉らせのふとゝく、
新米を奉る故ふ早稲米の御祭云云、

吾亦紅 陶弘

景曰地榆其花子紫黑色鼓の如し故ふ又王鼓と名く云云是花景ふいふワレモカウ本名王鼓一名地榆比叡山鞍馬及び近道ふ生ず宿根より二月苗を生ず初生地ふ近く独茎直上高さ三四尺對し分て葉を出す榆の葉ふ似て稍狹く細長くして鋸の齒の狀ふ似て青色七月花をひらく梼子の如く少て紫黑色

か 七月 梶の葉 姫 棚機 七姫の内あり

異名分類 梶の葉姫

八八雲御抄ふ梶の葉ふをの書も皆由緒あり云云漢雲間答ふ芋の葉の露を硯の水とし梶の葉七枚ふ歌一首づゝ書すゝえゝう是等ふよりて皆二星を祭る具專要の物と以名付たゝえう

梶の葉

年浪草 和俗七月六日市中ふ穀の葉を買明夜詩歌を書て以て二星ふ供をる所あり又短冊ふ楸の葉を用て詩歌を書く

和漢三才圖会 和名加知 俗云加宇曽 按ずるう楮の皮今多く紙ふ造る又布ふ織往昔木綿と称ず今も亦祭祀の人木綿繩ふ被る上古の衣服ふ象る歟今二星ふ供をる時詩哥を數の葉ふうくて牛女神と祭るの故ふ木綿の義ふ象るか○菅章長家高辻朗詠抄ふ曰昔余吾の海ふ天人下て羽衣を獵師ふ盗まれ心あらぬ獵師の妻となり人年月と經て羽衣を取得て天上し再び人界ふ下りて獵師と共ふ天上も女ハ織女となり男ハ牽牛となる其再び天へ上るの時梶の木の上ふ糸をかけし是ふ取付て登る故ふ二星の手向ふ梶の葉を用ひ願ひの糸にて五色の糸を用ふと云云暑にて爰ふ記此事淡海志ふ見えう

梶の鞠

あの部飛鳥井鞠の条ふ出つ

河鼓

志の部二星の条ふ出つ

烏鵲橋

藻塩草 鵲鷺記ふ云史記ふ云瓊ふ夫婦あり夫を遊子とのひ婦を伯陽とのひ偕老と契て子ハ二人の候陽ハ三四の旬也と云云此文のごとくハ遊子十六歳伯陽十二歳なる夫婦となる互ふ志切に共ふ月を愛まるを限りなく夕ふハ月の出るを待て里ふ行曉ハ月の入るを惜て高峯ふ上る伯陽九十九ふして死も遊子深く歎て月を形見とする程ふ或夜伯陽鵲ふ来て空を飛やまるまで遊子殊ふ歎きて百三歳ふて

死せり天の星となりて烏ふ乗て天を飛行て銀河ふ望て川を隔てさうさをどし帝釈毎日此河ゆて水とあび給ふ故ふ水けがを有て渡ることを許さるゝ然りといへども七月七日ハ帝釈善法堂へ御参りの日あれバ水とあび給ひて渡ることを許さる年ふ一度といへども人間の為ふハ一日一夜あり此ときに烏と鵲と羽とをならべ橋をなして彦星織女と通ずと是と鵲のえしといふあり云云

大和本草 鵲ハ畿内東北の國ふこれをもつて筑紫ふ多し朝鮮より来つるふや高麗烏と云鳶より小くつゝみうり大さ門羽ふ黒白あり尾長し本草ふ載る鵲ふよく合り

茶 せの部摂待

縣躍 紀事十四日より晦日ふ至て夜ふハ大人ふ児街頭ふ躍の条ふ注す縣躍と催し或ハ又各同列して相知處の家ふ至て大ふ踊躍とす是と懸踊と云人掛らるゝ所の家再ひ踊躍を催して是ふ酬ゆ

蜻蛉 是を返しと称ス

蟐 蟐ハとの部ふ入

螂 螂ハ夏ふ入

螂 螂ハ夏ふ入

こいの部

柏ちる 御傘 柏ちるハ夏ふ入

秋と有ども辟事の分ゆへの常なるべし

盤木の散ハ夏ふ入 中略 今此國の人の中柏ハ初秋ふ紅葉してちるものといへり此注ふよりて無言抄ふ云ふ

つゝとゝそさう 増山井 夏の部ふ貞徳説夏ふ入又一説秋ふ入 貞享弐 此柏ハ御傘ふ説ありて論語の松柏と證とし畢竟ハ雑ふ入れども爰ふハ散字と結ひて決て秋と定べき 下略

兼三秋物 桂

男 一つの部月の桂といへる條ふ出づ

鳳来紅 葉雑頭時珍曰雁来紅蓼葉穂子とも小雑冠と同し其葉九月鮮紅なること望ふ花のごゝ故ふ名く呉人呼て老少年とも一種六月紅の者あり十様錦とゆづく

○雞頭や雁のくる時猶赤し 芭蕉

増山の井 雁来紅一説ふ曰の花云云

枕草紙 ふ曰の花

柳 時珍曰柳高樹大葉圓て光沢あり四月花をひらき雁の来し書といへり云云

黄白色實を結ぶ青緑色八九月熟す

胡盧柳 ○烝柳酬柳 曰柳

樹練柳 木淡柳 似柳 伽羅柳 円座柳 筆柳

田舎柳 君遷柳 樽柳 摶柳

以上各頭字の部ふ分ちて注す

柳鯀 蔵器曰柳鯀黄柳米粉を和して糊

蒸て小兒に與ふ食して下痢下血を止む、

窠山子

彈鳥邪 和漢三才圖會 僧都添水 会 蘖文類聚云、古者三皇の世ふ人死して未棺槨殯葬のら
ざ農ふ白茅を以しらとと中野ふ投も孝子其禽獸
の食ふと視るふ忍びを彈と作以てると守り、鳥獸
の害と絶つ、按ずるふ俗ふいふ窠山子今田圃の中ふ草
偶ふ弓と持せ、以鳥雀と防ぐ、備中國湯川寺十王賓
僧都迹と民間の奴ふ晦まして、田ふ入稻と護以て鳥雀
と驚うして勢ことを、今ふ至て鳥雀と懼を芻靈と僧
都ことを 続古今 山田守僧都の身ことう冬ーー秋
ことのんびことふ人ものしー 玄賓 和訓栞 傳燈録ふいふ
窠山子ものとろう鹿ぐしまぐーー山田のそんづと又
ろゆ是ふ人ー信野少て節分の夜いとーー豆ふらとさすと
ゆ是ぐしらふ焼ぐしの義、埃裏抄ふい炙串と名く
とことえろいとーと焚ハ魑魅の畏ると傳ふる意をもて
増山の井 てどつハ添水と書て水辺ふもろりて水のちら
と添て音と出を鹿おどーく中畏かしとそんづハ別の物
まんども、玄賓の山田守そんづと僧都ふそんてよく給

つる故ふ鳥おどしの人形と心得て、古哥ふとよめるとも多
し、然るども実ハ別の物ゝ 石川文山覆醬集 竹筧尺餘
上短く下脩し、桔槔ふ擬て、首と下流ふ矯さ仰る故尾尻
石と載く旋轉俯仰我巨々の声と発揮て、蓮心院 玉我巨巨 竹筧の書
声韻九ふらば、

鎌帛

元元是添水ものゝ、 駒恒秘藏抄 家の中ふ鎌とらふ
たてゝ、菅笠をきせて立ゝまハ鹿の田とゝまぬとゝそれ
と鎌帛といゝ歌ふ我宿のふるゝめ立るとるーふやわぐふ
山田ハ鹿

鹿火屋

年山紀聞 説々あまゝど、山田ふ猪鹿の
のかよるゝ、 つゝ所ふふき家と作て、壁埃何
くるとの嗅きものふ火とくやし、烟とくて鹿とやらひやる
と心得べし、或ハ香火屋又置蚊火ものど字とうて書ゝ所
もあるふよりて、まどふ人もあるゝど、用ハべらず又火の
字濁ることて、顕昭、飼屋の説ふ迷ふぐらべ

かせぎ

鹿の異名ゝ 玉葉 山ふくゝるゝかせぎのけぢゝきふ
世ふ遠ざかるほどそちらゝ、 赤染家集 朝ほらゝ
たゝとゝとあくとゝえつるハ
をぎのちうくたてるゝり、

肩掖鹿

匡房卿哥 かぐ山
のそゝぐゝ下ふら

とけて肩ぬく鹿八妻こハるせて日事紀第二云復令中臣祖天兒屋根命忌部祖天太玉命内抜天香久山之真牡鹿之肩而取天香久山之波波加而令占矣古事記の説ごとおおむね神代あく鹿の肩骨と抜てうらなハるとあれてかの木八和名抄云櫻桃和名波々加一名保波佐久良延喜式云凡年中御卜料波々加木支八大和国有封の社ふ仰て採てこれと進らしむ、

片鶏

夫婦相ともに離れて居るといへ、

駈鶏 藻塩

草鷹狩とゝるとハ馬上ゆそ鷹と居てうり立て鳥ふ合するといふなり、

八月

菅大臣祭 十六日 雍州府志

京四条の南綾の小路西洞院の東ふあり南北道と隔て是善公の宅地ゝその内北ふ菅神の祭あり是菅神降誕の地ゝ故ふ社を建てこれを祭る、

神社啓蒙 或人云此所昔菅家の舘ゝ夜飛梅の天神といハ是ゝ今ふ飛梅の跡ゝの地ふ在り又説ふ文子の宅ゝて菅神しゞめて迁座の地ゝ洛の人阿米神と称し例祭八月十六日社辺の氏子是を祭る神輿一基童子素袍供奉社僧ゝ

亀戸天神祭 廿四日

○江戸本所の末亀戸村ふ所ゝ祭る所筑紫太宰府の神体ふ同し寛永三丙寅年菅家の末裔大鳥居信祐建立ゝ祭礼八月廿四日本所牛の御前と隔年ゝ当社の神宝天國の剣といへりこの外後水尾院の宸筆安樂寺の石碑むみちの文臺大閤秀吉公の文臺ゝ連ゝの師昭巴ふゝこれとい紀葉の時有等神庫ふ藏祭の日奉幣ゝ神楽ふ行ゝ近来正祭あり、

貝割菜

菜の芽出、

苅萱 大和本草

霜草莖葉節穗皆葦の如くして小ゝ宿根より春苗と生ゝ葉ふ青白のくて高多くまゝ群て本末ふ通ゝ四五月穗と生ゝ中華の書ふいまゝ見ゝ葦茅の類ゝカルカヤともいふ、新撰本草

崖ふいまゝ岡辺ふ茂るかるかやの上葉の露ハものゝこゝろ、

衣笠内大臣○萬葉集ふ苅萱とゝめる、後世ゝ一種の苅萱ふおらを秋苅ゝとる萱とゝ、

萱川、萱萱

ゝ和訓栞ふ雀夢ゝとゝるハゝろし、

萱の軒端

倭名抄茅和名萱加夜大和本草ふ長短一種あり短き者ゝとかやとゝ、

御傘 萱草、萱草が軒端植物なるべし、秋ゆもふるまでき道理なるべし、かゆのうの名草ハ秋の季大切なる故ふ用るべきなり、つくりせと 御傘編集の時、事甚だ無数なるべつて、盤子簡多し、屋根ハ菅て何十年なるもの、秋季植物ふハ用ひがたし、宜しからざる式なりとて、蕉門の徒ハ之を用ふべからず、

桂の花 木犀

南方草木状 江南の桂、八九月花をひらく、子ふ、此木犀なり、

本草綱目 菌桂 巖桂の二種あり、菌桂ハ葉拗の葉の如くして、光り狹く光沢あり、三縱の文あり、鋸齒ハ其花ハ黄なり、白ハ之を巖桂ハ其葉ハ鋸齒あり、枇杷の葉の如くして粗濃なる者、俗呼て木犀 蕪草 蕪頭 白蓋草ハ兼竹ハ似て細く薄し、亦四小ふ、刺裏の人者、黄色を染む、極て鮮好ふ、

和漢三才圖会 多く越前ハ出て、以て染家必用の物とす、按ずるふ、倭の蓋草竹の葉ハ似て、芒の類ふ、江湖大浦の辺山中最も多し、

老鴉瓜 王章 ○時珍曰王瓜一名土瓜、其根土氣と作し、其實瓜ふ似くり、故ふ土瓜

と名く、王の字、何の義といふ、とくらを瓜雹子ふ似て熟するときハ色赤し、鴉喜て之を食ふ故ふ俗ふ雹老鴉瓜と名く、三月苗を生し、其蔓長多し、其葉四くして馬の蹄のごとし、六七月五出の小きく黄花をひらき、漸ちなすず子と結ぶて累々たり、熟するときハ紅黄の二色あり、

天和本草 其実まるく長し、王章と、土王瓜の実ハ文を生ずるふ似くり、故ふ王章といふ、

籬豆 本草を考ふるふ人家の籬垣の側ふ三月種とり、故ふ王章といふ、

と下す、蔓生して延纏いて籬と蔽ふ故ふ沿籬豆と名くまた和俗破墻豆といふ、此豆一粒を植ハ豆八升を得ると、破墻と八升

芥菜蒔 時珍曰芥數種ふ皆八九月ふ種と音近し、故ふいふ、

と下す、

月令 仲秋月鴻雁来賓、時珍曰雁の狀も、

鴈 鵝ふ似て亦蒼白の二色あり、今人白ふして小なるものを以て雁ふ大なるものを鴻ふ蒼き者と野鵝ともいふ、雁ふ四德あり、飛ときに序あり、前ふ鳴て後ふ和ふ其禮也、寒きときハ北ふ南の衡陽ふ止る、熱きときハ南ふ雁門ふ帰る、其信也偶ふ失ひて再

び配がも其節也夜群宿して一奴巡驚を畫ハ蘆と
啣て繒繳を避く其智あり捕る者ことく奏こ爆とし
て以其類と誘ふ是一愚心南ふ来る時、瘠痩て食ふ
べからず北ふむふ時肥故よりまこと取べし○白雁、鴻
鵠、海雁 たのむの雁、代りて雁、季鳥、以上頭字の
部ふわくちて注を○ちらほらとふ一種あり、目ふ黄
ふして其外ハ雁の如し○
新方雁ハ頸長関東ふあり 雁の書 漢書 前漢の
杜陵の人武帝の時節と持て匈奴ふ使て単于ことを降
さんと欲し武ハ幽し大宮の中ふ置漢武こ永し匈奴詭
て言武死ぬと常惠漢の使者ふ教ていはむ天子上林
中ふ射て雁を得たり足ふ帛書を係く武其澤中ふ行り
と是ふ由て還ることを得たり 古今 秋風ふ初りて
きこゑふるたり玉つさをうけてきゐらん 文則 曠野落
著ふ荷分の文や 天州雁 其角

雁陣 本朝無題詩 雁陣数行
茂りざね 微月冷虹橋一道感天晴
明 雁金 和漢三才圖会 所謂雁金とハ雁之鳴也
万葉集ふ多く此三字を用ふ然ども又雁

鳴者今者来鳴沼と詠ずるときハ自ら雁の名ことなるふ
ふ似たるを遂ふ雁金の二字と用ひて本意を失ふ云云

雁字 山谷詩云雁字一行書絳霄 談林 擅
泓発句 阿蘭陀の文字ふ横さふ天つ雁、

鳥 和漢三才圖会 好て檀樹ふ棲む故俗呼て檀鳥
とふ又鷽巣鳥と名く形鳩より小さく頭背腹
共ふ灰赤色眼の辺ふ白色あり 翼羽黒其小羽ふ青黄
の斑あり 嘴二寸許鋭あり 尾羽黒色微青黒し能鳴て諸
鳥の声とまねく又人の言ことをうつす 農家除夜
元旦ふ食ふ以て借て取の義と祝ふ、

河鹿 俳諸 歳時記 蛙こ好て山川ふあり夏の季より秋ふ至り
て鳴 哥ふかつとのこよてかくこと詠ず俗傳
ふ西行ふ哥ありとふものハ臆説ありて考ふる所
あり その声鹿ふ似たること、俗呼て河鹿と言ふ

鮠 同書云正字ハ黄頷魚杜父魚の劣こ水底ふ居て鳴魚
あり故ふ此魚と誤て河鹿と称も諸国ふあり伊豫
越前越後加賀近江山城ふ多しその上地ふよりて
名もろもろ形も声も大同ふ異こ 石伏 コリ 石ムシ 石モチ

又川オコセ伏見クチナハドシヨ与一ル業ムコ近江アラレ魚前

この外わも猶あり近ごろ山海名産図会こゝに書ふ来しく論じさゞいこゝふ畧記も、青藍云焦門の先哲のよめるうゝ〻蛙ふあるとも猿蓑あやまりてききうるこゝる鯖ふる

嵐葉 九月 桂の宮相撲

八日桂の宮相撲 八日拾芥抄六條の北西洞院の西九月八日桂の宮相撲 今昔物語 天暦の御時ふ震旦より渡〻〻僧長秀こゝに住る元医師ふんあり桂の宮の前ふ大ある桂の木あり其ハ桂の宮こゝ人りゐる長芳唐の桂心ふまきゝかゝとゝ云う雍州府志桂の宮一町五〇神社

神田明神祭

十五日〇神社江戸湯島ふあり、祭る所等宅詳ふ、

の神三座神社啓蒙大己貴尊鎮座ましも将門の社ハ本殿と去ること百歩ゑ〻し、〻大己貴尊八人王四十五代聖武天皇天平二年鎮座〻将門の霊ハ六十一代朱雀帝天慶三庚子年二月十四日将門滅亡もとその後怨霊ものゝ祟わるふ依て延久のころ一遍上人三世真教坊将門の霊と以て神田の神社ふ合せ祭る當社ものゝ今の神

田橋の邊ふあり此所いやゝ芝崎村〻今ハ至てしく祭礼の日神輿とゝ〻らく此所ふ留めて奉幣ゆり祭礼九月十五日、神田町山王と隔年〻神輿二基引山三十六本、踊屋基太神楽ホそゝふ従ハこの祭の練物ふ頼光大江山入の形状と摸して三間余の鬼神の頭を造つ臺ふのせて数人そゝと荷ふ、引山の外今ハ是ら神事ふ預るの町、内神田外神田大傳馬町、濱町辺日本橋通一町、前後都合三十六町〻神幸の町々ハ夜宮より桟鋪を構へ種々の提灯と出して甚賑ひ〻神輿渡御の町ハ本社より鎮倉町通り、飯田町より田安御門ふ入 上覧所前、常盤橋十軒店通り、筋違御門と過て本社へ還御〻夫抵祭式山王祭ふおゝ〻じ、むゝ〻ハ神事能あり、今ハなゝし、

神主芝崎大隅守社

家五人巫女ホあり、

上難波祭

廿一日〇摂州西成郡大阪博労町ふ

あり、祭る神三座才一稲荷倉稲魂神第二祇園素盞嗚尊第三平野仁徳天皇後三条院延久三年勧請俗ふ仁徳天皇の祭とゝ云ふ毎年九月廿一日神事神湯ホあり氏子醴と釀と互ふ相贈る〻、社説ふ仁徳帝の社ハ元大江橋の東上

町の内ふあり、是ハ皇居の跡ふり、秀吉公の時上難波ふ迄も、桂川の御祓の部野の官の別と、いへる条ふ注も、かれらよもだ

和名抄 菊 和名波良子茂木又云加波良佐波岐

天和本草 順ふ和名抄ふかゝらるゝ紀と訓ぞ但野菊やるべし、かくみ草 菊の異名ふ、

藏王 めうとせぞいつとゝまくのくさ草まこしも秋とおもふ名殘ふ此菊ハ奥州新妻の里ふあり因縁無常ふ新妻と云物語ふあり、業平作是ハきくとよつきて秋ふ入らるゝ、彼物語ハ十月十五日とあり然ゝ冬ふ時珍曰其木文木こ名づく、斐然こうで章来り、

椎

故ふこゝを椎と云、信州王山懸の者と佳こと八中畧

按ぞるふ、羅願尓雅翼云、椎ハ杉ふ似て杉ふ異こ、椎ハ美しき實ありて木ふ文采あり其木桐ふ似て葉杉ふ似てゝ絶て長ド難し、木牝牡あり牡ハ華き牝ハ實るふ、棗のごとく其枝長くして擾攪のごとく枝ふ光る者あり、光らぞるゝものあり、後ふくゝて皺薄し、黄白色、其仁生ふて食ふべし、亦焙て收むべし、一樹數十斛ふ下らぞ、天和本草 其木彫と燒ぞ蚊退くかゝりの木こりの字と畧せり、

櫧の實

時珍曰三四月白花と開き、穂とゝて、栗の花のごとく、実と結ぶ、大サ槲の子の如し、小苞あり、霜の後苞さけて子墜

雞冠木

和漢三才圖会 本草綱目こ案ぞるふ、楓ハ岐あゝて三角とゝまこ霜の後ふ至て葉丹し愛ぞべし、雞冠木も亦楓の屬ふ、然し楓の花ハ白色、実大ゝて鴨の卵のごとく、雞冠木の花実と廻ふ異ふ、猶朝鮮の松の子大ゝて常ふ異ふるが如し、雞冠木ハ數種あり、高き者二三丈、葉尖アこ岐あり、蝦蟇の手の如し、大低七八岐或ハ九岐又十二葉の者あり、こゝを十二重と云、三四月嫩葉紅色ぞ、滿山ふ映ぞ、五六月青葉ふ復て深秋其葉黄こ落つ、歳經るものハ五月ふ黄花とひらく、狀飛蛾のごとく、梢頭ふ実と結ぶ中の子牛房子のごとし、和州竜田、雍州高雄山最多くこゝまあり、秋ふ至て葉丹く赫耀こう、天下ふ冠と賞美ぞ、凡草木、秋紅葉ぞる者多くあり、蝦手の樹の葉勝こうこゝも、故ふ只紅葉と称ぞるハ即蝦手て

の巣

栃紅葉 八雲御抄 紅葉に詠る木栃云云

是栃紅葉あり、一説に実の赤きを栃もぐらとゝるいと紅し、夫木 秋くれば山の木の川葉のいろふかん國生の栃ハもみぢもふけり 為家

の紅葉 紅葉の川水のうへに浮て流るゝをもいふ、枯草に露又うきて流るゝともいふ、枯野枯草ハ冬まれども、露とおちびてハ秋なり、

よ 九月 淀祭 廿三日

神社啓蒙 伊勢向の神社ハ山城國紀伊郡淀の駅小橋の東河中にあり、祭る所の神一座、天逆向津姫尊宝基文図に云天照太神なり 石清水社家説 八幡迂幸の縁ふかりて、伊勢向と号し、こゝに祠を〇一説に淀姫の社、祭る所今三座、淀姫の神千観内供の夢神、天神以上三座、傳云千観法師肥前国佐賀郡、淀姫の神をこの地に勧請ス、淀姫の明神ハ八幡宗苗の叔母神功皇后の御妹ト云、

紀事 淀大荒木の社、祭ル廿二日、或ハ淀水垂淀姫大明神の祭廿三日、何れも是なるべし、土人云淀祭と称する者是なり是淀の鎮守と、神輿一基、淀の堤路狭く神輿還幸の時、行列と立ならべて跡を先へ振ふ、よりて跡を先へ振ふ、同じ堤を帰るなり、故に跡を先へハ此祭をいふ、

齧草 ちの部千代見草の条に出、

た 七月 織女祭 牽牛

夜寒 秋の寒き夜 夜寒ハ夜の寒きを唐名とす、

或書 牽牛ハ天の河に会ふ、此夜の雨ハ織女の雨の雑書に出てこれを經史に尋ぬるに未典據なしとあらず、詩經三晥彼牽牛彼織女と云ふ、説者以為二星名なりとて實なり、夏小正に言ふ七月初昏織女正向東十月織女正向北 五雑組 牛女の事齊諧に始り武丁の妻言ふ成て博物志に成る槎に乗の浪乗千歳の下に婦人女子傳て口實とすること可ふ、文人墨士乃習て常語とす、天上の列宿をして横に汚穢と被らしむ亦怪しむべきの甚しきなり、子ハ然ども詩哥連俳の道、浪説と雖ども用ひずんバ有べからず、

薫姫 織女の異名なり 異名分類 公事根源に乞巧奠の机の上に火をともす、

短冊竹賣 七月六日市中数の

葉とうる、明夜詩哥と書て二星ふ供ぜ、或ハ短尺ふ擬の葉と用ひて詩哥と書り、今ハ民間の兒女、五色の紙と剪て短冊ゝしたるもふ古哥と書、さて其葉ふ結ひ高く屋上ふ出すこと、竹竿の立絲糸ふ換るもの、昨今市中短冊竹賣多し、又近来

七夕踊

小町踊 還魂紙料

正保の頃

五色の短冊紙と賣ひ、の巻ふ、七夕踊の曲と載せる、其詞書ニ云さてこゝも七月七日八中略乞巧奠とて、人々今宵ハ七夕祭をもてなすなり、ゝてふ七ツ八ツだにもなりぬれば、小姫ゝら、美しゝ出立太鼓と手毎ふ持つゝ面白くゝゝ踊まゝもかゝ紀是七夕とあるゝさむる事、昔今ふ怠らぬを云七夕踊を引よあるふ、ひらぬて、小女の人情ふ盆とまらぬ様て七夕よりとどる故の名ふべし、愚案問答ニ云享保十七年著七月七日七夕と祭る中略面白く歌とゝゝひ大内ゝ町ゝ小路ゝ友達のゝこゝゆ紀踊とかけたりむゝより小町とゝひむ、人毎ふ美人のゆゝふ思ひ名けて、小町踊と名付ゝり云云○七夕踊と小町踊ともひ、ゝ小街踊といへる説をわろし、題目

踊

洛北修学寺村の老媼法華の題目と唱へ踊とあるを、是と題目踊と称ふ松崎氏同

用捨箱 昔ゝ物語新見翁著ふ昔ハ死去して其年より七月高燈籠とひふものとゝるる、七回忌まてとつるもあり、立ゆゝハ六月晦日長さ五六軒の杉九太上ふ三角のひちゝと結ひ杉の葉ふて包四手ときゝて付、燈籠ハ辻番の行燈の形ふちひさく作上ひらき下ふ世ふ星根も板ふてこゝらゝ玄関ゝ臺所の間の廣ふ建て七月朔日より晦日まて毎夜暮六ツより明六ツまてともを一向宗るハゝ又ゝ他宗ハゝ丸くゝのゝくのごとし、哀ふゝもゝるり、とゝ、ゝ見享保十八年ふ記さるゝとしゝれば既ふ當時在家の高燈籠の絶るハ明ゝ和ゝとゝ、ゝの頃までゝ、ゝし、ゝ

霊祭、霊棚、棚

ら也下略○猿蓑集高燈籠ひるハものゝゝゝ拉の郎千那

經

掛索麺麻柯の著枝豆、枝豆、根芋、青蕎麥、粘米、瓜、茄子、此類聖天を祭る意あゝも秋ゝゝ青藍云むゝハ在家ふ佛檀と餅ゝ餅ゝ供ゝとゝ、ゝ故ふ、七月十二月二度魂棚と餅ゝ設け、聖天とむゝ祭り

かり、まづかるに邦宗門御改の砌我家ハ何宗なりといへ
るありしに、常に佛檀を設くることハあまねり【四季物語】
魂祭ることハ一年に二度あるものなり、わきて此月の祭を
年のをはりよりもいやまさりておもへる【徒然草】
十二月晦日の夜のことをいへる条に亡人の来る夜とて魂祭
ることハ此頃都にハなきを、東のかたにハ猶する
ことのありしこそ哀なりし【枕草紙】ゆづり葉を師走の晦
日のものとさめたてなき人の喰物にしくて云云○棚経
菩提寺の僧来りて禅前に諭経するを棚経といふ大
とりの○かの部盂蘭盆会の条にあらハしてあるべし

文字の火 せの部施火の条に出つ

鷹の塒出 【和漢三才図会】四月羽
毛を易んとする時、章緡を解き去て、鳥屋の内に放
つ日を逐て脱落して逐新毛を生ず七月中旬に旧のごとし、
これを片鳥屋といふ二歳毛を易るを両鳥屋といふ、三
歳を両片鴘といふ○鷹ハもや〳〵あらふるとり過ぬあり
今いくとせとやをとる
なるまし　定家

鷹の山別 或鷹書曰、鷹の山別
ハ七月廿五日く鷹の

巣を立父母に別るゝといふ【下学集】鷹ハ猛悪の鳥ゆへ
子生じて巣にあり、其子成長するときハ、親を食ふの義
あり、父これを畏て居に巣より一尺枝を去て
子を養ふゆゑに一尺量と呼で鷹秤といふ

鷹打
凡七八月媒を以て鷹を取ると呼て鳥屋待といふ、鷹
の雛巣を離て飛翔して自食を求る時、常に絶崖斷
巖の喬樹を度る、其巖窟の辺に小茅を結びて居て、
鷹の至るを窺て羅を樹間に張、死鳥を以て媒として
これを捕ふ、此を【阿賀計】といふ、或ハ【網掛】に作る是を鷹打と云、

鷹祭鳥 【月令】鷹乃祭鳥處暑候七月之中也、

玉ふりき 【大和本草】其実ハ梅櫻に似て、立花とこのむ人、七月七日
花瓶に其葉を去て其実をのこして多く挟む、此時其実粗熟す、

【兼三秋物】

龍田姫 【岷江入楚】竜田姫、これを桜ざるに春ハ佐保山
の神より事おこりさわ山の霞の色によせて春
をそむる神といひ、秋ハ竜田山の神より事おこりて紅
葉を詠ずる故に秋をそむる神といふ、又其に神の名と

玉兎 つの部月の蟾と云へる条に註せり、立待月 新撰六帖 我門とはいへる条に註せり、ここさとだちまちの月もこるらん 衣笠内大臣○十七日の月を山の端ひづる月と、立ゆそらひてまつ心とを、

鷹の羽芒 白き麁あるて鷹の麁に似たり、樽拔折 是酬 拔折人関東の俗ことに樽拔と云へり、酒樽の中に入置て渋を拔の謂なり、田の色 許慎云文曰 稻二月始めて生じ八月熟す云云ちなる時は七月八月青黄半熟する時あり、故に色と田の色と云、田の庵 御傘 田を守る時ごろ作りて居る庵なり 後撰 秋の田のうしほの庵のとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ、

八月 田の實の節、特 詩三 秋端正月今宵出づ、

桔梗節 その部八朔の条に出づ、端正月 冒柔月 詩 出東溟 事文類聚 前輩中秋の月と名づけて端正の月とせり、○季吟云端正の月は圓満なるをいふなり、

竹の春 竹譜 竹は八月を以春とす 筍譜 竹は八月こゝろとく小春とりの熟去んと欲し寒來んと欲す故に小春といふ、檀特花 呉響集 客又曰檀特花といふものあり花炬火の如し、こゝにも亦芭蕉の類歟、答て曰是亦芭蕉の別種あらん、和漢三才圖会 高サ三四尺葉芭蕉に似て小く、甚柔あらぎ又恐故に似て大く甚硬らぎ長サ尺に餘り、濶さ三四寸、冬枯て春生ず、七月莖を抽んでゝ花を開く、深赤色形穂最も愛べし子と結ぶ圓く黑色甚硬く用て念珠と作る、本西南外國の草性最寒を畏る、龍舌草 多識篇 龍舌草 今按多豆乃之多 大和本草 水中に花を生ず花白く菱のごとくして大なり、處々に多し、水中に生ず葉は車前のごとし、

草花 花鏡 烟花一名淡把姑 初て海外に出ず後種と漳泉に傳へ今地に隨て處あり不春不老

ホ似て巢菜より大あり、紫白の細花とひらく、和漢三才
圖会 八九月莖の頭ホ穂槌といふ小白花と開く、赤
色と帯ふ畧紫苑の花ホ似くり、ホ白花と開く、赤
子と結ぶ内ホ細子あり黄褐色、王瓜 の条ヨ注セ、

蓼の花、蓼の穂 和漢三才圖会 二三月繁
花とひらく紅白色數品あり、花穂と
茂し、秋ホ至て穂とろす、細
あり実と結ぶ、俗ふること穂蓼と云、種瓢 瓢の
もぎきものハ採収て是と搭の下ホ鉤ふ或ハ火爐の上ホ
種子と
鉤て水氣と去て乾き過して褐色とある時、種子とり
出し蓄へ、種茄子 時珍曰茄中ホ瓤あり、瓤の中ホ子
あり、諸茄老ホ至て皆黄あり、

茸狩 木の子取 尓雅 菌ハ形蓋ホ似くり、木菌土菌
石菌あり、○茸狩や鼻の先ふる三のかゝ其角

大根蒔 和漢三才圖会 蘿蔔大抵八月
種と下し、彼岸ホ苗と出セ、くゝのむ

ヶ雁 伊勢物語 こうしのくゝとのもの雁もひとつふ君
ゆくとあぞるとあくれる 八雲御抄 基俊ハ頼

特て東人酢家ハ鹿狩事ハ俊頼ハ田
面の雁ことゝ、雁抄雁と用ふ田の雁の事あり、太刀

魚 時珍曰鮒魚江湖の中ホ生ず、魚の形物と剖裂篋
刀の如し、故ホ鱧魚鮒魚の名あり、常ホ三月を以て
始て出づ、狀狹して長し、薄くして削るる木片のごとし、
亦長く薄くして尖る刀の形の如し、細鱗白色吻の上
ホ二の硬き鬚あり、腮の下ヨ長き鬚あり、麥芒の如し、
腹の下ホ硬き角刺あり、快利刀のごとし、腹後尾ホ近く
して短き鬚あり、肉中ホ細き刺多し 大和本草 本草綱目ホ載る鮒魚ホ相似て同じからず、

九月

高きホ登る きの部菊酒 醍醐祭 九日○嵯
の条ホ出つ、國字
治郡小野の南、深雪山醍醐寺ふあり、紀事 九月九日
醍醐天神祭能あり、又昨日夜ホ入て、清滝權現の社前
ホ於て能三番あり、こゝと夜宮能とハ、○神妻三基才
一長尾天神、才二清滝權現第三勝間明神、以上三社ハ、
當寺縁起ニ云、祭る所清滝權現ハ、沙迦羅竜王の才一女
ハ長尾天神ハ、延喜帝の御願ふよりて、御願寺とする

故ふ勸請あり、勝間明神ハ神縁社説詳ならず、糸切歯
例祭九月廿三日ふ記を誤りし、廿三日ハ同所笠取祭なり、
當寺の伽藍ハ、山上山下ふ分りて上醍醐下醍醐とふ、土人長尾天神を以て本居と崇む、

主の市

すの部 住吉相撲

旅夷祭

廿日、洛東建仁寺の門前ふあり、今九月廿日ことを祭る、相傳ふ建仁寺の千光國師宋西帰宋の日、船中暴風の難あり、くまゝく蛭子の像波涛ふ随て漂ふりのあり、宋西ことを収りてことを祭る風やこ波静りて恙なきことを得たり、宋西寺ふ帰りて社とすの今汎夷の宮是なり、今ふ至りて西海ふ赴く人、此社ふ詣て風波の難あらんことを祈る、故ふ旅夷と称して祭礼の日宮川町辺の居民、邃物造物ふと出て、

大般若

菊の異名あり、黄大般若万重神輿一基持鉾ことふ従ふ、

だも丸實

大般若六百巻ふ大般若六百葉故ふ大般若ふ比ものどもと名づく、白色の者又ゆるゝ、

大和本草 方土ふよりダ一ともダモとも云漢名未詳、桂の類ゝ三種あり、一種ハ白タブと云葉ハ桂樹ふ似て香熟もく收し冬赤き實あり、ツヾノミとゝハ鳥好んで食ふ、其實の大さ木穂子より小ゝ肉と去ればその内ふ円き實一つあり一種クスタブと云其葉白タブふ似たり、最よく桂の葉ふ似たり、桂葉とクスタブの葉ハそれぞれ本末なりとゝる、凡他木ハ其葉のもとゝ中ふ一條ありて桂葉ハ三條ありて本末共ふ如ふ、クスタブの葉も桂葉と同く三条あり、白タブを中のくそれぞれより又枝をもり處々ことゝ別れ、クスタブの實ハ冬熟して黒し、これも肉と去ればその内ふ實あり、クスタブの葉の形ハ桂と同じ、味も桂ふ似て香氣やゝもくあり、白タブより香あり、味辛し、未理クスの木ふ似たり良材ゝ、白タブ、クスタブとも大木なり、中略白タブクスタブの實ハ皆ふ火ふ焼ばよくもゆ、油多ゝ出て之ことゝ肉を去中の實の油とりて蠟燭ふ作る、○荏桐とダモと訓ずハ誤なり、

橙

秒の部ふ載たるハ黄熟もるとゝ、正月の部ふ載たるハ三月の部ふ洩、嘉祝ふ用ゆる故ゝ委しくハ三月の部ふ洩、

荔支

時珍曰錦荔枝本名苦瓜一名癩葡萄實及び葉葉相似たるを以て名と得五月実と下ル

苗と生ずと蔓と引蔓葉卷鬚並ふ葡萄の如くなれども小く
七八月小黄花をひらく五瓣拖の形の如くして瓜と結ぶ長者
四五寸短者二三寸青色皮の上ふ龍鱗瘤及び荔枝殼
の形の如く熟するときハ黄色自ら裂け内ふ紅の瓤あり
て子を裹む瓤の味甘くして食ふべし形扁にして瓜子の
如し亦雁瘦あり西人言皮を以て肉及び塩醬を煮て
蔬ふ充苦く渋し

連雀

和漢三才図会 今處々ふあり形雀の大さのごとく頭背
胸赤色翅黑し黄白の四文あり羽尾の端畧紅其尾短
くして黑し頂の上ふ毛冠あり眼領の辺ふ黑く常ふ
林ふ棲む群をなす形ふ素しさを以て人ふ愛と樊中ふ
畜ふ或ハ尾を拔き舞ふがごとし畧孔雀の形勢ふ似う
但し声好からず比伊比伊といふ

九月

例幣 九

ど蓋練鶯と字同音ありて物異ふ

月朔日より十日ふ至て伊勢例幣の諸家門前ふ注連
を引門外ふ標木を建て僧尼及び輕重服の輩門内へ
入べからずその字をもるもそれと前斎とい八十一日の朝幣
使発足へ 公事根源 例幣とハ伊勢大神宮へ御幣を奉
らせり八毎年のときもれば例幣とい申ふ 續日本紀孝德
天皇天平始て伊勢大神宮へ幣帛使を製せらる詔て
今より以後中臣朝臣と差して他姓の人を用ふることを得
ざるとと命じのふ依て大中臣藤波家祭主ふて[illegible]と掌ら
るひ最上所と神祇官代とをるべ

そ

兼三秋物爽氣

連三の新式

漢和の篇ふ云爽ハ秋のとくさやけしとよむ 増韻
爽ハ清快ふして爽氣深出 爽松生詩

袖の露

袖の時雨もとい八が如し袖の滝
千林赤

つ瀬ハ涙ふ袖の露ハ涙ふも浪る
るる

添水

かの部案山子の条ふ出

八月

獻胙

せの部款奠の条ふ
らず

注

蕎麥の花

時珍曰蕎麥一名荍麥莖弱く翹
を

然として長し易し收り易し殺ふ
磨て麥のごとくも故ふ蕎といひ荍と云麥と名と同
うするゆえ立秋前後種と下し八九月收り刈る性畏霜
と畏る苗の高さ二三尺赤莖緑葉葉烏羽樹の如く小
白花をひらく繁密粲々然として實と結ぶ累々として

羊蹄の實の如し三
稜あり老る時黒色、

九月

蘓我菊 黄菊をいふ

このつり、蘓我といふ名の説あまたしかあらず、拾遺集 雑「かのをかる池辺にたてるそがぎくのしげきさえだの色のてこらさ」よミ人しらず○しげきさえだハ繁き小枝也、

袖の霜

いろのてこらさハ色のてりてきらゝなるをいへり、

増山の井 猾稽古 糸衣 なとに出しどうこの部衣打袖の霜といへる条に注せり、

つ

七月

机洗ひ 硯あらひ

児童七月六日に机硯をあらふことハ北野の神事にならふなるべし北野の社において六日に松風の硯に梶の葉を添て供え児童の手跡を学ぶかの輩ら北野を崇信して故に机硯を洗ひ清め北野の神に梶の葉そへし手向るなるべし、又二星に手向るものを書為ともいへり前説よろし、

妻迎舟、妻むかへ舟、妻送舟

万葉 ひこぼしのつまむかへぶねこぎ出らし天のかはらにきりのたてるハ 新勅 天の川うきり川あさにひこぼしのつまむかふぶね今やこぐらん 新六帖 ひさかたの天の川門ハ明になりつまむかへぶねいまやかへらん

續猿蓑 舟よりの雲をひらく夜ほしの影 東湖

辻相撲

公事にあらず、いづかたにもあることの人、壁に八禁裏御神楽に付て民間にあるを、里神楽といふがごとし、神社などにある常の相撲なれども、禁裡の相撲にならひて秋とするなり、

衝突入

十六日 滑稽雑談 昔ハ諸国にて衝突入とて家々秘蔵せる器物或ハ其家の嫁娘妾妻まで常にをしきと思ふものを、客殿居間に限らず深く入て恣に見しこと近須まで勢州山田にありしかど、世人山田のつと入といひ傳ふ、むかしハ諸国にありしとなり、總て家財の類を蓄ふるハ、貪欲の道なるゆゑ、これを懺悔のためにさせしとぞ、今世ハ絶てなきことなり、

爪紅

本草 鳳仙花をいへむの部にあるべし 天和 女児鳳仙花と酢漿草の葉とを合せて爪を染む、紅色になる云々故に名く、

兼三秋物

露 露けき 露の玉

月令章句 露ハ陰液也、釈て露となり結びて霜となる、○増山の井に出せる波の露ハなみだの露の誤也○

白露、袖の露、上露、

以上頭字の部ふ注ス、

露の身 露の身とハ、露のごとき もろふ死身といふこころ、

曠野集 附句 露の身ハ泥の

やうなるこのおりひ荷今

月

物理論 月ハ水の精、朝ふ大小あり、月ふ虧盈あり、

説文 月ハ日の照ま処よりろ生ず、故ふ哉生明といふ、魄ハ日の蔽ふ処より生ス、故ふ又哉生魄といふ、昏ふ當る時ハ光ま盈ツ、日ふ就ときハ明盡○桂男、さらえ男、照月

次、新月、弦月、三日月、王兎、銀兎、玄兎、在明、哉生明、既望、既生魄、いさよひ、哉生魄、暉素、金波、夕月夜、暁月夜、夕月日、朝月日、立待月、居待月、臥待月、くゞもち月、廿日夜、中、更待月、常娥、真如の月、心の月、胸の月、盃の影、まるほし、朔日ごろの月、ねまちの月、以上各頭字の部ふ

月の霜、月の雪 杜甫、仲秋詩、満月飛明鏡、

わりもて註ス、

帰心折太刀、轉蓬行地遠、攀桂仰天高、水路疑月霜雪林、唯見羽毛此時驚、平兎直欲數秋毫、

月の桂の花紅葉 桂男 西陽雜俎 月中ふ桂あり、高さ五百丈、下ふ一人あり、

常ふ斧ととぎる、樹創ふふ隨ひ合ま、其人姓ハ吳名ハ剛、仙を学ふ過ありて謫せられ、樹と伐らしむ、○桂男ハ吳剛と云し、八雲御抄 月の桂ハ光とりふ、古今 久しくこの月の桂を

秋、あれうしぐもりまるまでとりてはきるらん 忠岑 冬の日

附 西南ふ桂の花

月の桂の花七子 蘇詩注 杭州の天

月の法ひ時 羽笠、 竺寺八月十五夜

常ふ桂子あり て落つ、本草綱經 江東の諸處多く衢

路の間ふて桂の子と捨ひ得ごとと破ハ辛香、古老相

傳ふ是月中より下る 御筆 桂ハこのる三五の

秋と詩ふと侍ふ、実とハ秋ふ定のきあり、

月の

巡 山説譬喩經 黒白の二鼠あり、互ふ樹の根と齧ひ、

乃至樹根ハ命ふ喩へ、黒白の二鼠ハ晝夜ふ喩ふ、

奥儀抄 無常の喩ふ人虎ふ逐はれて、野中のふ一井へ入

とこして岸の草とひく底とをれバ毒蛇口ど開きてのまん

ふ、又黒白の二鼠、のそるくとの草の根と食ふせん

まで、ふくて、毒蛇の為ふ害せらるゝこと是虎ハ平生造

悪の罪業、黒白の幾ハ月日の過ゆく、毒蛇と地獄ふ

もとゝ人ふ是と月の巡とりふ、樵炭經の文ふ

の劍三日月の形ふるくるるあり、

月の都

日宮殿 太平廣記

羅公遠傳云、中秋の夜時ふ玄宗宮中ふそ〻月と話ふ公遠奏して曰陛下臣ふ從ひ月中ふ遊んや否や乃ち拂袖と取空ふ向ひ擲つ化して大橋となる其色銀の如し帝ふ請て同く登る約まるふ行こと數十里精光目と奪ひ寒気人と侵す遂ふ大城闕ふ至る公遠曰此月宮也仙女數百皆素練寬裳して廣庭ふ舞ふと帝問こ曰此何の曲ぞ曰霓裳羽衣の曲ぞ玄宗密ふ其声調を記して回る傾見ハ其橋歩ふ隨ひて滅ぬ

月の蟾、月の兎

玉兎 五經通義 月中ふ兎と蟾とあり

ハ何ぞや月ハ陰ぞ蟾蜍ハ陽ぞ兎ハ陰ぞ蟾蜍ハ陽ぞ兎ハ陰ぞ

と並ひ明ぞ陰陽ふ係るぞ○杜甫詩云搗藥兎長生○白居易詩云照地幾許人斷腸金蟾玉兎遠不知○蟾ハ月中三足の蛙ぞと玉蟾とふ、

月の蝕

天經或問 星月皆日の光を借日ハ月天の上ふあり月ハ日天の下ふあり朔日月行と日天の下ふ在て日の光と掩ふ人地面の上ふ在てこと仰き視るときハ其月の日と掩ふところ〻ふありて日光あれども如し然も寔ふ常と失ふぞる〻人其光とそぞる故ふこと〻と日蝕とふ月蝕ハ朔より望月ふ至る一向八十度ふして日月望む中間ふ正對まるとき地球障隔そ、月地影の上ふあり日地球の下ふありて日光こと〻と隔ぞる故ふ月其光ふし是と月食ぞ

月讀男

拾穗抄 月ぞ男月讀月夜見皆月の名

〻日本紀ふこの月ハ男神故ふ男とのへ

月の出潮

性理大全 余襄公安道云潮の漲退ハ海ふ增減まるふあらぞ蓋月の臨む所ふ則水往て西極ふ臨む故ふ月卯酉ふ臨むとき八朝南北ふ平ぞ月子午ふ臨むとき八水東西ふ漲る彼竭き此盈て往來絶まぞ皆月ふ繫る

月の秋

御傘 露水あるぞふ結夜るぞ花の春ぞ

月の宿

御傘 人倫ふあらぞ月とる宿の植物ふあるふ同ぞ、月ぞ八月とる宿の事ぞ居所あり、

月とあるじ

御傘 人倫ふあらぞ月のあるぞ八人倫ふ

の友 [卿傘] 人倫ニ但し旬体ふるべし、月と友人倫ふあらぬ、朔日頃の月

[源氏浮舟の巻] ついたちごろの夕月夜云云 [炭俵集] 細く、とついたちごろの宵の月 利牛○月のもじめとつゆくちごろ、こいい月のをそうとつゆくりごろ、らふ一日三十日ふきらも、月の舟 半月をいふあり、

月のこのみ 満月とつく、蔦 蔦紅葉 時珍曰蔦ハ松蔦ぞら 柏の上ふ寄生

女蘿ハ是松の上ふ浮蔓も○地錦 [大和本草] 葉ハ衣の紋ふ付るツタふ似て冬月も葉ゆちも、皆本草ふいやぐ、とし、和俗壁生草といふ秋ハ紅かく、常のツタハ是ふ似

[和漢三才画会] 烏蘇毋 俗云豆大 本細ふ、そう冬ハ葉おち、塊塹の間ふ多し、藤 柔ふして稜あり、一枝一鬢ふ五葉、兼長くして光て、疎齒あり、面青く背淡し、白蘇の葉のごと、故ふ烏蘇毋と名つく、七八月莢と結び簇とをなす、青白色、花の大さ粟のごと、黄色四出音と結ぶ龍葵の子の如し、生、青く熟まれバ紫く、内ふ細子あり云云是大和本草ふいへ夏蔦ハ秋ふ至て葉深紅愛もべし、

[和漢三才画会] 仏掌薯 葉葛藤の葉ふ比べ、黄褐の葉ふ似て畧小し、其根の状仏手柑ふ似て肥り、大く蠻夷者の如、故ふ名づく、鎮江府志ふ所謂佛掌薯ふ、

粒芋 其茎ふ紫の理あり、子 白粉 茨栗を以て救と連ふく四くして味美く、

ね曝し乾て、或ハ糸ふ繋て晒し乾す、初蕎麥稽稲藁と用て包宿して、よく霜を生ず、豫州西条の産甘美く、備州ふて次く、濃州及び

甘藷 [和漢三才画会] 仏掌薯 葉葛藤の葉ふ比べ、黄褐の葉ふ似て畧小し、其根の状仏手柑ふ似て肥り、大く蠻夷者の如、故ふ名づく、鎮江府志ふ所謂佛掌薯ふ、

尾州の産ハ長さ三四寸ばかり、

[秋] 八月

[記] 気比の神宮ハ字佐同体ふ、八幡ハ應神天皇の垂跡気比ハ仲哀天皇の鎮座ふ、例祭八月十日○今月二日ふ了十日まで、近国廿里四方内諸商人放下師在言師等来て集ふ、二日神輿洗あり、敦賀紙屋町と云所ふ、例年紙細工の家墨燈籠と出し、京の祇園囃と模

氣比大明神ハ越前敦賀郡ふあり、祭神仲哀天皇 [風土記] 氣比の神宮ハ字佐同体ふ、八幡ハ應神天皇の垂跡氣比ハ仲哀天皇の鎮座ふ、例祭八月十日○今月二日ふ了十日まで、近国廿里四方内諸商人放下師在言師等来て集ふ、二日神輿洗あり、敦賀紙屋町と云所ふ、例年紙細工の家墨燈籠と出し、京の祇園囃と模

[秋] 八月

いハ、 [絲雀] 名の部繪行器の条ふ出り、 敦賀祭 甘

ま、三日神事四日と後宴と称し、町々の氏子東奮西奮と
ろ〻引山と出し、地車ゐて町中と引廻る、山の上ふ一丈
ごうりの松と立四方錦繡の幔幕水引ホ、洛の祇園祭の
山の如し、上ふ武者人形と飾る、山の數或ハ五〻或ハ六〻祭礼
當日ふこゝと出ま、天神の森と
いふ所、御旅所として神輿遊行、鶴が岡八幡祭十音
相州鎌倉ふあり、一名ハ雲井ゝ峯、上の宮三座、中ハ應神東
ハ神功、西ハ妃大神、神下の宮四座、仁德天皇東ハ久礼
字礼の二神、西ハ妹比咩、後冷泉帝の御宇、伊豫守源頼
義朝臣、安部貞任と伐時、丹祈の旨ゆうて、康平六年八
月石清水の神と相州鎌倉郡今の下若宮の地ハ勸請ま、
永保元年二月成就、義家朝臣修覆と加ハ、治承四年十月
右大将頼朝卿、小林の郷ふ迁ーまハこと、今の宮ゐ鎮ゐ、
毎年八月十五日放生会並ふ祭礼奉幣、流鏑馬角力ホ有、

司召

敦隆卿記 司召ハ秋の除目ゆ、京官除目と号
す、春の除目ハ縣召と云て、各拜任の輩ことゝ
ど召、春ハ大政官の廳、秋ハ外記の廳ふ於てことゝ召、御
司召と称ま、○司召定考、同儀ゝ、そゝり猶この部定考

の条とも見つき合ま多し、

月見

名月 今宵の月 八月の月 半角望の月 十五夜 三五の夜 月華

事文類聚 歐陽詹翫月詩序云月之爲翫久則繁
霜大寒、夏則蒸雲大熱、而藏月霜侵、蒸雲俱
害翫秋之於時後月先之八月於秋季居孟終十
五之夜後之月之中譬於天道寒暑均平月數則
譬中月況埃塵不流、大空悠々蟬始緋、徊博華上
浮月東林入西林肌骨與之肅冷、神氣與之清冷
○名月 湖東問答 去来云三五十五夜月ゐて名月と
いゝ、そのうちいづれの月ゐもらぞ名月といふ故あること
きゝ及、然ども今日名月の詩哥と作りんおもむき故
實ふ限るべゝぞ、尤故實ふよゝ〻ば佳ゐるべゝ、又明の字
と用るとハ和漢とゆふ三五の清光と賞し来る故ふ明
と名と通ひゝるとゆうて通用もべゝ、○今宵の月ハ今
日の月、以上十五夜の月ふ限ゐていふこゝもこと且るハ今
宵と賞ゐるところ旬中ふいらざれバゝゝるべし 續裏葉

御湯殿記 名月御祝三方ふ芋だうり高盛て 義時

拾遺 浪華の俗十五夜を芋名月といひ、十三夜を栗名月といふ、○三五の夜、白樂天詩、三五夜中新月色、○月華

五雜組 人々八月望月華あり、或ハ夜半、或ハ微雨後、或ハ必八月のこゝろ、秋後の望ことゆふこゝとあり、或ハ

ゝ、その五采鮮明旁照、數十丈、金線の碧きもの百餘道、或ハ但紅雲ごとき間、繞るのみ、臨川吳比部攜謙ふうし

時一度ごとに見るその景象鮮妍千態、方燭点人間、まぐこれと見るる所の奇、

月草、露草

時珍曰、鴨跖草花碧蝉花といふ、三四月苗を生ず、莖葉ともて葉竹ふ似くゝ、嫩き時食べ、四五月

花をひらく、蛾の形の如し、兩葉翅のごとく碧色愛すべし、

巧面其花を採て汁と取て畫色と作て書碧ずゝ、黛の

如し、倭名抄 鴨跖草 和名都久佐久佐 仙覺抄 鴨跖草月草と称

す、月草ハ露草、早く方の花ハ朝日影ふゝて咲と、無花ハ月影

ふ咲けバ月草といふ、

土茵

和漢三才圖会 土中ふ生ず、

月夜茸 大毒ハ

格物總論 燕春社ふ來り、秋社ふ去る、故ふ是と社燕といふ、

鶺鴒歸る

和漢三才圖会 百舌、反舌、鶺鴒、馬鳥俗ニ云真豆久見

狀鶯鵲のごとくして灰黑色、京師除夜毎ふこれを炙て

食ふと祝

例とす、

九月

津村祭

廿七日○津村の御炭社

八、概ね西成郡大

坂津村ふあり、祭神鐵倉權五郎景改ノ靈とい、摂陽

郡談 昔津村何某專ら武勇と勵ミ、諸國と巡行して

軍術奥旨と極め、相模の国ふ至りて一夕景改の社ふ

詣て神殿ふ通夜ス、時ふ神某ハ武勇を感ド記して

云摂津の國難波の勝地ふ祝ひ祭ル、我將ふ汝と擁護せ

ん、答云何を以て證と、云曰、枕上ふ神幣あらん、明旦さ

めてこゝまでハはくして神幣あり、みづからこゝと負ひ、津

村ふ帰りて、義祠と造て神幣と納てこゝと祭る、御炭

の宮これ、元禄のころ御炭の大明神と贈号あり、毎年九

月二十七日、神祭、神湯の式あり、津村の土人本居神とも、

椿の實

和漢三才圖会 海石榴ハ、實四ハ、無果花

ふ似て老て枯るゝとき、皮と剥て

海松子のごとく、皮と剥仁と取搾て

油と取、但千瓣の者ハ實と結ぶも、

露時雨 露

霜、露寒 古今 ささらひらこと申せしかの木の下露ハ西ふまきまろ」暮秋の露のさくんあるとつゆ時雨ふらん露霜、露寒ハ露の気の凝れるを云ふ、

の糸 公事根源 乞巧とハ七夕祭ことのふり、香花ことふ供具ことくのくて、庭上ふことをおきてさとのもしふ五色の糸とりけて、一事を祈ふ、三年のうちふ必叶ふとして、此糸ふ乞巧と申そく、朗詠 憶得少年 念佛踊 洛北川合長乞巧、竹竿頭上願糸多、白居易

まつち月 新六帖 秋の夜のいろねまつちの月うけふ身と吹くるもの奥の松風 衣笠内大臣 八重垣 ふ〜まつちの月、十九日の月、一説ふ子待、廿日の月、

兼三秋物孫 八月 和漢三才図会 俗ニ云鼠茸、朽木及び老樹の根上ニ生ず、九十月盛ふ出、一根座とふ〜数十叢生ず、繊円く池頭鉢ふ似て、長さ一二寸、茎細く柔軟ふ、繊の内外灰白色凡て灰白色ある者を呼て鼠色と此物浅鼠色あり、故ふ鼠茸と称ふ、

蘑菰蕈 日本紀 持統天皇九年七月七日、公卿と宴し、朝服を賜ふ、紀事 今日武家並地下の良賤、各白唯子と普愛と修ス家々索麦と喫又西ふ相贈る、

七月 七日 御節供

七箇池 百箇池 事林廣記 漢宮七夕ふ百子の池ふ臨ミ五縷を以て相鬬そこと相憐愛とい八〇七箇の池と八星と祭ふ七ッのたらひふ水と入て、鏡とつけて、ほ一の影とうつるを見ハ百箇池ハ天の川ごもい小ふ、こ姫とハ棚機とい小又百のしらひふ水をこ一〜ふ

刀豆 時珍曰、莢の形を以て名を命ずる、家を多ふ良成式酉陽雑俎ふ云、楽浪ふ挾剣豆あり、莢横ふ斜ふして人の剣を挾ふるが如し、即此豆ふ、三月種を下て蔓生し引て一二丈、葉紅豆の葉の如くして稍長大、五六月紫花ことひらく、蛾の形のごと〜、莢と結ぶ長き者尺ふ近し

微卑莫ふ悠扁して、劍脊三稜宛然たり、**棗の實** 時珍曰、按ずるに、陸佃埤雅、五大あると棗とらひふるを林とふ、大和本草、夏芽を生ず故ふふつめといふ○花の形春のふの部棗の花とらるる条ふ註を、

兼三秋物

梨子 時珍曰、梨樹の高さ三四尺大いなる葉光膩あり、細き葉にて、二月白花を開く、雪の如し○犬殺紅瓶子梨、觀音寺梨、妻梨、也尾梨、水梨、田梨、空閑梨、鹿の梨、こふの浦梨、山梨ふの種類多し、各頭字の部ふ見のちて注を、

鳴子、鳴竿 朗唱秘抄、禅の先ふ鳴子をつけて、宇山里ふ栗とりふるめと作り猿を追ふ○秋の田畑ふ作る鳥獸を驚ろかす具ふ

八月

長き夜 夜の短きに至りは夏至ふ過ぎ、夜の長きに至りは冬至ふ過ず、然れども秋の夜を以て長夜とする所以は秋分昼夜等しく、初て夜の長きを覚ゆ、夏の短夜ふ對して秋を長夜とするの名の木散 麁文曰、按ずるふ、杤櫨柞ふのごとひそ、櫨ちる柞ちるとりふべきと略して名の木散

ちるといつるあらんべ然るとも未練の俳上ふ用ふるとて発句ふ

千梅も此事如何

滑煤草 和漢三才圖会、穀の樹のよ〜ふあり、もろ〜ふある者三四歩大小叢生、淺渇色に帯内刻あり、甚滑其莖煤黑色奈女ハ滑〜須々ハ煤名まり、木蘚の上

中稲 和漢三才圖会、凡八九月苅収るを中稲とす、

中晩大根 和漢三才圖会、八月ふ種を下し、彼岸の中ふ苗を生ず、梢長くして瓢の尾の如きを中晩大根とい、霜の後肥太る

菜種蒔 注ふ、不及、

中汲酒 半清半濁の称あり、

九月

鳴瀧祭 福王子祭 鎮守の社洛西仁和寺の西北、鳴瀧廿八日

鳴瀧川の辺ふ在ると封ず、西朱雀より西荒ふ至り、諸神記、王城守護三十番神右白虎八神、高雄の麓て九町の擁護神、擁州府志、福王子の宮ハ、西山鳴瀧ふあり、こゝ此辺の地主の神ふて仁和寺の鎮守とす、西社ともふ土人本居神とす、同日ふ合せ祭る、紀事、鳴瀧

福王子祭九月二十八日、神輿一基、鉾五本御室の御所の庭ふ入云五〇福王子の宮祭る所班子皇后〻皇后ハ桓武帝の孫女ぉ〻て、吏部尚書仲野親王の女〻光孝帝立て皇后とゆる、字多帝を生ゆ〻此辺の地主神と崇ゆ〻幸り仁和寺の鎮守ゝと、滑稽雑談俗ふ五器洗ひとゆ〻是一年中の諸社の祭祀の終ゝて又當月の外ふ神祭ゆきゝ故〻毛吹草ふ鳴滝祭廿八日と記ゆ道来の能書外ふ福王子祭と並〻載ゆ〻同杜の祭と謬て再ひ出ゆ

楢 和漢三才圖会 倭名奈良、俗ふ古奈良樹の高さ丈だゆ〻花實瓣柞の輩のごゝ〻秋日紅葉ゆる時人ゝと賞ゆ大和本草 瓣と大奈良とゆ〻葉栗の如し秋冬枯て落ゆ四五月花ひらく栗の花ふ似ゆ〻實ハ椎のゆく大〻其苞半つゝ忙又小楢小木ゆ〻材木ゆべ〻ゆ〻ゆ〻實の苞あり半とつゝむゆと即團栗ゆ〻

南天の實 薬頌曰南燭株高三五尺葉苦楝のごゝ人家多く庭除の間ふ植俗ふ南天燭と云〇夏のふの部南天花の条ゝ

ら 七月蘭

宗奭曰葉麥門冬のごゝ〻て濶〻且鋭ゆ〻長三三尺四時常ふ青〻花黄緑色中間瓣上ふ紫の點ゆ〻春芳〻き者と春蘭とゆ色深〻秋芳〻き者と秋蘭とゆ色淡〻開く時満室尽く香〻他花と又別〻〻山谷曰一幹一花ゆて香餘ゆ〻ゆ〻ゆ〻蘭ゆ〻幹數花ゆて香ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻蘭ゆ〻俗ふ花と玩賞ゆる蘭〻真蘭ふゆ〻ゆ〻今の蘭ハ本草ふゆ〻と出ゆ〻蘭草集解正誤ふ載ゆ〻

七月迎へ火 送る火 七月十三日黄昏ふ門ゆ〻都部とゆふ聖灵と迎ゆ〻の義ゆ〻此時門前ふ於て必麻柯と焚て灵を迎ゆ〻火とゆ〻十六日又灵と行ふ灵と送て火とゆ〻報恩経七月十四日卯時来り次の日十六日午時去ゆ〻五雜組人最中元と重ゆ〻家〻猪陌冥衣の具と設け先人の号位と列ね祭て灵と燎〻女家則父母の冠服袍笏の類と具〻皆紙ふ為る者ゆと篭ゆふ紗と必ゆ〻これと紗箱とゆ〻父母の家ふ送ゆ女死ゆれハ壻亦代て送ゆ莆中ふ至ゆときハ則清晨陣設ゆと甚

嚴〻子孫冠服と貝し、揖讓盤折して神と導き以入る、祭畢て復送りてこゝを出ることゝ云、

迎鐘

ろの部六道

虫送 紀事 年ゝ依て田蝗害ありて時民人鐘鼓を擊野外ゝ送る

桑の条ゝ出、

これと虫送とゝふ、凡旱歳ゝ五穀の枯萎むと燒るとゝ茄の根の枯ると舞とゝ瓜の蔓の枯ると上るゝ、是民間の詞〻○いの部

木槿 時珍曰此花朝ゝ開き暮ゝ落故ゝ日及と名

蝗の条ゝよそ〻しるべし、

づく槿といふ蕣とゝ猶僅采一瞬の義なり○其木本の如く其葉末尖りて捶歯あり其花ゝうて艶〻或ハ白く或ハ粉紅單葉千葉

室の早ゝせ 古今六帖 津の國の

の者あり人五月始てひらく、

むろの早ゝせいでぬことをめでゝはやるものとぞ

此三の夫木集ゝハぎの國の室の早ゝせらて入り紀伊國ゝ年貢郡ゝまぐ夫木のゝふもとゝべしと年貢郡の早ゝせとゝ夫木て古説ゝくるハ誤なり杜撰

兼三秋物

虫、虫籠 爾雅 足ある虫

とゝふ蔬云此文ゝ對するゝ敢て詩ハ足あるも虫と云、

雍州府志 下賀茂の社司の婦人松虫鈴虫を養ふ籠と作る其式纖細竹を剖て篭と造る内ゝ一筒を安き土を盛て苔を敷き露草少しをうゝ種俗ゝ所謂露草ハ鴨跖草ゝ、紫白の糸を以て藤花の形ゝ作り、籠の上より下ゝ垂る其躰觀るゝ堪たり秋ゝ至て虫を入檻の下ゝ掲或ハ簾外ゝ掛く、昼ハ虫を見て目を悅ましめ夜ハ虫と聽て耳を娯しむ、

虫合

虫の声のちがひを合せて遊ふとゝふ、

胸の霧 思ひの晴やらぬことをハ、

胸の月

萩のうちをり 胸の月、胸のうちの曇らぬ清きまゝるべし、猶深意も侍るゝや、

八月 紫式

花 花紫ゝて

の部ゝ出、

椋葺 和漢三才圖会 椋の木の上ゝ生じ形狀榎葉ゝ異る

椋鳥 漢名未詳 和漢三才圖会 椋樹ゝ棲故ゝ俗呼て椋鳥とゝふ、形小鳩の如くして頂白く背灰黑色背の下黑白層〻眉淡黄頷の以下腹ゝ至て俱ゝ白し翮の上灰黑色の斑あり翅の本微白羽黑

白交ぢり嘴黄色嶋の辺微黒と帯脚歴黄その声鶏ふ似て喧く好へて群とまと、又小椋鳥あり狀相似こ小〻

九月

撰虫 公事根源 是ハあるべ殿上の道遥とて殿上人とも遊び て、嵯峨野おぐくひろひて、**木蘂子** 義恭曰蘂幸此虫と蔓ふえらこ入て奉る、 樹葉木槿ふ似て薄し、細き花黄ふして槐ふ似て稍長大、二三殼酸漿ふ似て其中ふ実あり、熟せる豌豆の如く円く黒くして堅硬し、数珠ともるふ堪ふる者是ふり、五六月花収むし南人以て黄と染其ご鮮明ふし **椋の実** 時珍曰魚患子樹甚廣大枝葉こふ椿の如し、特ふ其葉對生ふ、五六月白花と開き実と結ぶ大さ彈丸の如し、狀銀杏及び苦楝子の如し、生ハ青く熟ふ黄ばむ、ときハ油爆の如く黑く成ふ、黄ばむときハ文殼あり、殼と去て仁とする者、

七月

烏鵲の橋 しそかの部ふ注ス、 **盂蘭盆** 日本紀 齊明天皇三年七月始て盂蘭盆ご設ケ同五年勅して盂蘭盆会ご諸国ふ下し講ぜしむ、 釈氏要覧 盂蘭盆ハ是釈氏の孝と述恩と報い苦と救ふの要こ、自蓮の母ごをこふと以て始こす、梵語ふハ盂蘭云目蓮比丘その母の餓鬼中ふ生ずると見て、即鉢と以て飯ご盛り、往てその母ふ飼ふ、食いまぐこ口ふ入らば、化して火炭ごなる、終ふ食ふことと得ず、目蓮大ふ叫びて馳還り、佛ふ白す、佛の曰汝ご母罪重し、汝一人の力ふよること能ハず、当ふ十方衆僧の威神力ごもむべし、七月十五日ふあるべ当ふ七代の父母現在の父母厄難の中ふあるかの為ふ至て、当ふ百味五菓を具へて以て盆中ふ著て十方の大徳こ供養をべし、仏衆僧ふ勅して皆施主のこめふ七代の父母こ兄願し禅定の意と行ハしめ、こうして後食と受ま、この日目蓮の母一切餓鬼の苦と脱ることと得こ、目蓮仏ふ白す、永く来世の仏弟子、孝順と行ふ者、又盂蘭会と奉じ、まつることと得せしむべし、可ならんや、仏言く大善し、故ふ後代の人これふ因て廣く華飾ごなし、乃ち木ご刻

こ竹と割飴鍋煎糸花果の形とふし、工巧の妙と極るふ至る

鬱金の花 時珍曰鬱金二種ア

鬱金香是花と用ふ根と用ふる者ハ其苗薑の如し其根大小指頭のごとし、外黄内赤く人以水ふ浸し色と染し又微香氣あり、又曰四月の始め苗と生ず薑黄ふ似て花白く質紅ありて末秋ふ莖心を出して實ふしゝ嶺南の者ふハ實あり、小豆ふ似て嚙ふふ甚だ、

馬追 「ちくらせど」 江東の俗スイトとゝふ其声ウイとゝふべごとゝいふこふ似て小ふして色純青し尻ふ劍あり、又ふきるあり、雌雄の異あり、中元の時夜盛ふ鳴其聲紡車と撚ぐごとし、関東の俗言ふ馬追とゝふ、

兼三秋物 「上露」 嘉元御百首 凡そよゝ野ならの草の上露ハ落て下葉ふまとむもびくふ多くこれあり、甲州信州下野最多し、畿内の産又勝れり黄赤ふ白斑の彪あり、珍き彪のごときハ人甚これを賞ず其声知地快とゝふべごとゝ、數品あり、嘩々快と上ゝ毎ふ早且日午夕暮ふ鳴、凡春三月始て鳴出

種ふ至て声を止む六月又更ふ声を発し中秋ふ至て声を止む人是と養ふ其雌ハ小く足卑く嚙ぐを呼て阿以布とゝふ○片鶉駈鶉 鶉と取る各頭字の部ふわるもて註ス、

鶉鷹 鶉鷹あり、

鶉衣 荀子曰子夏之衣懸結として鶉のごとし 御仝 只他人の短き著物をゝふ然ると秋の季ふつゆ名生類ふ二句去ル○一説ふ衣の裾の破もて鶉の毛ふ似るとゝふまり、

鶉の床 御仝 新式と云ふ夜分ふあらざる物の處ふ鶉の床とゝり出せ事此道理とゝ簡をるふ余の鳥とゝりてさらふ空を翔らゞ畫し草のうちふのこゝりふとり、此鳥ごとゝ鰻と床とゝても夜分ふゝらゞと定ることゝえゝ云

簗 和漢三才圖会 鰻鱺此物冬春ハ泥穴ふ蟄し五月ふ至て游ぎ出ッ此時味勝て子を生ず縛くして長サ三四寸性滑ふて利ゝ泥中と潜る故捕へ難し江州勢田城州宇治名と得ゝ、紀事 秋月鰻鱺流ふ從ひて下る是と落鰻鱺といふ簗と以てこれを捕るふ流ふ從て簗の中ふ落入故ふ捕へ易くして魚店ふ

多くこれを賣る、

八月

宇佐宮祭

十五日○豐前宇佐郡紫雲ふ

ゐり、欽明天皇三十一年、豐前國菱形の峯菱形の池の上の民家の兒ふ託して曰我は是第十六主譽田天皇廣幡八幡く我を護國靈驗威身大自在王菩薩と名く、迹を諸州ふ神明ふ垂る今顯ふ此地ふ在もゐりてこれを奏ふ勅して祠をうつ八方ふ八色の幡を立つ故ふ託宣して八幡と号く○社說ふ當社祢宜奏して云大神の託ふ宣く我光量劫よりこのゝ三有ふ化生して善行方便を修し諸の衆生を濟度を我名を大自在王菩薩とせしと帝叡聞あり事ふ許しまはす

公事根源 八幡ハ垂跡の号、後ハ豐前國宇佐ふ鎮座ゐり依て彼寺ふ勸請申されきさ必勅使をどハ猶聖武天皇東大寺建立の後巡礼ゐふ宇佐宮祭ゐ已へ宇佐ふ赤もり○宇佐宮祭ゐ已へハ勅會し放生会ふ此地を始とも、

山城風土記 鬼道とハ輕島明の宮の御宇天皇の御子宇道の稚郎子桐原の日桁の宮をつくり宮室

とし〻くゐ〻ふよりて御名を宇道とこの公年濃皇三除齊云鬼道の稚郎子崩御の心を新勅撰に日ふし人のなくさを露ちん世と宇治山の秋の花園とも思ふ宇治の花園ハ桐原の日桁の宮の花園と故ふ慈鎮和尚を稚郎子崩御のそゝろとゝ〻ゝ千梅春耕とゝ〻ふ頼通卿の花園と記せり、稚郎子の崩御のそゝろを詠る哥ふ臣下の花園とゝり合せて詠る例ふし、殊更慈鎮ハ宇治の関白頼通公とゝり五代後法性寺兼実公の子こその先祖の花園とゝ〻ゝ

薄紅葉 薄色のもみぢとゝ〻

梅嫌 和漢三才圖会 梅嫌木 本草 未詳 葉四〻大り微ふき鋸歯あり野梅の葉ト似て小〻冬凋ム春芽を生ず五月小白花を開く暑南天の花ふ似て子を結ふ初ハ青色十月葉落て子紅ふ熟す枝幹ふ添て多く美し一種白き者あり異て珍とも然ども赤き者ふそ

漆の花 韓昌黎詩 漆高二三丈餘皮白し葉椿ふ似て花を開ふ似てこの子ハ午李子ふ似て本心黄し六七月刻て滋汁を取る

茴香の實

[和漢三才圖会] 倭名 久礼乃 本綱茴香 宿根より深く苗を生ず。叢をなすも、高さ三四尺、肥さる莖、葉糸の如し。五六月花開く、蛇状の花のごとくして色黄、實を結ぶ大さ麥粒のごとし、輕くして細き稜あり。俗呼て大茴香と云、今惟寧夏より出る者と以て第一とす。他處より出る小き者これを小茴香といふ。按ずるに懐香を大茴香とすべし。雖今唯大茴香と称る者八角茴香、本朝未小茴香と称百之。もろ者即懐香、和多くこれを種て用ふ。高さ三四尺肥さる莖、粉青色、細き葉浅緑糸のごとく柔脆夏小花をひらく、淡黄色、子を結ぶ形、秋の麥小似て小く筋稜あり、中の子八皮と同色ふくらんで飛散る。延ふ苗を生ず。

鶉艸

[さくうせう] 一切の因、史草史和名抄ふ此名あるものをえぶ草花肆ふ尋るふ[illegible]、或絵師ふ尋ね侍るふ、栗の異名。

海雁

[天和本草海] 在て其大ある者常のありといふ。ものをぎきわ、雁ふ比ぎを比ば微小あり、色灰色の如く、味及び足黑し、其頸ふ環の如き白色ゆり、想[illegible]有、

九月

太秦の牛祭

[紀事] 十五日 山城国太秦の廣隆寺八常盤村の南山の内村西北にあり、桂の宮院内ふ伽藍神あり、大辟の神社と号す、祭る所の神秦の始皇帝なり、元亨釈書 聖德太子九つの伽藍を造る、四天寺法隆寺元興寺中宮寺橘寺蜂岡寺、廣隆寺の別号池後寺、葛城寺、日向寺、[紀事] 上宮王院の庭ふおいて牛祭を修す、寺僧各集会す、相傳ふ慈覚大師帰朝の日、順風を摩多羅神ふ祈る、叡山の後此神を叡山の麓ふ勧請す、赤山太秦もまた此社なり、故ふ今宵寺中の神事も摩多羅神を祭る者、寺中の行者紙衣を着牛ふ乗りて上宮王院の前ふ出、祭文を読誦す、見悉く懺悔の詞なり、いふく八寺僧ならく、とつくむとつくとどもの戯謔ふ迫きと以て迎世行者をして、ことを修せしむ、法令畢りて門前ふ角力ひらく、寺説ふこの会八大念仏会と称して十日の晩開闢十三日の晩ふ至ての結願と云、下[illegible]

亟云州 [大和] 摘

[本草] 温州橘其葉蜜摘ふ似て薄く小く其実肥蜜橘ふ似て大きも亦同、漆蠟 漆樹の注

部漆の花の条にみえたり【うるしせし】漆の木の皴梢迄に悉く鋸を以て挽目を附其挽目より脂を発さしむ是則生漆汁也奥羽及び下野和州ハ多く中国にも所々あり其脂を撥取諸國皆六七月にとり九月に出せるハ違ふ也

裏枯 【御傘】草葉の外色づきたる事也うらがれとむるといふハせをも蘭野邊原庭などの文字を入るゝ植物に二句也草の名草の字ありても植物に三句也連に裏枯過て秋草の句ありとも二の字ありても去ざれと俳には今一有べし云云○青藍云木の梢の枯さるとてもうら枯とよろる者あるとの給ふし御傘の文体にて草に限れる事をとあるべし

梅紅葉 梅の木の葉の紅葉せるなり

うそ寒 秋の寒さ

ゐ

いの部に併せ出て

の

【七月】

残る蚊、残る蛍、残る蠅 【貞享式】残るといふ字ハ其季より此季に残るとぞ残るといへる道理なし中 暑壁にも残菊ハ重陽に残るとも残る蛍ハ何に残るべきや残るの字ハ総て其季の次に取りて此論と残るの字の例ともへし○青蘿云【年浪草】【俳諧歳時記】に残る蠅と云通俗志に云さうひて六月の部に出したるとも通俗志ハ蕉派の書にして蕉門の式にあらぬも故に今改て秋季とすへし

残暑 秋暑【山谷詩】西風挽不来残暑推不去○梢まて来てゐる秋のわつさかな　支考

後の藪入 春の部に注す後の字断らぬとも秋季に連ならぬ秋なるべし発句と秋季のけいらひあるぞ後の字に及ばぬ

【八月】

野口念佛 十五日 播州加古郡教信寺に於てこれと野口念仏といふ清和天皇の御宇教信といふ者あり姓氏詳ならず或ハ云南都興福寺の住僧永西坊の弟子なりしか加古の駅舎の柴草庵を結び常に西に向ひて称名念仏して性仁愛ありて旅人の荷を助け労を救ふ貞観八年八月十五日完粟の郷にあいて盗賊のためにころされぬ首ハ教信か庵ニ贈つぬ骸ハ其地に葬る毎年八月十五日僧徒多く教信寺に集りて仏事念仏して○教書の畧に云摂州勝尾寺に僧あり勝如と名く八月望の夜一僧来りて

門を敲く即迎へ入る客僧い人吾ハ播州加古の教信ハ、念仏の功力ふりて今宵極楽ふ往生ス、尊僧ハ必豊生の今宵往生を〻〻〻といひをりて去る時ふ空中音楽きこえ明年八月十五日の夜果して死せる、

後彼岸 春秋の彼岸八昼夜等分ふして長短なし、仏道ハ中道と崇ふこの時節まことふ中道の辰〻故ふ仏事を修ス、提謂経ふ浄土三昧経ふ八王子ハ善と修ス ミミえとり八王子ハ彼岸ふ在ると八王子と八立春、春分立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至是也、天神の諸神陰陽交代ス時〻この日梵天帝釈鎮臣三十二人司命司録閻魔大王八王使者、悉く出て四方を巡り見人民の善悪を校へ録ス ことゝハ故ふ善事を修ス

[善道寺六師観経釈] 念仏して西方往生の願行とふ ふ冬夏の両時と取ス、春秋の三節とス、仲春月仲秋八月両時ハ正東より日出て真西ふ没ス、弥陀仏の国真西ふの没所ふあるゆえ故ふ弥陀の在所と衆生ふ指示して往生願をむる、

後の出替 [紀事] 雲崎類要ニ云秦の人本家婢を得て一子を生ひ妻ゝと悪ゝ色て隣家ふ與ふ郷家大ふ富貴あり、本家貧し、後二月二日を以て取帰ル、后復本家富隣ニ貪し、和俗二月二日ニ家僕の交代の節とスル、元此ゝ

野分 [月令] 仲秋月旨風至ル注ニ旨風ハ疾風也 [倭名抄] 暴風漢の語抄云ハ疾知奴乃加世

野山の色 [御今] 百ゝくもるゝ秋ゝ植物ふ二句〻中暑又枯野も色の字そへバ秋あり、枯野とゞゝハ冬あり、

野菊 [ゝくゝせゝ] 野原ふ自然と生ゼる菊と云ゝ花葉とふ菊ふ似て小ゝ褐紫の花多し、稀ふ黄花ありとそ、是上古ゝ本邦ふ在る菊ゝふ毒あり食ふべからずと云ゝ今人家ふ植て翫ぶ、

鴉 和漢三才図会 按ずるふ俗ニ云野雀ゝ頭頸灰白色背の端黒く其背ふ黄赤紫の斑文あり、嘲深黒履正白脚掌蒼黒ゝ

九月

后の趾 又漢ふ〻〻〻

後廿雛 [滑稽貝雑談] 和国の女児雛遊ゝとふ古き物語ふ出ゝり、上巳の節ふ拠ゝるよし、今又九月九日ふ賞ス女児多し、源氏物語ふハ常ふ

雛のそべをとゝそなゝそまゝ八重陽ふ也てあそぶ左もなるべき
ゝ俳諸是を名づけて後の雛祭とも後とゝ上巳ふ對
して謂 **後の月** 志の部十三 夜の条注ス

野の宮ゝ別 禁の御

後 山城国葛野郡小倉山の下椿原ふいかゝへ伊勢ゝ
斎宮始此所ふ栖ふよりて伊勢太神宮を勸
請も此所嵯峨野へ故ふ野の宮と称ゝ 延喜式 九 斎
宮の親王定ゝ畢ゝて宮城の内使もゝき所と上して
初斎院ゝ 後禊 て乃ゝ 明年七月ふ五ゝ此院
ふ斎も更ふ城外の浄野と上し野の宮を造ゝ八月
吉日を卜して河ふ臨ゝて 後禊 して即ゝ野の宮ふ入
○野の宮の別ゝ斎宮羹ふ籠らせのへて二年めの九
月伊勢へ発ゝるゝ時、天子へ御暇乞ふ参内しふゝ
此時天子御手づゝ由豆の爪櫛を斎宮の御頭さゝ
ゝめふゝ上ゝ別の櫛と申ゝて是ふよりて伊勢斎
宮ふ移ゝ給ふゝ故ふ野の宮の別と申ゝ この爪櫛ハ素盞嗚尊稲姫
おゝ[illegible]ふて斎宮ふ[illegible]
みゝ[illegible]ゝ又別の御櫛由豆の爪櫛ゝ[illegible]

日本紀 才 崇神天皇六年、天照御神と豊鋤入姫の命ふ詫ゝて大和国笠

縫の邑ふ祭ゝて[illegible]

同書 六 垂仁天皇廿五年三月天照太神と豊鋤入姫命ふ離ゝて倭姫の命ふ託ゝ[illegible]

同書 七 景行天皇二十年二月五百野の皇女とつゝして天照太神とまゝりゝむ[illegible]

女と伊勢へ奉ゝて宮仕ゝせゝ[illegible]天皇即位の後親王の内
處女とえらゝ太神宮の御給仕と定めゝ[illegible]
内親王ゝきゝ[illegible]八諸王の姫君をゝ定ゝる例ゝ[illegible]
ゝも定め奉ゝ二年めの八月より翌年の九月迄野の宮ふ
[illegible]ゝ此間三度の神事三度の後ゝ[illegible]上御門院東
元二年四十一代の斎宮後鳥羽院の皇女秉子内親王の後
此事断絶ゝ[illegible]ゝ九斎宮群行ハ九月十七日ゝ其前
日桂川ふおいて後禊と修ゝ[illegible]と桂川の御祓[illegible]
桂川ハ山城國

残菊 菅家文章 黄花之過重陽世

葛野郡ふいゝ 俗謂之残菊 ○重陽以後の菊
とゝ上残菊の宴八十月 **残草** 菊の異名 藏王ふ載
五日ゝ冬の部ゝ[illegible]ゝ 按ゝ[illegible]ふ万花ふ
おゝ上残る故の名ゝ[illegible]

野山の錦 くの部草の紅葉の条ふ侍せ注ス

との部ふ併せ出そ、

七月

化生 五雜組 歳時記云七夕ふ俗蠟を以て裏瓦と作り水中ふ浮へ以て婦人子ふ宜しきの祥とすと化生とのふ王建詩云水柏銀盤弄化生是之今の人泥塑嬰児或ハ銀範を以てする者化生と云てふ者化生とふもことをうて七夕の戯あるとをもらぶ、

苦丹 苦丹を龍膽とのるハ誤 草花畢ふあり龍膽の条ふ注へ

観音艸 観音草 ふあるりの巣蘭ふ似て少く狭く短し石菖ふ似てものきあり一六七月莖を抽で小花をあらし穂とあるを淡紫其蕾ときを愛をべし然るふ大和本草ふハ観音草無花無穂といへり京師の俗中元の日此莖を以て蓮の飯を縛ふ観音草の名義ふよるなり、

常山花 和漢三才圖会根を常山と名け葉を蜀漆と名く和名久佐木處々ふあり其葉甚だ臭し高さ丈許葉梓楸の葉ふ似て圓く尖て畧皺ありて澤あらもし六月細花を開く白紅雜攢る、

常山の虫 同上 蟲ハ此木株の中ふあり蝎の木の心と蝕ふ六七月株を破て孔を取用て疳の藥ふ入る或ハ炙て小児ふ食ーむ凡蝎を取の法蟲ある木ハ株ふ必小き穴あり管を以て水を中ふ入るもべ蟲首を穴より出を輙木を剪両端を縛りてもと探り得る、

栗奴 和漢三才圖会 栗の苗ふ穂とかをを時黒き煤を生る者粳の奴麥の類の如し

鑣虫 和漢三才圖会 響虫俗字 正字詳ふ〜も安をそふ此虫莎雞のごゝ翅青く腹黄色前脚長く疾走て跳る毎ふ穴ふ出入まる故ふ獲がさし秋鳴声馬の轡の音ふ似とり因て名づく、

蛁蟟 時珍曰秋月鳴て青紫ある者螻蛄ともそ、

兼三

秋物

降り月 滑稽雜談 師説ふのふてぐり月ハ十六七夜の既望をぐる月とい〜然ハ居待月の須より廿一三夜迄の月次第ふ魄と生ぞる迄望ぐるともぐり月ともいふ〜藻塩草の傾くの義も捨べらぶ、

葛、同根と堀 真葛が原 和漢三才圖会 真葛 其葉韌薄く楮の葉ふ似て面青く背白し風至ぶハうく翻る恰も掌を反もるごし婆娑〜て声とふを故ふ哥人葛の

葉の裏見〻称し人の恨ふあるべし、大和本草根と冬月或ハ春いまだ苗と生ぜざるときほりて用ふ長きこと数尺乾し用ふ葛根是〻云、古式八月の季ことも、不審〇真葛の真ハおむる辞〻真葛ゞ原ハ京師知恩院山門の南ふありとゞ、只葛の生ずる原といふなり、

花壇

貞享式 今按ずるに花壇を花畠も決して秋ふ定むべきこと、

草の花、草の實

諸草のさぐひ春夏ふ花を開く者あまた秋多きこ故無名草草花と秋とを、實もまた然て、古今 みどりふる ひとつ草とゞ春ハ芽秋ハいろくの花おそなりける、

栗

この部蓮芋

芋

の条ふるべし、

觀音寺梨

近江國芦浦觀音寺より出ッ微赤く甚だ大ふらず、漿多く味甘〻、口中ふ消るゞとし、

九万疋

鱰一名九万疋といふ志の部鱰の条ふ注き、

八月

桑名祭

十八日、春日大明神の社勢祭る神四座別當仏眼院説ふ云經津主命ハ神護景雲元年下総香取の宮ゟ勸請ス又武甕槌命ハ正應三年八月十八日常陸國鹿島の宮より勸請〻天児屋根命姫大神ハ永正二年八月十八日伊賀の名張より勸請ふ〻毎年八月十八日を以て祭辰とふすゝ一説應永仁の月日と以ることを修ゝとい〻り、〇先十七日、社前の南北ふ車輌ツく飾夜ふ入て試乐あり翌十八日祭礼のとき、件の車を南北へ引渡し音楽を奏ゝ明和十年の春回禄以前ハ、両社六座〻北三崎の神社三坐南春日の神座三坐、ふ往古ハ春日鎮坐の日と以て祭る回禄後祭礼延引ゝ、三崎大明神ハ土地の神〻鎮座の年月詳ふらず凝洲嵩烏洲嵩泡の洲嵩合せて三嵩といふ又七月七日の神事あり、氏子貝寺川ふ於て石とゝ来て両社ふ献ずこれと石取の神事といふ此日囃遠物と出ず、〇此八月祭ゝ天武天皇の祭礼と記せる書あり、日本紀ふ天武天皇元年九月朔車駕還伊勢國桑名宿ゝ今駅中ふ神社あり、ゝ誤ゝ記せり、

苦参引

時珍曰苦ハ味と以て名く、参ハ功と以て名く、和漢三才圖会其花莖の梢ふ穂ごとふて七八月開く莖根葉ゝふ藥用ゝて故ふ根を連ねこと採る、

樂堀

秋野山ふ出て蕣草をとるく挾
苓突なと句ふこうて秋くるく〳〵し、**虞美人草** 大和

本草 名花譜云、花四瓣色艶罌粟ふ類〳〵て小、園史云、呉俗呼て虞美人草と云、是、四五月花をひらく者、花彙 美人蕉 紅蕉花 此芭蕉の一種 類說 褒斜山谷の中ふ虞美人草あり、形鷄冠のごとく、大わ〳〵花ふ〳〵葉皆相對て或八虞美人の曲を唱ふれ、兩果撫亭〳〵く頗る節伯ふ似たるが如し、○鷺水が新式ふ曰、本ありとい〳〵もの何しの草といふ色、

栗茸 和漢三才圖会 山原ふ生て高サ ふ過ぎ、纖四五分ほく卷正白色、剥さる栗の肉の

下篠 この部落鮎 の条ふ注も、

九月菜 故ふ栗茸と云、

莫の袋 この部菊酒 の条ふ注も、

栗の節供 きの部菊の節供の条ふ注も、

併せ

九日小袖 菊襲 清嚴正徹記 九月衣類菊襲面白裏紫〳〵〳〵 ○地下良戒今日出も

縹色の小袖と著し、互ふ相賀も、是を九日小袖と云、

鞍馬祭 九日 諸神記 鞍馬寺由岐の社

天慶年中勸請も、神社啓蒙 鞍の社ハ山城國愛宕郡松馬山ふわり、祭る所の神一座大己貴命 ○此社ハ天ふ水象世上鑑動の時、鞍と此神前ふ懸く、故ふ由木と号ス蓋大口貴命少彦名とも、疾病と療し、天下と治るの神ふ〳〵ましかて五條天神及當社ふ鞍とうくるの遺法ふ〳〵或說ふ祭る神素盞烏尊とも、例祭九月九日〳〵八日の夜氏子の男女供物と旅所ふ献も、當日神輿本社ふ入、

勸學子會 十五日 三月九月十五日 一年両度行る三月の条見合をべし、公事根源 勸学院っの大学の南ふ此院と立らるしく〳〵バ、南曹とと申めり、各綱大臣遠ふ〳〵〳〵〳〵〳〵おこと子孫親族の学問もふ入るふ建立ふ

呉服祭 あの部穴織 祭の条ふ併せ

胡桃 庖厨本草 其実核円く大く、色淡く皮厚く硬く、して破ふくく、仁脂多く味最も美し、

槇櫨の實 蘇頌曰槇櫨の木葉花ふ酷く木瓜ふ類ふ木瓜ふ比もれバ大わして黄色、こもとがきふふ惟蒂の間とるふ重蒂乳のごときものあり、此則槇櫨

大和本草 花ハ林檎又海棠ニ似テ紫色ニ開ク實ハ秋熟ス、**九年母** 俗ニ九年母トイフ名義未詳 大和本草 事類合璧 九月霜降ニ乃チ熟シ其色ハ橙ノ如クニシテ皮厚ク実ハ長ク二寸ニ過ク早ク実ル者ハ脆易シ、裂テ墜者久シク藏ム、**栗** 苞裂ル者腐易シ、落栗、毬栗、焼栗、稲栗、柴栗、刺栗、打栗、出茎栗、二度栗、山栗、錐栗、搗栗、各頭字ノ部ニ出ス 遅ク結ブ 枯木ニ付テ山中ノ人ヲ見テ熊館ニ入ル性ヨク木ニ上リ好テ栗ヲ食ハ故ニ縁ヲ捎ニ至テ枝ヲ折テ並ベ鋪テ居所ヲ設ク是ヲ熊館ノ類ト云フ **熊栗架ヲ搔** 特珍曰 熊石叢架ト云ハ熊館ノ類ト一種春月ニ當テ苗ヲ種ル時實熟ス大サ小栗ノ如キ者ヲ見ル苗代胡頽子ト名ク一種九月実熟ス大サ栗ノ如ク莖長クシテ下ツ垂ル種九月実熟ス小ク其大サ櫻ノ子ノ如クシテ簇リ **草牡丹** 大和本草 葉ハ牡丹ニ似ル單ノ白花ヒラク實牡丹ニ似ル宿根ヨリ生ズ又實ヲモウケテ生ズ是又牡丹芍藥ノ類ト **草の主** 菊ノ異名 塵川百首 うぐいす の匂ハヽ草の花うゑ **草の紅葉、草の色** 草木の紅葉ヲ錦ニ比シ

草の錦 野山の錦 草木の紅葉ヲ錦ニ比シ 新続題林 織ごろも錦そめ出す秋の野ふかうく咲ける 下ル 簗の破壊スル花の千種ハ 邦忠、**山朋魚簗** トイフ魚簗の形状春の部上リ魚簗の条ニ注ス、**暮の秋** 暮テ行秋トイフ秋の暮ニ混ベ用フ **九月盡** 九月の晦日トイフ

や

七月

柳散 晋史 浦柳の質秋ニ至テ先ヅ零ス **八幡安居の頭** 十二日 紀事 九安居ノ頭ハ大経當ニ故ニ三年以前ニ其頭人ヲ指点ス先前年ノ十二月朔日ヨリ翌年ノ十二月十五日ニ至テハ八幡山下ノ卿家安居ノ頭ト動ム卿家村里中ノ長トイフ其ノ土地ノ中ニテ姓氏アル者ヨリ又十二月八日今日石清水安居頭人ノ宅ニ於テ、

達所小綱の神人長吏の補任と授けることを指部らく又十二月九日頭人の宅ふ御家衆を饗應し能拍子ホウ[illegible]ことを古那志といふ是小習礼の訛なり又十二月十三日頭人夫婦移山不動堂の前ふて垢離を修をこまこと精進ふと[illegible]又十二月十三日頭人浄衣を著いて所の社ふ参り奉幣わり頭人の婦も又そとふ從人並ふ御家烏帽子浄衣を著し奉供をこその行旋甚ご古風なり茨生川ふ橋二ツあり一ハ安居橋と名く是安居當人の渡る橋ニ常ふ不浄の人を禁を頭人こと渡ヨハ今日山上相知る所の社僧の坊ふ止宿して精進潔斎をる(この間西郊桂の里ハ女子孫夜又白布を以て頭髪をつゝこ素こて桂飴を捧ぐ是と桂帽子と称を今京の童謡ふいふ桂帽子是ハ十月十九日安居頭人夫婦社参本社の前ふ大なる松一本を建く白布二疋とその上下の装ふけくこと(後ふ猿のまゝ)そこそこその松ふ登せそのゝ布の袋を伐携て頭屋ふ帰こ後代修頭の役ことして増山の井(今ハ十月十日)云々

糒米 本朝食鑑今製をとる焼米ハ青稲を以て稃糠と去り炒り過してこゝと春き扁米とかゝ、此と焼米と称を甚佳味ハ勢州荘野の市上ふて焼米と造る青麥艸と以て俵子と作ることと畏くそ四方に送る。

藜師草 弟切草と の部ふ見へ

益母草 めの部ふ見へ

炎花 微紅ハ児立里其花ととり垂少そ[illegible]垂付方と上ゆ〜そ手足或ハ頰ふ貼るふさるゞら炎のこと依て名とも(是和産)其蔓葉女青ふ似て七月連の間ふ筒炎の花をひらく五瓣ありて少しく瞿麥の形あり

やんま との部蜻蛉の条ふ出ス

兼三秋物 和漢三才面会 和名夜万都伊毛俗ニ夜万乃伊毛今云長芋其根の長さ尺ばかり周ること三寸灰黄色肉白し、煮て食ふべし

薯蕷 救荒本草 薯蕷溪の辺ふ蔓と出し時時凡水ふ感じて蟮ふ変ず半変ずる者とる人性々多ハ○此者薯蕷とハ薯蕷とハ薯蕷とハ切め唐の太宗諱と蕷とハ因て碎て薯蕷と改む又宋の英宗の諱と薯とハ因て山蕷と改む

焼皂

朗恒秘藏抄 燒きあとハ馬ゐどの尾髪をきりてたきみてその金つとゞ燒て田ゐ立るゝ其髪とりぎて鹿のくまのゝを皇と燒きあとりハ、

八月

八幡祭

放生會 八月十五日諸国放ち鳥 此とゝりとゝ

どゝ、男山の神支と以て京師の人八幡祭或ハ放生会らゝ社頭美豆の南八九町ゐあり、京と去ること四里余男山岩清水と号、或ハ雄德山鳩の峯と称ス欽明天皇三十一年冬肥後國菱形の池の辺民家の兒三才の時神託して云、我ハ是人皇十六代譽田天皇也、是ゐ降りて豐前國ゐ鎮座して八幡太神と称ス傳ハく貞觀元年秋七月八幡太神鳩の峯ゐ移る、ゝ釈の行教南都大安寺ゐ居るこれ僧姓ハ武内大臣の裔ゝ曾て貞觀の初め宇佐の神祠ゐ詣づ、一夏九旬昼ハ大乘經と誦ス、夜ハ密咒と誦ス、一夕夢中ゐ太神告て云師王城ゐ帰らゞ我も又随ひ行王城ゐ居て當ゐ皇祚と守るべしと、行教やうやく山城國山崎ゐ至るその夜太神又夢中ゐ告て云、師我居る所を見よ、覚てこれとゝるゝ、八東南男山鳩の峯ゐ光と現ス、行教これと奏して宮殿と成る、○正殿三座中ハ八幡宮應神東ハ氣長足姫尊神功西ハ比咩大神玉依姫後崇峻天皇源の姫と諸皇子ゐ賜ふ時八幡宮と氏神ゝ此社と以本朝才二の宗廟ゝ、毎年二月十日初卯の日神楽ゐ行ふ、御神楽ゐ准ぎらる、八月十五日放生会あり、養老四年九月征夷の事ゐ行ふ、大隅日向の両國逆乱をとりて宇佐の宮ゐ祈請せ、めゝ、その祢宜辛嶋勝婆豆米の神車と乘て、かの國と征し敵と討て利あり、大神誌ゝて曰、合戦の間多く殺生ゝ、宜く放生会と修ス、べしと諸国の放生会ゝ始る、○紀事今晩神と輦中ゐ迁し奉り、神幸と促ス左右の馬寮御馬二疋と幸ス、召使、官掌外記史左右兵衛の府、廿参議上卿左右兵衛府上蔟前駈ゐ紺屋殿ゐ参ゝ向ハ神輿稍の鼻と下ゝ病院頓宮ゐ至りこ行列行幸ゐ准ぎ、この式後三条院延久二年ゐ始ゝ當社の祭式甚ゝ繁多ゝ故ゐ略ス、

八束穂

豐年の稲の穂のゝ

山雀

和漢三才圖会 狀畫眉鳥 小似て頭黄白ゐ赤色と、ゐ、ゝと長さとりふ、帶ふ眼領の辺ゐ黑き條あり、背灰赤色、翅胸尾ゝと、ゐ黑く腹淡赤く性慧巧ゝく囀る好て胡桃を食ふ

紙燃の輪を作り篭中に設くる時は飛て其輪を潛る
別に箱と篭の隅に宴て宿處とす○此鳥藝とよくし
て故に鳥乙由

敗荷 汪ニ不 及ハ

九月 山口祭

中巳午日 周防国吉鋪郡仁壁の神社九月中巳午日
祭礼と行ふこれを山口祭といふ山口の古名は仁壁の庄故
に仁壁の神社と号す祭る神住吉三神と以く本社と仁
合せ祭る神二神味鉅高彦命下照姫の命各一社以上王
殿三社をづゝ仁壁の神社と号して又織機大明神とも
又稲宮とも称す衣食のことを主りるに神なりとして
此号あり祭礼のもじゝを織機の神見あり次の日神輦
神輿三座本社の西神輦の地に出し奉る流鏑馬いろ〳〵
皆国主のことを執行とらる有司ろうして国主の拜礼
あり又六月御田の祭いろ〳〵鎮守の年月詳らかに入王十
一代垂仁天皇の御宇勅帯 紀 支
と奉らるその傳記失散を、

八幡花の頭 廿日

山城国八幡山の社僧九月廿日花の頭と修を先六月
より撰ひ定めて花臺と造ることと地盤刺とらふ我

俗板と割と庁とゝゝ又刺とゝゝ是板を調て臺を製るの
義なり花の頭とは社僧の弟子髪を剃衆僧の列に加るの
とき社僧と饗をふ彩篋を以て草花を製し臺に神
前の廻廊に飾り酒宴の興を催す故に花の頭と称す、
又稲宮とも称す衣食のことを主りるに神なりとして

山路草 菊の異名

の柄のくちぬるのちも猶やおらん 前内大
臣賓

焼栗 焼くるゝ

継 栗を、山粧ふ 臥遊録 秋山明淨 破
して粧ふ如し、

芭蕉 芭蕉翁移芭蕉詞に云唯この蔭に遊

ひて風雨に破を安きと愛するのみとな

漸寒

次弟に寒きといふこと
ふて秋の末の寒さを云、

ま 七月 槙賣 ろの部

の条 六道参

小出、曼珠沙華 天和本草 金燈花 鐵色箭とも云、

花と生して葉死る花葉相衛らず此花下品〳〵其葉
石蒜に似たり一類〳〵此花を國俗曼珠沙華と云翻譯名
義に曰曼珠沙は此に柔軟又赤華といふ酉陽雜俎曰金
燈草俗人家に之を種ると悪し一名無義草と云、

花ひるるときハ葉おし、葉ひるる時ハ花ふ〜、○俳書ふ〜曼珠沙華石蒜同物ともとらるゝ。鶯信翁の説ふ従ひ石蒜ハ其の部ふ出す。

松虫 和漢三才畜会 蟋蟀の類 褐色ふして長き髮腹黄ゑ野草及び松杉の籬ふ在り夜羽と振て鳴声知呂林、古呂林といふべし、甚ゞ優美ゑ允松虫鈴虫昼ハ潜ぐとし夜燈火を照る時ハ光ゑ慕ひて来ると捕へて籠中ふ畜ふ、○今俗ふリンくと鳴と鈴虫といふ、いとろし是松虫といひ、鈴虫ゑ、チンチロリと鳴といふと思ふ。

兼三秋物 **眞夜中月** 廿三夜、子の刻ふ出て午の二刻ふ入、

十寸穂の芒 無名抄 穂の長さ一尺ばかりあるといひ彼ます〜と書るゆてこゝろ得ぐし、

真蘇宇の芒 同上真の蘇枋、といふ心ゑ、真蘇枋の芒とらふべきと、詞を畧しゝるゝ色深き芒の名あるべし、

麻芦穂の芒 同上真麻の心ゑ是俊頼朝臣の哥ふよみて侍るまさかの糸とゝりけてと侍る糸あどの乱れるゆゝ〜 堀川百首花もそゝまゝそゝの糸とゝりけてたえどと人とおもはゆるゆゝ 俊頼○まそゝの芒とハ穂の赤きといふまさかれ、まそゝうもどりつるいろれ詞の轉じるゆてかやハ赤赫の意ゆるとゝ記まそして各別種ふ注せるハ誤あるよ〜。

松尾梨 形観音寺梨ふ似て雪のゞ〜漿少くは、清水濱臣の考ひり、奥州會津の中、松尾の産ゑ今洛の人家所々ふ接得て頂妙寺杯と一双とそとしのふ、

圓梨 青梨

の種類ふて大きゝ皮薄く色青くして甘美ゑ、

八月待宵 八月十四日夜孫明俊詩云銀河無声露暗垂玉蟾初上欲四時情樽素瑟宜先賞明夜陰晴未可知○待宵とハ翌の夜の晴曇りはゝりかゞけ也ハ先今宵月を賞ゆる〜待とハ翌の夜の月と待義ゆる〜し、

三潮草 和漢三才畜会 九松

松茸 萱ハ山城の北山の産最佳ゑ、赤松の陰所秋の雨湿の為ふ釀ゞ出て生ゆ、初め落葉を戴きて見ゆゝ、漸く長ゆる者三三寸頭四く柄あり、鼓の槌の如〜、其大さる者尺ふ近し、日と經て傘と発く外の色黄白紫と帯内白く

細く深く刻みあり其柄太き者柔ふし 舞蕈 同上 湿處或て味良し八九月の交盛ふ生ず、

ハ朽木ふ生ず、緻柄ありて一株片々と叢生ず、 間引菜

炎炎茸の如くして上黒く元白く味脆く甘し、

貝割菜 摘菜 和漢三才圖会 九蕪菁蘿蔔の類、大抵

小菜 八月種と下し彼岸中小苗と生ず其繁茂

と抜て煮食ふ摘菜間引菜是こ云き又白苗と生じ地と出

ると一二寸漸く茁て二葉ありと蔬と手ふ是と貝割菜と号

猿子鳥

和漢三才圖会 正字未詳状大き雀のごとし

全体灰黒胸腹淡赤し羽灰黒色ありく

黒き彪あり尾の下両端ふ白者二つ其喙短くして赤黒

く脚黒く頂灰黒頭より胸ふ至て淡赤ありて白き圏ふ

至千葉菊花の紋の如し、 豆鳥 豆甘美 いの部 桑鳥 豆廻 の条ごとくべし、

猿鳥と照すこと太はこれり、

九月

豆名月

八月十五日の月と芋名月といふふ

対して十三夜の月と豆名月とふ、

外市

すの部 住吉相撲会の条ふ出ず

鞠花

菊の異名こ 藏王ふ云

菊の字本鞠ふ作る鞠ふ従ふ鞠ハ

音キク訓ヒリ又鞠の如き形とふ也、 榲桲 藏器曰樹林

白緑色ありくせと此種蕃邦より渡て此訓ハ則蠻語 檎の如く花

ふり今京師ふ多し梨子の如く凡味も又梨子ふ似て

少しくろしくせいことのハ菓子ハ、 豆引 和漢三才圖会 赤 俗作 角 穀

ることふ砂糖と和して製しくるく、

と莢といふ葉と藿といふ莖と其とのハ本綱ふ菽ありて 穀

の總名皆赤とのハ大豆ふ黒白黄褐青斑の数色あり、

大抵夏至十日以前種を下し、

七月花をひらき九月莢と結ぶ、 正木の蔓 真潤翁云まさき

れづらハ也常盤ありかづらとまてらふべしまろれば

いとつよく神社ふよりて用ひられしいさまくあるべき

中ふ樫くく鬘とせりハ一種有り古今集ふ深山まそ

ちられかくれ外山ありゆきさのうくいろづく やくり、

とうみしハまこて常磐ありる草木も冬のもとのみと去

年の古葉色づき落るれ共ありる山の岩木ゆこふゆ

ととうづくれ葉ハ南天燭ふ似て黒きあるゆ冬のもとし

めふえもいとまもとつるのり是ぞ山行時もとら目ず

つきこしゆまこバ右のごくいまみつゝん云〇真洲翁の說ふよるとき八定家蔓ふ似さり俳諧ふ秋季と定めさるハ古音ふ色づくことゝまさきくかつらのこゝろなり、冬青の實 和漢三才圖会 冬青日其葉冬もまさこ正青く光澤あり四長中て尖らゞ鋸齒ある鋸齒あり夏小白花とひらき秋実と結ぶ生青く熟ぶれバ紅ゐおのつゝし裂て中ふ白子あり、ゆてハ志ひ 枝さゝくて活易し藩籬ふ用ふる瑞ふ

天和本草 櫧の一種〳〵葉ハ櫧ふ似て厚く大く色深青面ふ光沢あり屋材〳〵器と作り舟の櫓ともし其用櫧と同じ一類別種〳〵実ハ櫧あり大し鱚 檀 和漢三才圖会 其実楝とも民用と助〳〵〇実を以て秋こも、の子れ知くふ〳〵て〳〵蕨りあ生青く熟ぶれバ淡赤し裂て内紅子三ツ四ツ粒あり其葉秋ふ至て紅あり

松の實 もの部松子の条ふ注も

七月 今朝秋

立秋と

牽牛 もの部二星の条ふ出、 夏解、夏書納

夏ハ四月十六日八七月十六日解是と夏解とつハ一夏九旬の間他の化益の為ふ聖經及び名号題目と書寫し夏終るの後是と堂塔伽藍ふ納め三衆万霊ふ供ふ、夏解草 回向を是と夏書納とつハ在家も亦此ふ效ふ、

釈氏要覽 僧尼解夏の日緑を以て節と束ねて檀越ふ遺ふ、是と夏解草とつハ今この草と詳ふもるふ已ふ五分法身の座ともし故ふ吉祥草と名づく、 漳州府志 四時一色泉石の中ふ生ぜ、山村の人瓶ふ挿こ先と祀ふ陰字ふ出ふ花開く故ふ吉祥草と名づく、 字彙 節ハ伊及反音印、草の名〳〵、 大和本草 夏解草ハ麥門冬の大ものゝ、 兼三秋物 玄兎月の異名〳〵〇謝莊月賦云引玄兎帝臺〇つの部月の泉の条うまもしるゞし、 月宮殿 つの部月の都の条ふ出、 雞頭花 時珍曰雞冠花の形を以て名ふ命ぜ春苗と生し夏ハ高き者五六尺短き者纔ふ數寸、 畧 六七月梢の間ふ花とひら〳〵紅白黄の三色あり、中畧花最久ふ耐さ、霜の

後始てけいも【鎮江府志】莖も蔓も花も實も山薬
焦る、黄獨ふ類き、葉大ふして且円く根ハ茎ふ孔那
くうて鬚あり、味微苦し○枳椇 正字白石李蓋
俗ふ何首烏玉といふ者是之 枳椇ハ実の名のミ、
その実大さ大豆の如し、之を喰へハ少しく梨の味あり、
小兒疱瘡鼻穴閉るもの、之を以て其鼻穴を穿つ、

八月 けふの月 つの部月見の条ふ見べし、

毛見【紀事】土民年の貢を納る九秋来収納そ行の法晩秋ふ縣吏先て田地の立毛の善悪を巡検まて是を毛見といふ草ふとを毛といふ故ふ稲未刈獲さる亦立毛といふ、

罌粟子蒔【月令廣義】八月十五夜罌粟子を種るバ花盛ふして繁し、

ふ

七月 舟形の火 せの部施火焼の条ふ出ッ

古枝草 秋の異名之【藏玉】宮城野や露も色ある古枝草こしの秋も花ハさきろり 西行

藤袴【和漢三才圖会】高さ二三尺葉女郎花の葉ま似て切叉あし、六七月細き白花を開く、女今云藤袴是之【倭名抄】蘭和名本草云布知波加萬新撰万葉集別用藤袴二字【大和本草】真蘭和名藤袴又アラヽギといふ、古哥ふらふとよめり、八雲御抄ふも蘭一ふぢばかまといふと書あり葉ハ麻ふ似て莿岐あり、香よし、乾て弥香し、是真ノ蘭之野ふあり秋紫白の小花をひらく、翁葉ハゆでさて食をべし、其芳香美味凡菜ふそ宜さし詩經楚詞ふどら詠ぜし蘭是之【和訓栞】花の色をもて藤と称し其瓣の筩をなせるをもて袴と称せり、○袴ふまをそらへむと哥俳諧とも同し【古今】何人ろきてぬぎろけし藤袴くる秋ごとふ野べをふりをす【曠野】藤袴られ窮窟ふあそうらし苫菴

筆津虫、蟋蟀の異名之【異名分類】古き筆の作てみるとそり「ふでつむし」秋も今ハと浅茅生ふちこおりなる声よろきれりく

兼三秋物

臥待月【八雲御抄】子待臥待廿日月之【桂明抄】永徳の頃、為重卿廿日月とらふ題ふて哥ぞふまことそらの月の臥待も猶宵の間ハまそきて出る吉臥待日ト雲ふ廿日月と遊さまとゆへども望月ふよりて廿日月ふ詠ハ宗審ふへゆへども月の百首なごふハ十九日の月之○一説ふ臥待

月八十九夜の月〻なり、更まち月 藻塩草 世日の月なり、筆拇又寐待月ともいふ、

形小さく蒲萄拇 俗称本朝食鑑俗蒲萄拇と称て長し、

いとを用 蒲萄の部々顔の実の条に注せ、

とゞまれ、

八月

木芙蓉 水に出る者二色と草芙蓉とあり、荷の花是也陸に出る者こゝにいふ時珍曰此花艷〻荷の花の如し故芙蓉木芙蓉といふ、

木蓮の名あり八九月始めて開く故拒霜と名く中略冬凋み夏茂りて秋の半始て花を著く花牡丹に類し紅白黄千葉の者あり最も

蒲萄 時珍曰春月萌芽を生じ葉頗る

寒に耐て落ざる実と結ぶ蔓延繁茂

る括樓の葉に似て五の夫りあり鬚を生じ蔓延繁茂

丈と引三月小花を開き穂をなし黄白色実連り着く

を星のごとし七八月熟すれば紫白の二色有、蒲萄酒 時珍曰蒲萄酒を造

バ陶然として醉へり故に醉郷と謂べしとなり酣飲をいふ

袋洗 山海名産図会 伊丹ゆて新酒成就の後渚名川の流に

袋を濯ぐとのゝしると待て近郷の賤民この洗滓を乞ふ其味

薄き醴の如し是又他に異あり 賤の女や袋洗ひの水の汁

鬼貫〇青蓋云鬼貫の先吟も

ちたれば秋季にて子細あるべし、

と古里にて二季鳥 雉の異名 藏玉

ふさこに行くるゝ 蜜多

九月

不堪田奏 江次第

堪佃田の申文 九月七日或は五日 公事根源 是は諸国の田の損亡する

所々の目録にして奉るを見るに租税と三分二を免し

ふとあり之を名づく諸国より坪付帳を奉れば大臣陣に

てしらべ申て諸国に施行あり、作ること堪ざる田を

ろして不堪田と申なり、

二夜の月 夜の条を参、

鳴滝祭の佛手柑 和漢三才図会 其樹柚に似て刺あり

条を見べし、全く柚柑の葉に似て稍大き

青色筋理顕然として畧多羅の葉に似て尖

らず 大和本草 緑豆一年の内に二度実る故に

大和本草 昔本邦にまれなりし近世来る、

八重生といふ〇苅敷るを引といふ、

佛甲草 大和本草

京都及び諸州ふ一夏草といふの是）又根ふり草と云、根鬚多く小葉ハ細長くして光あり莖と折て上ふ挾のむじ能生ス滑稽雑談或説ふこの葉の形指の爪ふ似たり故ふ仏甲草とも仏指甲の名あり此草の葉生ひ出て石地ふある形蓮花の如く故ふ岩蓮花とも鷲信ハ非ス）冬と

ともて○岩蓮花ふわとせバ佛甲草ハ雑物志

冬と待

注不及

冬と隣

七月

小町踊

たの部七

夕踊の条

下ふ出、

御霊七御出

十八日御昊の社ハ上ハ京都の北西ふあり下ハ京極大炊御門の北ふあり雍州府志此社始ハ近衛通新町ふあり上御霊ハ京極の西出雲寺の北ふあり上下御昊の社毎年七月十八日御出八月十八日祭礼あり神輿二基ス御昊八所ハ崇道天王伊与親王吉備の聖昊藤原夫人廣嗣藤原夫人橘逸勢文屋宮田丸火雷神ス世ふ火雷神と謂て菅家の昊ともする者ハ誤ス傳云御霊八所の内四所ハ桓武天皇の御時ふ勅請を下の四所ハ仁明天皇の御宇ふ勅請をと○上出雲寺と上御昊の神宮寺と下出雲寺と下の御霊の神宮寺ハ共ふ僧教大師の草創ス今西寺ハ絶ス寛文年中慈眼大師の遺誡ふよりて久遠寿院の准后山城国宇治郡山科の郷ふ於て出雲寺と再興ス中の比毘沙門天を安置ス御昊の社あり是古と存ずるの遺意ふ上御昊の御旅所ハ京極通り中御昊ふあり下御昊の御旅所ハ年ごとの九月定めぞ年神事頭屋の家内ふ安置て御旅所ふ在ること間ごとして御旅と称す

おやこうこと使

すの部相撲の条ふいへ、

小鷹鳥狩

滑稽雑談 初鳥狩小鷹狩少ことなりめかりこいどとも

「夕葉新点ふ」ハ差別ふ小鷹と秋ふ成ル鷂雲雀その外秋の小鳥狩ふ大鷹ハ冬ことして鶴雁鴨の類と狩ハ「ヨくうせヨ」九て鷹ハ冬ふて小鷹の分ハ秋ことこの種類多し刺羽といハ小隼ハ朝鮮より来る雀鷂雀鷃つとの雄ハ兄鷂鷂ハ雌ハ鶻ハ巣ふ入ル秋巣より取ハ小ハ九て鷹ハたゞの捻名ふ別て大ハ鷂ハ小たゞの捻名ふ紅梅草

浮草

仙翁花ハせの部

[ひくうせと] 栗ハ葵の形ニ似て滑あるところ那岐ニ似タ
夏の末より秋碧花とひらく花こまぎと云ヒ水草ナリ
是と水葵とおなじくらる輩多し水葵ハ蓄ヘ 寵馬
花黄あり○腥し小ふぎの上の艶の腸芭蕉 寵馬
酉陽雜俎 寵馬 狀促織の如し俗ふいハ寵ニ馬あれハ食ニ
足の兆 [大和本草] 蟋蟀ニ似て ひけ足おつくせい高く頭尾
さがりてきるどと寵のあるうニ穴居まて筑紫の方言ニ 兼
井戸○海士ノ家ハ小鍛ニあるいくくれ 芭蕉

三秋物

心の月

[萩の枝折] 心の月 清き心とらふ

氷の輪

月と見立

て云 [東坡詩] 氷輪横海闊

水の鏡

月とらふ

牛蒡引

注よか

胡盧柳

名豆柳即乾柳 形鳥の卵の如し摂津丹

樹練柳

波ニ多し所謂鶏の子柳 欲京師 御所柳 大和の御所村

紅瓶子梨

瓶子の形ニて赤く其肉白 空閑

梨ノ 肥前の産微赤色極めて大ク其味甘利梨ニ小瀑江鮒 [和漢三才圖会] 鮒ハ
者と江鮒と名く或ハ名古屋或ハ伊勢鯉或ハ口多又伊勢洲
走小瀑江鮒と云ハ畧八九月稍長ク大さ六七寸海の
交ハり此時泥味多く脂多くして愈甘美色
黑と成して瀑し洗ふ如し故ニ小瀑江鮒と云ハ

八月

小望月

月どころ

今宵の月

さつの部月見の条ニ云ふ

駒

李駒迎

望月の駒 [江次第] 本八月十九日ニ云ふ 雀院御西忌ニ依て十六日ニ改
め用ル云ハ頭書云信濃勅旨の牧十五ヶ所恒例式ニ載る
所の一ハ天皇南殿ニ出御あ〜て御馬とかゝ取つむ出御
ちゝきと記ハ建礼門の前の大庭ニ於て云ふと擧分〜ひ 裏
書ニ云上野九牧、廷喜式ニ廿八日下ハ七日甲斐の勅旨の牧
十七日甲斐穂坂の牧、廿三日信濃望月の牧廿五日武蔵勅旨
の牧又十九日信濃勅旨の牧ハ八日上野九牧ハ十八日廷
喜式ニ云ふ此ハ東平官府十三日武蔵秩父の牧廿
八日同小野の牧の御馬こまと貢ハ [公事根源] 公卿以下次第

ふ御馬と給る馬の差縄どりて御前ふきくに持て、衣裳
しう馬と云分の使として次将と以て院東宮やこいの
ゐこ所々へまゐらせるハ新菓秋の田の穂坂の駒と引入れて
とゝ国主々世のうへも有り御村上御製金菓東路とは
るゝふ古るゝ月の勇ふこゝろひやゝかハ坂の関仲忠拾遺
相坂の関の山ちゝ路あゝ中さゝのゝゝるきりゝゝの駒遠

裳裾 一のとの衣
やゝ駒ゝ

御霊祭 十八日

八所の御霊祭ハ所神の名七月の部御夷の御出といふ条に注せ

見合 紀事 七後ふ神輿二基中の御夷の離宮と出て幸
べし の鉾八不凡鉾と床上ふ建て捧三本四人と以て日と苛ふ
と幸の鉾ふ八神宝の内持ことと尊敬と又勢力の人
鉾を帯の間ふ両手をいとゝと捧げ行ことを祭鉾とふ
又一人ふ手の先ふ道祖神の假面とうけて御輿ふ先ふつ此
仮面の鼻長大俗ふまと言の鼻とふ八別當及び氏子供奉
御所内ふ神のゝと今出川下鳥丸と鑪て長者町ゝり室町
と過り本社ふ入上御夷の社ふ京極通筋道橋の乾二町余ふ
あり下御夷の神輿も同時ふ拝殿と立ッ鉾五本別當氏子
供奉上御夷の行列の如し神幸の路次京極と出堪才町

の西より東洞院の西と歴て出水ふ行室町と下り二条を
過り油の小路の下立売と上り東へ行京極より本社ふ入
下御夷の社八京極通大炊御門東 定考 十一日 名目抄 定考
北の方ふあり例祭八月十八日ふあり
ふ讀例ゝ 公事根源 是八むゝ六位以下の加階とそゝ八
かの藝能行跡格勤とそらゝて栄爵と給ひるゝ上卿
官の東の廳ふつきて事と行八次ふ朝所ふついて三献
の儀式あり次ふ安穏の座ふつゝ又三献あり捕頭の花
と上卿以下の冠ふさゝて大臣八白菊納言八黄菊参議
八龍脳其外八皆時の花とさゝて造花ふわらゝ大ゝと
二月の列見ふ同じ式兵の両省より諸司の輩の旨と選
成さゝと列見と云八そゝと書あつめて奏ゝて擬階の
奏と云ふ此人々を擇出し
て定やらゝを定考と云ふ

衣うつ 条下ふ出

和漢三才図会 山野處々ふあり高さ三尺茎
剛草 枝花果並ふ萩ふ似て小く七月花と開き莢
とふゝ小豆の莢のごとし中の実黒く其根甚ゝ強し故
ふ蠅人牛馬と繋ぐべし俗呼て駒繋とも云〇陶弘景曰

狼茅其根獸の齒牙のごとく故ふ諸名あり

革草

麓ふ木の葉と戴生ず狀松茸ふ似て纖の外黑く粒々の皺あり晒し乾せバ正黑ふ〜て染革のごとし裏黃赤ふて毛糸の如きものあり、柄ふ鱗甲あ〜て味微苦し、

五十雀 其字本詳 **小雀** 和漢三才

の条ニ注ス、

畜全 俗ふ云古加良狀山雀ふ似て小〜故ふ俗呼て小雀とい〜山林ふ多し頭黑く頰白くして四ツ紋の如し背腹白く翅尾黑し其声滑ふて多く囀ふ捷輕ふして上下ふえ〜ず〜し、

九月 三月

同し其条

御灯

御香宮祭 九日 神社啓蒙 山城国伏見京町の東ふ

あり祭神一座狹神功皇后、○吉老云鎮座年紀分明ふらず昔ふ年號此地ふ移し奉るとい〜ども神の祟ありし秀吉城ニ築くの日東の丘ふ移し奉るとい〜今の社地ニ○一書ニ云この地紀伊郡ふ屬を例祭九月九日ニ朝日と御出とい〜ふ十日神事能あり、はじめ祭る所の神九座ニ神輿も又九基あり、土人本居神と

を今ハ神輿一基造り山二基遂物ふを出て○當社ハ延喜式ふ載る所の御諸の神社是ふあり鎮平年月未考、一書ふ貞觀二年勸請のよ〜記せり、

後日の祭 紀事 九月十日或ハ十日禁裏ふ殘菊の宴ある、

御難の餅 十日 文永八年九月十二日蓮上人相州鎌倉龍の口ふ於て尼難あり、白又の下僅ふ一命を全うを今日宗門の徒餐と作て像前ふ供ふを御難の餅とい〜、

小倉祭 十五日 豊前国到津の社ハ企救郡今村の庄到津村ふあり祭る神中ハ應神天皇左ハ神功皇后右ハ玉依姫ニ直創年月詳ふ〜ず後鳥羽院文治四年宇佐八幡ニこの地ふ勸請しその神秩を分て四時の祭祀を備ふ尔してより宇佐太祝の子族世々祝史とあるその後清末駿河守とい〜人到津の城ふ居して常ふ奉祝を天正の季九國亂まて神社灰燼とちり人祝史の家族ニ四方ふ流離して到る所をさらばこ〜ふ於て里民一宇の祠ニ立て僅ふ古跡を存ス慶長年中細川侯宇佐の社を造営し又到津の社をとり宝暦庚辰の年小笠原侯更ふ祠壇調殿を立て祭事のこ益旧

きふ加ふ九月十四日晡後神輿仮殿ふ遷ゞ流鏑馬あり夜ふ入禊を修し舞楽を奏し神湯の祝あり當日十五日國主家臣をゝて幣を奉らゝめ又流鏑馬あり晡後本社ふ還御一説ふ小倉祭或ハ巨掠ふ作る山城國宇治の辺隣ゝ例祭九月十五日といつりゝ也ゝ也ゝも増山の井その外の書ゝ豊前の小倉と記をゝ多し、

木幡祭

[薩州府志]祭る所甚日神社山城国宇治郡木幡ふあり[薩州府志]祭る所の神正哉吉勝速日天忍骨尊ゝ是地神ゝ二の神ふゝ也又ハ素盞烏尊ゝ後ふ天照大神取て御子とゝ八この神下土ふ降てゝゝ故ふ山陵ゝ也ゝてその天と祭て木幡の神社と号て○例祭九月廿四日今九日神輿二基内一基田中明神ゝ田中の社ハ同所地主の神ゝ祭る神詳ならず或説ふ柳大明神是木幡の神ゝ

金菊

[藻塩草]名ふ菊の異名ゝ[藻塩草]名ふ中ゝ東のはゝのゝ草ゝ花濃黄ゝて花ゝ時ふ[珍]曰春苗を生ず五月ふ至てゝゝと移て長一二尺宿根より自苗生ず根の大さ芋魁のゝ○蘇頌日莖斑ゝ花

蒟蒻の花

中ゝゝ故ふ名ゝ

[寶歳]後ふ[本草]の増山の井と[しふ]が時雨の如く一条ふ記ゝ

業ゝ

木の實

菓物秋多し故ふ名とゝ木の實とゝ秋ゝ

柑子

[和漢三才圖会]

按ずるふ柑子ハ柑類の總名ゝ

衣打袖の霜

[増山の井]ゝ曰[枝葉]九月の部ふ衣打袖の霜と別条の如く認め出ゝ青盛按ずるふ衣打きぬゝとのさぐひいそぐて八月の部ふ出せゝ再ゝ九月の部ふ衣打とのゝ出せゝ理ゝ全ゝ衣打者の袖ふ白く霜とゝ時九月の季ゝ出せゝ別条ゝ如く書ゝ八書写の誤ゝ

竿環

[元禄]十年[枝葉集]元禄六年ふ衣打袖の霜と一条ふ認めゝ證ゝ足ゝ深も考ゝ

獨梵亘古

[獨梵亘古]別条のゝ認め又[糸衣]ゝ衣打とつふ文字さゝ首きて出せゝ誤ゝ

濱の真砂

[濱の真砂]擣衣の条云露霜と神ふ重て打ともあり云

七月

閻魔奈

[雲覧]閻羅王此ふ遠とゝふ謂ゝ遠ゝて悪と造ゝ也

[倶舎論]閻羅王ハ地獄の主鬼官の總司ゝ[飜譯名義集]殘魔王或ハ殘命王ゝふ此ふ静息と飜ゝ造悪の者ふ善業と静息ゝ以ふ故ふ或ハ遠とゝふ○七月十六日と大

齋日とゆひて善事を修し奴僕をも暇とらせて閻魔堂へ詣でさするなり

紫葛【和漢三才圖会】紫葛の葉蒲萄に似て実を結むも又一種野蒲萄あり

槐の花 王安石譯ニ云槐黄中に其美を懐く故に三公こゝに位す○藝頭曰槐木極めて大なる者あり人接ぎ得ふ爾雅ニ云槐數種あり葉大ふして黒きを櫰槐と名づく晝合し夜開くものを守宮槐と名づく葉細ふして青緑なるものゝれを槐といふ四月五月黄花をひらく六月七月実を結【和漢三才圖会】其花未開時米粒の如し其実熟らく連珠のごとく中に黒子あり○槐の花本草に四五月開花とあり然に増山の井毛吹草等秋とせるにあつてむづかしく妥に出も

狼尾草 時珍曰狼尾其穂の象形に秀でるもの嶷然としそ田にあり故に守田翁の称ありて莖葉穂粒ともに粟の如し

燕尾香【開宝本草】蘭草の葉馬蘭に似くるり故に蘭草と名く色紫黒毛あり其葉岐あり俗に燕尾香と呼ぶ

【兼三秋物】犬子草 時珍曰穂の象狗尾故に俗狗尾と名く原野垣牆に多く生ず苗葉粟に似て穂も又粟に似くり色黄白にして実なし【和漢三才圖会】小児これを用て蛙を釣て戯る ころくさとも

草おのれと種のあるものをそのまゝふるとへ雑ぞらい俗云阿波国鳴門例ならず鳴動して止まで和泉式部此哥を詠じて止むと云

圓座柿 形大にして肥田く附の處肉起て臍となすものゝ所謂著蓋柿歟

青芋 藤恭白子多し細長くして毒多し

【八月】

繪行器 【綵雀】八朔【紀事】京俗八月朔日より家々の乳母その保養所の女子に行器一双を贈る其行器の中に生附せり藤の花と盛藤の花八白糸餅に赤小豆を点しらさし此餅の形藤の花に似くり故に白糸と称又深東と名く稻荷豆を称してあるひとつハ物に点すとつくとのハ白糸に赤小豆を点そるを是あろうきの義をとりて深東と名くとらへ今日童の戯に松笠を以て雉子を作り或ハ烏賊の甲を以て鷺鳥を作り或ハ糸繁を以て金灯籠艸の実を括て瓢の形となし又挑仁を刻りて松虫を製す是亦の

類こもと玩び或ハ互ふ相贈るこれと類合といふ○鵝
毛雉子鷄の類と同じ又意故仁と故ゑ折て行器と
とふ相贈る京師の俗
これ今日嘉祝の物とす

こゑ草 名ちり、龍膽の和 **榎**

蕈 和漢三才商会 榎の根上ふ叢生す纖一二寸黛色裏白し細き刻あり微香あり味美ちり

九月

榎の實 大和本草 榎木草ふ揪の類ふあ実ハ胡椒の
今按ずるふ揪の類ふあ実ハ榎を
葉桑ふ似て筋多し冬落葉す実ハ胡椒の
大さ秋熟す黄ゑ味甘し小児好で食ふ

月兼三秋物 **天井守** この部番椒の **照**
条下ふ出さ人

月次 拾遺 水の面ふてる月なしとそ宜ハ今宵ど
秋の最中ちりける 源順○てる月と月次ふ
けてよ

八月 **天中節** 八朔 拾芥抄 八月朔日の日
うるゑ の出より以前天中節
ホロ白舌隨節減と書て門戸ふ押 陰陽秘法 むゑ大
国の后天中樓ふおゐて事あり其人素懐と遂ぐるふちり人

忽ち火神とちりて天中樓と焼く時ふ后咒して曰八月乃至
隨節減ゑく傳へふ凶惡の日ゑ陰陽家天中の札とゑて良
賤の門戸ふ貼を

天狗茸 大毒あり故ふ
人ちよりも

てらつゝきこ 木啄 鳥ゑ

きの部

天王寺一乗會 十四日 摂州大坂四天王寺
一乗会九月十四日
或ハ十五日六時堂ふおゐてゑ
創ゑ且本尊薬師如来日光月光の三尊大師手造ちり
とちり寺説云九月十五日未刻衆僧三綱堂の司楽人
沙汰人堂仕公人出仕を先ッ時刻と三綱及ひ一和尚ふ告て
出仕の鐘一番二番と撞諸役人太子堂へ出仕を太子の
像と鳳輦ふうつすその式二月十五日の如し廻廊の下より
六時堂へ渡御あり法事の次第矛振鉾阿弥陀經傳供万
歳楽延喜楽陵王納曽利悉く終ちて酉の刻還御

天滿流鏑馬 廿五日 摂州西成郡天満ふあり祭る所
の神北野ふ同じ九月十五日流鏑
馬あり社家ちと動ゑ鳥居の辺より
天満橋ふいちりて馬と馳て的と射る

出落栗 紀夏 土俗

誤まりて古へ不孝の子あり、此栗と以又ふ投てこれを傷る、因てていこう栗とらふ和俗又と称してていこうふ○一説此栗自ら毬と脱して地ふたろ、故ふ出落栗とふ

あ

七月 秋の初風

秋の初めつかたこのこころふうむべし、秋さらと し支ゑ、秋さらと姫、朝顔、姫 棚機七姫の内ゑ 異名分類 秋去衣 八雲御抄 秋去衣とハ等うと注釈見えぞ、

棚機の布ゑ 御傘 棚機の具ゑ 云云 万葉拾穂抄 天の川只秋の衣名ゑ秋さうハ秋の末るとふとおう、

銀河 銀漢 雲漢 字彙 天河、箕斗二星の間ふあり、其星河 河漢 長きこと天ふ竟も、 楊泉物理論 漢水の精ゑ氣発して飛り精華上ふ浮ふ究転して飛流る名けく天河とふふ雲漢と云衆星てふ出ッ、

鳥井の鞠

梶の鞠 紀事 棚機ふ飛鳥井家並ふ難波家蹴鞠の会恒例ゑ上加茂松露拂 並ニ枝鞠上足ふの義あり、堂上及び地下の門人多く集る、 滑稽雑談 椿の鞠の事を毎年七日飛鳥井家

ゑて行くく式ゑ鞠の露拂ふ當家門弟の上足の者、坪の内へ持参る是二星（牛向る心ゑ）、荒鷹 鷹の雛已ふ巣と離も自ら養ふ時、羅と以て捕ふ是を網掛といふ又あい鷹といふ新ふ捕てく人ふ馴ざると荒鷹とい

愛宕火

廿四日 紀事 伊丹池田の愛宕火七月廿三日ふ、より廿四日至る云々 摂陽群談 摂津豊島郡池田村ふあり愛宕山ハ古言のふ所謂五月山ありゑ山上ふ愛宕権現の社あり毎年七月廿四日の夜種との灯竈ふ火を点して愛宕火と名く、大坂北の町ゑ所ゑ望ゑ見れば星の如し又愛宕の神社有馬郡道場河原新町口ふあり祭る所火産霊尊毎年七月廿四日祭礼あり、世俗ゑ愛宕火と称も、

扇置

太平新録詩 人皆棄 秋扇

朝茶の湯

貞享式 風炉を夏ゑ冬ゑ炉ふ炉ふ冬ゑ水地の炉縁と春とふ、ぜれハ朝茶の湯ハ朝顔の例と假て秋の用とふ、茶人の家ふ喜ぶ、○朝茶の湯ハ日中の暑ゑ、故ふ

青藥

との部弟切草の条ゑるべし

牽牛花

和訓栞 朝顔の異ゑ、朝ごふ花さく

もて名く、あらくぎ 蘭をつふしぶの部 藤袴の条ふ注も、ありのひ兒 拾遺こいふしき あとづうん ひの部 蠟簟 の条ふ注も、青蠟簟草 栗穗 和漢

三才畫会 種類凡て數十青赤黄白黑の色あり早中晩あり皇栗粢實、晩栗ハ皮厚く米少し○秋狼尾草 栗奴各頭字の部 ふるのちて注も、秋津虫 とう部ふべし、秋の蝶、秋の蚊、秋の蛍、秋の蠅、秋の蟬

注釈ふ及むもど中ゑを秋の蟬ハ七月ふ鳴ふ初めんり、秋のてふハおとろくるさ負ふ

兼三秋物

朝月夜、朝の月 黑双紙 朝の月ハ十七日ゑそあり、暁月 ゆう二十八日ゑそあり、

夜 源氏初音巻 影をき まちきたのうきつくよ、有明 八雲御抄 十五日後の由医房往生傳ゑ あり云々 青藍云空ふ有て 清光と賞ゑるこころ とふゑて句作ゑべし、秋月 明るといふる義ゑりとそ、

○ふる人の墨寮の 上ゆくゝと下ゆ雲 種下秋の月 貞徳 秋天 や秋の天 凡兆 秋風 湯殿物理

論 秋氣動、其風清 秋野 続虚栗 秋の野やこゝる小鳥ゆく鳥叢、秋水 荘子 秋水時ふ至て百川、河ふ灌ぐ涇流之大両ふ渚渚涯の間牛馬を辨ぞ 炭俵 熊ふ谷の堤きれる秋の水 岱水 秋聲 欧陽永叔ゑ秋声の賦あり畧之 続猿蓑

松ゑ葉や細きゑも少ま秋の声 風国 秋の七草 芭蕉 秋野ふ咲有花乎 指折可伎數者七種花 萩之花乎花葛花瞿麦之花姫部志又藤袴朝貌之花○是を秋の七種こ称を撫子の 撫子ハ連歌一押出 ゝてハ夏ゑ、然ま共も此かのゝく久しゝく盛ゑ久しゝ 源氏葵巻

も有ゑのゆゑふ霜ゑど結ハ冬ゑあるし

草枯の籬ふ霜ゑるちゑ〜こをゑ秋のゑ

○霜の後撫子咲る 秋の山 四機活法秋色詩 秋山知重更分明、秋夜 物哀ある余情ふ作るべし○秋の夜を行くゝるくゝ芭蕉 ありあけみ

相模集 さうまをぎてうちくる梨とをちかをこ人のをふ
やるとて　あきうしつゆぐりうゑる梨あれど十代ありめ
と人いふまうの梨ことのまうどし

八月 安濃津祭 十三日

社說曰伊勢國安濃郡津城の南ふ八幡宮鎮座、往古の二神殿中ふ寄坐も相傳へ建武中足利高氏卿、西毎ふ八幡一社と置んと欲し、伊勢を以て始とも、乃チ宮殿を千歳山の上ふ造り、石清水の神を勸請し、源家の興隆を祈る、旧記ふいふ永正年中當国兵乱ふよりて神殿荒廢、僧願海募りて国中を化して再興を、時ふ享祿二年、又數十年の後頽廢して僅ふ存る、寛永壬申年城主田獵して、ふ至つて、祠を林樹の間ふ見る、左右何れの神ぞと問ふ者ふ、村老をめして、ことと問ふ、答ふ、足利將軍の建る所なり、即心願を発して土木をあらめ、正殿拜殿神庫鳥居を造る、寛永十年初めて祭儀を行ふ、同廿一年垂水藤浮の二村三百石の地をつけて昌泉院を以て別當とも、今寒松院とふいふ、八山上よりて千歳山八幡宮と称せり、今の地ふ遷してより、安濃津の城を守を以て安濃津八幡宮と号す、乃チ

一志郡垂水村ふ屬す、藍津の城の街坊、東宮と八竈藝安濃一志の三郡ふ跨りて、秋の宮 春宮とのひ后宮と

秋の宮 きの部砧の条ふ出、

綾巻 藍の花 蓼夢ふ似て七八月冷

紅花と、

蘆の花 說文曰其花凡ふ遇て吹揚れ雪ある ひらく、

茜 時珍曰此草東方ふ在て少し、西方の多ふもつて、則のどと、地ふ聚まる、

堀 西草と以て茜とも、十二月苗と生て、蔓延ること數尺方莖あ、て中空し、筋あり、外ふ細き刺あり、數節、節毎ふ五葉、面青し、背緑り、七八月花とひらき、実と結ふ、和漢三才圖会茜ハ赤根、以絳を染べし、近世蘇方木と以て茜う代ふ、

通草 蕪頌曰通草の実長さ三四寸、核黒く、瓤白し、こと食べハ甘美、南人謂て撫覆子と、或ハ鳥覆子と名く、七月と過てこと来る、○時珍曰通草ハ莖ふ細き孔あり、取収と雨頭ふ皆通ず故ふ名く、

栗引 取収と引と云、

溢蚊 滑稽雜談 八月の溢ハ蚊肉と割と云、

鶺子鳥 和漢三才圖会倭世語ふ、近来秋ふ許用ず、名阿止里此鳥常

ふ山林ふ棲ム時ふ群飛して寺院の叢林ふ出る事ハ百千群と成て天と蔽ふ状ち雀ふ似て大く黄ハ頭頸灰蒼ありて拆色の斑あり、頷黄赤ふして黄白し、背蒼赤と帯ふ黒き斑あり、日本紀天武天皇七年鴿子ら鳥天と絞ふて西南より東北ふ飛ハ、

江鮭 鱆鰭 草魚 鯇 鱆 和名阿米 琵琶湖の名産ふ大きなる者三尺ふ過ぎるものあり 優鰀魚のごと、江鮭とハ則江湖の鮭ふ河鰀魚より ハ臓多く、湖水ふての佳品ふ秋ハ月両水河ふより、湖中ふ流れ入るとき多く川ふ上る、築と構へ或ハ大なる櫓網をハこれを取る、

新酒 湖東問答 去年 問云春の暮ふ對して暮秋と心得さる作者多しといへ尤秋の暮ハ秋の夕間暮あり春の暮ハ暮春の事ふ侍るふ依て答云春の暮ハ暮春ふ又一片ふ限るべからず、一句の趣ふよりて、○秋の夕暮といふべきと文字の数ふもよくなるべき句あれバ畧して秋の暮といふべし、近ころ下五文字ふ秋の夕とよる句あり、秋ちゆふべと読ムべきと思ハ作者心得ハ、

九月 御光明寺殿下御抄 九月九日ハ寒温のさかひ身肉ふ寒ふ時ハ此温酒を飲めば病と得ざるふより酒と温め用ふるなり、世諺明答ふ引ふり、

栗田口祭 十五日 増鏡 川橋の東八大天王の祭ハ祇園牛頭天王娑竭羅龍王の女頗梨女とめとりてうとまつる八王子なり、暦ふ云ふ八将神ハ、

穴織祭 十七日 摂州豊嶋郡池田村氏家の北ふる山上ふあり、摂陽羣談 穴織呉服の両社其間僅十町ばかり、日本紀 應神天皇十四年春二月、百済王縫衣の工女を貢ぐ、真毛津といふ 同三十七年春二月戊午朔阿知の使主都加の使主と呉ふつかハして縫工女を求めしむ、阿知の使主ハ高麗国ふ至りて更ふ道路を問ふて呉ふ通ずるを得ざりて人を訓て導者とせり、呉の王工女兄媛弟媛呉織穴織を換ふ 同四十一年春二月午朔阿知の使主ハ呉より筑紫ふ至る、時身形大神工女を乞ふ故ふ兄媛を以て身形大明神ふ奉る、今筑紫ふ坐る御使君の祖ハ既りてその二女を率て摂津国ふ至

る武庫小来て天皇に朝ごはんを及むを大鳥鷲の尊仁德
ふ献るこの二人ホの後今呉の衣縫媛敏屋の衣縫媛ニ人○
仁德天皇七十二年戊子九月十七日ふ縫媛二人とも去のひ
てつゝかこまとこ祝ひ祭て縫媛の神なるを毎年九月十七日
十八日ニ六織呉織両社の祭礼ニ和衣荒布の神供を備
てこれを神衣祭と称ふ社家の説ふい應神天皇春三月、
縫媛ニ呉ふ求むとゝろ、秋の花いで不審、この林ふ多くの
よ、藻塩草ふいろ、秋ーの花 分類 藻塩草ふ菊の異名とゝろ、異名
も南ゝるこ枯るまで野ふ残ることゝ秋ーくの花、
是古き物ふあり、或説ふ菊と秋ーくとよむとゝ今按
ずるふ埃嚢抄ニ云聖一國師重陽の佛事の時ふ草
の花を北の籬ふ植てノンとくと南の山と見るとあるを
しちゝ云ふ是ハ古文前集ふ陶淵明ゝ採菊東籬下
悠然見南山とゝ人詩ふて東と北ゝ抹と植とゝ傳
寫の誤あるべ埃嚢抄ふ藻塩草
の秋ーくの花も誤ってゝ秋草の花、赤小豆引

大抵土用の中種とあ
蒔九月ゝれと収む、芦の穂絮 孝子傳 閔損の後母生處の子ふハ衣もる
ふ綿絮を以し損ふハ芦花の絮と以て父と母と出さんと
す損ゝ曰母在せバ一子單ゝり母去ゝハ三子寒しと遂ふ
止 本草別録 烏桕ふて熏し乾て甘温 阿末保恵 秋
む、烏桕 御今 多識論
の葉 御今 初霜ハ朝寒 御今
のゝゝり、秋の霜 朝寒
秋ゝさむき朝寒きゝ、網代打 藻塩草 網代ハ冬
朝氣さむゝゝ九月 然まゝの九月
九日の前ふ初て宇治の
網代人供御ふ奉るゝ、秋過て、秋暮て、秋
ご隅る、秋ふ後ゝ、秋より後、秋の別、
秋の名残、秋の限て、秋と惜、秋深さ、
秋の湊 注ふ 丕及、

さ

七月 さくがふ 姫 棚機の異名七

姫の内くちくがふとハ蜘のことく異名分類開元遺事ふ蜘蛛
といてるとこと小き金盒の中ふ納め曉ふ至て開きて蜘蛛の
糸の稀密あると視以て巧の多少を得ることゝ云長明四
季物語ふ姫蜘蛛とてきゝゆるあるもの其つくもりと或ハ
ねゝびの糸ふいを引ぬると晶うて私のねゝびひくく索ふ
つくもるとあるべしこれらふよれるあるべし

餅 共代田事記七月七日織女とまうる又牽牛神あり、
その祭供ハ索餅と以す是糸織の象ふ表す並ふ
摯麪と以まこれ鋤耕の象ふ表す十節記昔高辛氏の女
子七月七日ふ死もその魂鬼神とありて人ふ瘧を病しむ其
存まる日麥餅と好めり故ふその死まる日ふ至りて索餅
と以ことを祭る後人ふ的索餅を作つて瘧疾と患ひ、

刺鯖 いの部生身魂
の条ふ出ツ、

澤桔梗 大和本草華大ゆて
葉ふ多く、卷丹の葉ハ
葵ふ似るふ如し花ハ桔梗ふ似て淡碧色桔梗より小ふ
水辺ふ生ぜ秋花とゆらく根まゝ桔梗のごとし又浮蕃の
花をも沢桔梗と云ねうづら

五味子 本草五味子皮肉甘く酸
以ふ同名異物ふ、く核辛く苦く都て鹹き

味ありて五味具ふ故ふ名く春苗を生じ赤き蔓高木ふ
引く其長さ六七尺葉尖て円く杏の葉ふ似ゝ三四月
黄白花を開く蓮花の状ふ類を七月實ふる莖の端ふ
叢生を豌豆許の大さのごとし生ハ青く熟ハ紅紫

さゝ萩 葉の細ふまるを
さゝれ萩といふ、

兼三秋物 哉生明
二日三日の月といふ哉始く前の月大きくして二日ふ
明を生ぜ前の月小きるときを三日ふ明を生ぜ

哉生魄 十六日の月とく尚書望後月明死して
魄を生ぜ〇月の照ざる所を魄とのゝ

佐々良衣壮士 月の別名ゝ萬葉山乃葉乃佐々良衣
壮士天原門渡光見良久之好藻

盃の光、盃の影 御今盃の光ハ月ふよゝ
秋ふ秋うゝ西の月とゆゝ

さゝけき 秋の月
といふ、

君遷子 ふの部蒲萄酒
の条下ふ出ツ、

狭牡鹿 和名抄牡鹿和名佐乎之加 和名正濫要略
顕宗天皇紀ふ牡鹿此ふ云左嗚子加和訓の

狭雄鹿ゝて狭ゝ狭山狭野ゝどゝゝて〇萬葉ゝ小牡鹿と書るハちひさき鹿とゝふゝあゝ小さ

猿酒 猴菓と取て山中樹木の虚或ハ巖腹の凹ある所ゝ貯置き數日の後熟〻酒の如く味甚甘美ゝこれと猿酒といふ獵者往々見て竊ゝ食を

八月 **塊天神**

祭 三日 泉州府志 泉州堺常楽寺天神の像菅神太宰府ゝ在せ一日自ら作てゝ人七軀の像の内也とゝひつゝふ長徳二年或ハ迎喜年中正月海濱ゝ漂ひ来ゝりより此所ゝ安置ゝ或ハゝふ昔塩穴の郷湊村ゝあり故ゝ塩穴天神と称ゝ中世北の荘ゝゝゝと勸請ゝゝ文明二年菅原為長郷の記云和泉国毛須深井草部土師向井塩穴高石ハ菅家の氏神天の穂日の命以来の旧須ゝあり為長卿の真跡五条殿ゝあり今按るゝ塩穴天神ハ天穂日命ゝて後ゝ菅丞相ゝ合せ祭るゝ〇例祭六月十三日と夏神楽ゝ八月三日と秋神楽ゝゝこの日奉詣多し神輿堺七道濱〻〻〻〻東島〻渡御即日還幸〻先板の諸抄四日とゝるゝて今ハ三日ゝあるゝとゝ

三五の夜

つの部月見の条ゝ出ッ

西院祭 廿八日 春日の神社ハ洛西葛野郡ゝあり四条通西の上手四町計り云西院村の西平林村の中ゝあり 名跡志 按るゝ西院の号中頃此所の西ゝ齋院居ゝて故ゝ此辺の名〻て齋院と書〻と後世ゝて西院ゝ作る歟〇例祭八月廿八日神輿二基あり其一ハ住吉神輿ゝ村の西ゝあり 紀事

西院八幡祭 ゝふ未詳

拓榴 時珍曰榴、瑠、璃寶垂〻として蟠瘤の如し 事類合璧 榴大〻て盃の如し赤色ゝ黑き斑の點あり皮中蜂の巣の如し黄膜あり子ゝ多し婦人の歯の如し淡紅色亦潔白ゝて雪の如き者あり潘岳賦云榴ハ天下の奇樹九州の名果千房同蔕千子一の如ゝ飢ゝ渴ゝ療し醒ゝ解し酔ゝ正し 北史本草 祖收傳元魏宣武王延宗李祖收と納て邸ゝ後ゝ帝李ゝ宅ゝ幸ゝ妃ゝ母二の石榴ゝ帝の前ゝ投ゝ人其意を知ゝ祖收ゝ云子繁多ゝ是ゝ欲ゝ今聖一母神ゝ祭る人ゝ是ゝ備ゝるゝ榴ゝ以てゝ子の義ゝとゝ花の形ハ夏のゝの部ゝ

の花 木草 三七春菊と生じ、夏高サ三四尺葉菊
芝ふ似て動く厚く岐山大わり、莖ふ赤き稜あり、
夏秋黄花をひらく、蕊金糸の盤紐のごとし、愛すべし、
氣香らず花乾くとも色ハ翠ごとくなて苦黄絮のごとし、

烏鳳 和漢三才圖会 今云三光鳥 近年こゝにあり、紺
碧色背の上ふ赤と帶腹白く羽黑くして微
赤い頂の毛乱起て頂上ふ冠あり、眼大ふして驗者ハ其
尾長き者一尺半計ゆ、そこの〳〵迴轉して其吉凶清浅日月星
と言ふ如し、今三光鳥と称す、其雌雄ふ似て浅く尾短く、
俱ふ性男悍雛を育る時ハ鳥鴉の来るをこれ羽を
振ひ、ことと拒ひ或ハ其眼を啄く其巣鵲の如し、澁
両端ふ口あり、表より入裏ふ出、尾の長きを以然つ、

鮎 その部落 鮎の条ニ出

九月

坐摩祭 廿二日 坐摩の傳記ハ夏のさ
の部、坐摩の御拔の条ふ注ーこれハ爰ふハ略ス、例祭九
月廿二日、ことと相嘗八十島祭と号して、新嘗の神事なる
ふ、

逆髪祭 廿四日 社説ニ云江州滋賀郡琵琶湖の南、
逢坂山関の清水大明神ハ延喜年

四の皇子蟬丸の社〳〵蟬丸双眼盲ふ故ふ物ふして誓言
廿二年壬午春三月公卿大夫蟬丸を供奉して逢坂山ふ左
遷し奉て各涙雨を滴て帰京ま、残て留る人白川の邸ふ
則長基經古屋の美女師輔〳〵丘〳〵爰ふ於て姉の宮深く
蟬丸をまそひ、密ふ禁闕と出て相坂山ふ来ると蟬丸と共ふ
花月を清賞し、旅駅の山岩川陸を徧歩して雲鬢緑
髪顛倒ま、國人御名を逆髪と号く、天慶九年廿四日逝
去〳〵故ふ毎年九月廿四日の祭祀今ゆ至て怠ることな
し、姉薨去の後蟬丸とゝもふ一社ふ合せ祭る、音盤
云蟬丸と延喜廿四の皇子及び世人と以ふ云云或ハ
後撰集のゆくもの〳〵るもとゝめる哥の詞書ふあきこの人
どとて〳〵有ゆて〳〵と諸書ふ論あり〳〵ことゆるべし、水
戸學士の一説ふ唐の南朝元帝の諱ご延基とゝて延基
の三男極楽の時より極ゆて其上瞽これハ遂ふ是ご相関
とゝ〳〵所ふ捨のふ此子の名と彈兒とゝハいへんとまんハ幼年
ゆゝ慧ごとく彈せり故ふのく付〳〵今此事ゆり日本の
蟬丸の支と考ふるふ、延喜と延基とキの音同じ、彈と
蟬と字の形相似ゆり又相関と相坂の関ふ相似ゆり又延

喜の御子と捨ゐ人と彼是（同意）彈児の事ハ古史考巻の三十一ふ云ふ云、俳諧歳時記接ぎ云ふ逆上ハ坂上の誤あるべし、寺門の説ニ云、江州相坂山関の明神二所一所ハ坂上おわり一所ハ坂下ふあり云、元坂上の社ゐ云ふ道祖誤りて種々の説と設けくるあり、又云二所ゐ云ふ道祖神と祭りて以て関所の鎮守ゐ朱雀院の御宇蟬丸の昊と當社ふ合せ祭る、依て土俗蟬丸の社と称ゐ下の社の前ふ井あり、関の清水と名く清水明神と号祭礼九月廿四日上下の社同日ゐ、

皂角 時珍曰皂莢樹 皂ゐ故ふ名くゐ、

神輿二基ニ云この説穏ゐ、廣志ふこゐ云ふ鶏栖子ゐ云ふ樹の高さ大ゐ葉槐の葉の如く瘦長くして尖ゐ枝の間ふ刺多し夏細き黄花と開く実と結ぶ三種あり一種ハ小ゐて猪の牙のごとし一種ハ長くして瘦薄く枯燥て粘ゐ其極刺多くして上ゐ向ふ櫻のごとし、

櫻紅葉 同物

園史 巣山茶の如く小ゐ夏白花と開く秋紅の実と結ぶ珊瑚の如く累々ゐ云、

大和本草 珊瑚葉ハ橘の如く及び茅柳の如く刻ゐ鈍あり蕊長く都あり寒と日と之畏ゐ濱地ふ宜く本草綱目雜部の部百両金ゐハ此と同物ゐ、

和漢三才

櫛栗 江東小き栗 呼て櫛栗云

七月

北野御手水 六日 山城國葛野郡北野大満宮ふ御帝潔ゐ北ふあるを以て北野と名く、

紀事 七月六日 この夏もりめ朝日寺の地ゐ北野松梅院御手洗と神前ふ供ゐ松梅院ゐ幼年と添てゐるゐ供ゐ松梅院ゐ幼年或ハ故障ゐ云ふ義ゐ、

北野煤拂 七日

雍州府志 毎年七月七日北野社内外の陣ふある所の神宝と西の間及び幣殿金所ふ出しゐ日と曝ゐこの間ふ宮仕内外の陣の煤と拂ふ、

乞巧奠 名目抄 今の俗キツカウテンと云ハ不足言ゐ云 つくゐ廿日

乞巧奠ゐハ人々其業ふ巧みゐんことを願ふ意ゐ、

開元遺事 七夕ふ蜘蛛を以て金盒の中ふ納暁ふ開て蛛絲の稀密を視巧の多少を得ゐ、

乞巧針、乞巧瓜 荊楚歳時記 七

夕ふ婦人七孔ふ針と穿ち、或ハ金銀錫石と針とを貳集を庭中ふ蒔ぬ巧ゑ[illegible]ふ蟻子ありて瓜の上ふ紐ゐる時ハ巧と得

九枝燈

漢武内傳七月七日帝宮掖の内と掃除し雲錦の帷と張九華の燈と燃し西王母降

公事根源

禁裏御燈籠

燈臺九本おのく灯あり云云

滑稽雜談當世ふおいて禁裏へ御家門方より燈籠と献せらる奇巧金銀を鏤め花鳥人形ふの美を尽せり是を南殿ふ[illegible]らるいつのころより始てなるおぬ[illegible]ぬ

切子燈籠

和漢三才圖会一種岐里古燈籠、紙繒甚聖美祭ふふこれと用ふ飾る所

逆の峯入

紀支七月の初大峯の修驗道山伏の客僧大峯より京師ふ出て大ある法螺と吹き自ら金剛杖と拏戸々を遍歴して奇料と乞ふ或ハ前鬼木鉢或奈良硫黄ふの物を且那の家ふ贈る凡峯入の法ふ山汎熊野より大峯入是と順の峯入とふ當山汎大峯より熊野ふ出ず是と逆の峯入とり〻〇春の部順の峯入の条がよりて[illegible]

〇貞享式峯入の類も順逆といひて春と秋とふ今の俳諧の省法ふよらぐ秋季ふつれて春とあんべ名

秋ふ春季ふつもてハ春とふ秋季ふつれて[illegible]地ふよりて名る

木曾明

う猶ふらぬべし

清水千日詣

十日七月九日より十日ふ至りて京師清水觀音ふ諸人参詣を夜ふ入て参詣殊ふ多し今日の参詣平日の千度ふあるとつ〻江戸浅草の觀音と同日ふして参詣多し

經木流

十六日 摂州四天王寺ふ俗四方六千日と云ふ

東僧坊の前ふ亀井の水ふり白石王手の水と号もむ〻白川法皇の[illegible]東門院當寺ふ詣し時其水盤ふ亀の形ゐるを見て白石王手の水と以て亀井の水と詠ぜ[illegible]其水盤の起る[illegible]

新古今濁[illegible]亀井の水とむをひかけて心のちりともくきつるかな

〇七月十六日世俗經書堂ふおいて經木の表ふ法名と記し此水と手向て霊魂と慰[illegible]振陽群談ふもこれをうい昔八月毎ふ六斎の日講堂ふおいて經と誦し参詣の戒名と名帳ふ記し回向せ[illegible]ふ和

泉式部恭詣のとき名と名簿ふちらして詠をる哥 梓弓
ちつるべ〜といはもなねどうの〇てあき身の數ふりぬる今の
經木ハこの名 **桔梗** 時珍曰桔ハ結ゝ其草の根結實
簿の遺意也、 桔梗和名阿里乃比布木 和漢三才圖会 山野及ひ人家ふ多くこれと
種ゝ紫碧の者と桔梗の正色ともに又白花あり、紫白相
交る者あり、單葉あり八重あり、 古今 物名 秋ちくさ野
ハありふりぬるものおけるくさ葉もいろくちゆく友則
蟋蟀 大和本草 本草四十一卷 蟋蟀 又蛬とつくる立秋の後夜鳴ゝ イナゴふ似く
黒し、翅あり角あり、頭ハ切るる如く光ありて俗ふづうを
ふくとつふ西土の方言 クロツヾとつふ古哥ふきりぐすを
ふるハ是こ秋の末まで ふく故ふ古哥ふ霜夜ふあり、〇
今俗つふきりぐすハ莎雞こ 家持集 きりぐすをつりさせ
とハ鳴ふをどむらきなかくる我ふきゝまを〇華つ虫ちぐ
ろむしすげの庭鳥ホの異名あり、頭字の部ふおちて淺、

兼三秋物

銀兎 月とつふ、淮煬帝云、 **既望** 少の
清露浸侵銀兎影

さよひの条 既ふ魄と生ぜる十七日の月
ふ併せ詮ス、 **既生魄** し、月の照ざる所と魄とつふ、 **暉**
素 文選註 月光ゝ、 **金波** 前漢書 月光ゝ、 **霧** 尔雅孫炎註天気
下り地ふ應せざる
と雪とつふ、地気天ふ発して應ぜざると霧とつふ、 和漢三才
会 雪霧の二種皆露の変ずる者、秋月盛んにして其降
や朝と夕とふあり、甚ゞ多きと紀ハ菜蔬草木凋ゝ枯るく
と霜雪より烈し、 藻塩草 霧八春夏も詠ぜゞし秋ふ
限るべからずとつどゝ連俳ふ霧とむりハ秋こ八雲御抄
の如く春山の霧ふまとつる鶯、又夏霧とも万葉ふあり
と云、俳諧とても春夏の季ふ結ゞ春夏ふわてる
べし、〇朝霧夕霧別義あり、 **霧の海** 野原ふ下てとる霧
の海 霧の立てゞてこる。 の渺々とて海の
とはゞきとつふ、 **霧の香** 御今 霧ふ匂ひのあるものこ遷
るとつふ、 とつひて別ふさき物あるふハあらぬ、霧不斷
の香とあきと詩ふを作るハ只秋霧のとこ、 **霧立**

人八雲御抄 ものさ てくる人をのふ、霧雨 霧の深き所ハ雨の降やうこれをいふ、木淡 樹とふ熟し美き材を木淡とふくふ、伽羅材 一名透徹材形長く四く微尖り肉中沈香の理の如くふしぜ味脆く美し、錦馬 鹿の異名あり、

八月

北野祭 四日

三十二社註式 一条院永延元年八月五日祭礼をはじめて官幣あり、後冷泉帝永承元年八月四日ふ定らる五日八毋后の国忌ふよりて、拾芥抄 北野祭今八四日元八五日先例大臣より始て納言参議より至て大頭と称を催し申あり、料米六十石、○祭神三座中八天満天神東八中将殿菅吉祥女、菅家の北の方都の西南吉祥院ふ住ひしゆゑの崎名なり、鷺水記曰、此祭甚ざ品美麗ありて神輿下立賣の西御旅所ふ移し奉る、其間廿余町の地ふ蜀錦と敷き、供奉の輩綾羅の袂とつらゐ、管絃の声雲井ふひびくる、礒 四手打 綾巻 字林 直衣打 まろ打 小巻と掛ようゝ富社の古記ふあり、

といふ、古人衣と掛ふ両方相對して一杵と執て米と舂ふ如し、然るふ今易るふ卧杵と作る、對座してこゝと掛つ、其便を取る 和名抄 唐韻云礒和名岐沼伊太 掛衣石ふ作品掛衣杵 和名都知○綾巻衣と裏衣とその結と巻て打ふ、○四手打八雲御抄 もきりふ打ゝ衣をてゝ打ふよめり、○もろろ打 もろろハ槌の名ゝ槌をて打をふ、銀杏 實時珍曰銀杏其葉鴨の掌ふ似ふ、因て鴨脚と名づく、宋の初始て貢を故て銀杏と呼其形小杏ふ似て核の色白きふ因て今木の子取 たの部耳符 秋引 刑部の条ふ出ず白果と名ゝ、

啄木鳥

一名てらつき 時珍曰此鳥樹を剉裂て蟲を取食ふ故ふ名ゝ禽經云小ふる者雀の如く大ふる者鴉の如し面桃花の如く啄足皆青色爪剛く嘴利く錐のごし長き数寸舌味り長し其端ふ針刺ありて蟲を啄て得るとき八舌を以て鈎出しこれを食ふ○昔王造ふ天王寺を建し時、皆烏群来て寺の軒を啄き損ず故ふ寺啄と名く守屋が怨霊鳥ともいしとゝ、菊戴鳥 和漢三才 冒会 状眼白鳥ふ似て背翅青緑色頂の上ふ黄毛花の如き者と戴く故ふ名く、

九月

菊

花の宴

九日 青藍云、俳諧歳時記ふ周の穆王へ嘗山

また、法花の秘文を釈尊より受て慈童

ふ傳へ、慈童八百歳をへたり貌少年のごとし、魏の文帝

の時名と彭祖と更て文帝ふ此術を授け奉る文帝この

術を受て壽七十歳今の重陽の宴是を此説妄談の甚

しきいなべ〳〵列仙傳ふ彭祖八帝顓頊の玄孫姓八錢名八鍾

周ふ至て八百歳ありて衰老せを、穆王召して大夫とせんと

す病を称して與らを後遂ふ流沙の西ふ往彭祖の傳か

くの如し慈童より事と以て附會をるかれ八元野史小

説の詩語より出ず菊花の宴八秦漢以来より既ふあり云

論ひくり實るし妄談附會の甚しきいハべ〳〵もろハあるべ

本朝文醉ふ視賜群臣菊花詩序云紀納言採故事於

漢武則赤黄柿宮人之衣尋舊跡於魏文亦黄花助

彭祖云々又世諺問答ふと魏文の説と引とくれハ古くより

いひつたへる妄談をもて〳〵元風雅の道八事の虚實ふかく

つとも其趣のもろ〳〵きふ隨いとさきをくうるをんとよ

もとハ附會の説とそこをもろふ捨べきふ

もあ〳〵ぶ〇ちの部重陽の宴倍ふべ〳〵

菊瓶

公事根源 御前

ふ菊瓶とおく云全文ちの

部重陽の宴の条ふ云へり、

菊花の酒

高ふ登る 続諸記 汝南の桓景費長房ふ隨ひて遊學すとき異年、

長房謂曰九月九日汝家中災あらん急ふ去べし家人各

絳袋を作て茱萸を盛り以て臂ふ繫て高きふ登べし、

菊花の酒を飲べしもし此禍ふ除くべし景言の如くし舉

家山ふ登る還て見るに雞犬牛羊一時ふ暴死を長房

これを聞て曰此をもふ代るべし今世の人九日高きふ登て

酒と飲婦人茱萸の

嚢を帶蓋此ふ始る

菊の節句

栗の節句 菊酒と飲栗と

親戚朋友互ふ贈る故ふ

菊の節句栗の節句と称ず

菊の善綿

御湯殿記九日の夜ふ入御

殿の南階ふ小菊を多く植其菊ふ赤白黄の染わたを

九めて菊花ふ作て枝々ふ付るに今日葵と菊ふ取へ

らるゝこといつり云々〇青藍按ずるふ菊ふ善きこと者をこと

くハ菊の露をもふ移しとり面をぬぐへをもて老せぬ

薬とせり〇後撰集〇ちりぬとて〳〵

伊勢ず家の菊ふもとを着ふつるとりてもハ又のかつ

侍る時九月八日

とりもてくるとて、伊勢集 あらそはゞ君がよはひをのぶへつらなる
る宿のつゆとならまし かへし 藤原雅正 露だにおきしちぎりの宿
の菊に心ぞ花のいろぞやはくちずらん 紫式部日記 九日菊
のきせわたを兵部のおもとのもてきて、これ殿の上のとりわきて、いと
よう老のごひ捨たまへとのたまはせつるとあれば 菊の露
わかゆばかりに袖ふれて花のあるじに千代はゆづらん ○此外
源氏、枕の草紙などにもみえたり。今禁中にてもつくる、菊
の綿をつくりてきせたるはいにしへのなごりとかや

襲 くの部九日に 袖の条に注ス

菊花 時珍曰陸佃埤雅ニ云菊本蘜ニ作ル、蘜ハ窮なり、月令ニ
云九月菊黄華あり、華事此ニ至て窮り盡く故にこれを
蘜といふ 和名抄 菊 和名加波良与毛木 一云加波良於波木 和漢三才図会 本綱
に菊九百種、宿根より自生す、其莖葉花の品々同じからず、
千葉單葉心あるありなきあり、黄白紅紫間色浅深大
小の別あり、其莖株蔓紫赤青緑の殊あり、其葉大小厚薄
尖禿の異あり、又夏菊秋菊冬菊の分あり○百夜草、星
見草、金草、ここぬ草、千代見草、齢草、山路草、少女草、弟
草、草の主、残草、翁草、花の弟、百菊、たゞ菊、酔楊菊、大
白大般若、翁草、隠君子、女花、鞠花、秋の花、秋しくの花、契
草、蘜我菊、承和の色、残菊、野菊、かはらおはぎ、各頭字の部
にわかちて注せり。よつてみるべし。

闘菊 古今著聞集 延喜十三年十月十三日
御記云仰侍臣令新菊花分三番 一番合仙華 二番合滝口 次第進花
相争勝負、以甲時各方領花参入、
立庭中 一番種花以洲形 三番栽以 捅各蔵二人所二人取立御前 左衛門督藤原朝臣
候御前傳作勝負十番勝方奏中
拝舞選進菊中各四本栽西方庭

菊の淵 古今 わが宿の菊
もらつゆけふぞしら幾世へん
つかりて淵となりぬらん、

金目貫 百菊の内なり、蕾黄にて方重なり

秋牡丹 大和本草 秋牡丹 外品 農圃六書ニ云と嗅ハ臭しと
云今試るに然らず、春分移し植、九月中菊に先て開く、
紫菊に似たり、初め深紅にして後浅紅也、中略 鞍馬貴布禰
摂州箕面又西州諸山にあり、本邦に昔よりある草なるべし
○京都の俗きふね菊と
称せし所説のごとし。

貴船祭 九日 神社啓蒙 山城国愛宕郡鞍
馬の北一里ばかりにあり、祭る所の神二座、高龗の神号永徳
の神にて、別雷の神宮第二の摂社なり 神代巻 伊弉諾尊、

訶遇突智と斬て三段とも、其一段ハ高靈龍とも、三十二社註式

貴船の社ハ船玉命と高靈龍とも改暦雜事記九月九日小兒咳逆疫と云死亡もるゝ多し仍て相者どゝてトせゝむ云貴船の神の祟ふに所くゝろふ於て弘仁二年百六代後奈良天皇秋九月九日疫と追ゝむ今貴船の神輿と称して洛中と振るゝの是この遺意なり○ホゝそゝ以来毎年九月九日小兒相集てゝ小きゝ神輿と作て貴船祭と称して市中北山祭廿日六所の社を振るゝと挾小輿らゝゝゝ、

ハ洛北鹿苑寺の西南衣笠の岳の良平林の中ふにゝ祭神詳あらず、例祭九月廿七日名勝志の説北山天神祭九月廿六日この拜殿ふ於て三番叟あり、正月廿七日六所明神ふ猿楽ゝり、管見記九月廿七日等持院村祭松尾ホ社等持院鹿苑寺ふ相隣る故ふまゝゝ北山祭と称ふ類聚國史北山の神社ハ大北山村ふあり、天長五年八月天地震災わらとゝ、丁ふ北山の神ふ祈る、名勝志北山ハ高橋の西北四五町ふ

ふり、高橋ハ北野平野の間紙屋川の橋ゝ洛陽より成変のゝゝ北方ふにらゝ。

とゝゝゝと古より北山と称を疑らゝふ村名ふよろ

ゝ○毛吹草ふ北山祭廿五日と記諸説迷ふ異ゝ

金柑

時珍曰金橘実と結ぶ秋冬ゝ黄熟も、

枳殼 本草圖經枳ハ橘の如くして小ゝ高さ五七尺葉橙の如く刺多し春白花を生ず天和本草 枸橘今案ゝゝ和名カラタチといふものゝ其木より多き故ふ人家植て籬とゝ盜ふ備ふ昔より國俗誤りて是と枳殼枳實とゝゝ藥ふ用ふ非ず、

寺千部

十五日より 明顕山祐天寺ハ江戸驪黒ふあり、廿五日まで 開山ハ祐天大僧正例年七月十五日より廿五日まで阿弥陀經千口修行この節参詣多し、

夕顔の實

品類多し

○瓠長きと越瓜の如し首尾一のゝゝ○懸瓠瓠の一頭ふて腰あり長き柄ふる者、とゝ柄あゝくしてひきくゝまゝゝ○匏柄ふくして円大形ち扁き者、○壺兎の短き柄有て大腰ふる者、○蒲蘆壺の短き腰の者、○其形状各同ゝらゝとゝも苗葉皮子性味ハちろハ右本草時珍説ゝ○乾瓢ハ瓠を又塩とひゝゝおりとうけおきて日ふ浸ものは、

七月 祐天

兼三秋物 夕月夜

蜻蛉

の大小ふようて朔二日の夕ようう出現ある事分明ゝ十日あまりの頃まで、暮ゝ出るわどの月と夕月夜と讀ふらそ。

弓張月 【歌名】弦ハ月半の名ゝ其形一旁ハ曲しゝ、弓ハ直くして弓の弦と張ゝ如きゝ

夢野の鹿 摂津国風土記云雄伴郡ゝ夢野あり、父老傳てゝ云ふ昔刀我野ゝ牡鹿ありゝその嬬ゝ此野ゝ居ゝそのき妻の牝鹿淡路国野島ゝ居る彼牡鹿墨野島ゝ往て妻と相愛し既ゝ牡鹿来りて嬬の所ゝ宿る明旦牡鹿その嬬ゝ語りて云今夜吾背ゝ雪ふりおけりと見きゝ又もてき草生とりとき此夢何の祥ぞ、その嬬まと夫の妻の所ゝ向往べきを悪ミ乃詐て相ゝて云背の上ゝ草生るハ矢背の上ゝ射るの祥、又雪ふるハ白塩穴ゝ塗の祥、汝淡路ゝ渡らゞ必船入ゝ射られて海中ゝ死人謹て復往事ふまとその牡鹿感意ゝ勝て復野島ゝ渡る海中行船ゝあひて終ゝ射殺る故ゝ此野を名づけて夢野とゝ俗説ゝ刀我野ゝ立る真牡鹿夢相のまゝふ、【五五】**河社** 契仲大人云仁徳記ゝ苑鹿野の鹿の夢のとゝあるとゝそもとう夢野しゝふよういとゝ

ようて夢野ひの部菱取のとゝまむゝ

茄菱 茶ゝ

ゝ似て酢し柚の皮ハ苦く擦の皮ハ甘し、

柚味噌 【滑稽雑談】柚味噌ゝ云ものゝ作る、柚一箇と三片とゝ瓣核と去熟湯ゝ投て輕くふしめ、取出し乾ゝ置て柚味噌ゝ用ふる所の味噌と其片ゝ盛り包ゝ編笠の形ゝふゝよく蒸ゝて用ふ、抵園の茶店関東何某浴て制衣をる所ゝ、

行秋 行秋の

この郷、乙由

七月

益母草 【ゝくゝせゝ】猪森俗目むゝぎと云ハ胡麻ゝ似て葉ハ麻のごし其葉両ゝ相對して一層ハ東西一層ハ南北とゝ分ひゝ十文字ゝ為ゝ七月紅紫のゝ花と開く又微白の物あり本草ゝ花四五月と記ゝ土地の違ひふゝ、

八月名月 【和漢三才図会】頭背翅尾黄つの部月見の条ゝ出ゝ、

眼白鳥 青ゝ鮮明ゝ俗ゝ云ふ淡萌黄色ゝ眼の睫ゝ白圈あり胸臆白くして朱色ゝ帯ふ腹白し性ゝ群ゝとゝあるゝ交ゝ好て樊の中ゝ在る示一樂

ふ集り相依て多く推て、其中一雙飛出群と抜るごとくに、餘まさ相推て又中より抜去初のごとし、毎ふ搖と好む

七月

鼠尾草

時珍曰鼠毛穗の形と以名ふ命〇韓保昇曰鼠尾草の端ふ夏四五穗と生ず、車前の如し、花赤白の種あり、

水懸草

増山の井説々けり貞徳云水影草ハおやく七夕ふあり、水懸草ハ稲の事

三井寺女詣

十五日 江州長等山崇福寺又蓮福寺地福院々ごとくに聖昊ふ水じとる心あり、又或説ふ園城寺又三井寺と孫ゑ園城寺ハ御園ふ隣るゆゑ以て名とし、三井寺ハ西巖ふ昊泉あり、天智天武持統三帝即位の時、この井の水と掬て浴湯ふ献ず、因て御井といひ後ふ改て三井ふ作る是三皇の浴井龍華三會の義と、この寺平日女人結界の山ゑ、七月十五日女人の参詣を許し登山せしむ、れを女詣といふ、當山ハ智證大師四珍の開基、

妙法寺の火

せの部施火

御狭山祭

穂屋 廿日 信濃諏訪郡諏訪明の条ふ出ず、

神の祭ふ今在記上諏訪ハ建御方富命、下の諏訪ハ坂入姫命〇或説ふ御射山の祭ハ、薄少て神殿と造る其外人の家も祭の程ハ皆薄ゑて作る、又こゝとゝもまてきのごとく、日本紀ふ三野堀の神ふハ五百筒野蔓の八十玉籤と採うむ、是ハ天照大神と天の岩戸より出し奉らんと、時のうらなひ、ゑて信濃諏訪ゑ山祭ふハ薄と以幣とす故ふこゝを川信濃といひ、〇此祭ふ遠笠懸と射て進らせる、其始田村将軍の安倍高麻呂と伐んとゝふ、信濃國ふ至て此神ふ祈て申さんしふ、榊の葉の紋付し直垂着こる人胡の波上ふ馬と走らせて笠懸射てしゝを今ハ笠懸射て神事とす、ゑいとの所謂あり、こゝて邇波も記して諏訪ともとめ、と縁起ふ出當社ハ祖武の御宇、田村将軍の建立ことゝ、この神ハをゝく田獵のてゝと王ごゝろ、〇穂屋御狭山ふ作る穂屋あり、この祭ハ貞徳説ふ八月ゑ藻塩草七月昔ゑゝ、増山の井ふハ七月廿七日とゝて此説多し、ゑゝ、ゑ欲むゝハ勅使と立らるゝ、汁穂屋といふハ、勅使尊敬のゝあ新ふ仮屋と設じらるゝ、今るゝその余凡ゑて穂屋と造るゝ、で新式秘抄ふ云穂屋つくるハ諏訪祭のごとく、諏訪祭ハ

年ホ七十五度ありと是その一ツ、みさ山祭ハ山城笠取の近所くとら人説あるとど、名所方角抄寄枕秋の嫁覚ホホ信濃を○

猿蓑 雪ちるや穂屋のまくきの苅のこし　芭蕉

蓑荷の花 周礼 庶民喜草と以て喪事と除く宗懍謂喜草則蓑荷の花是ゝ○時珍曰隋書古今註云蓑荷其子花根の中ホ生ず花ひまゝ敗れざる時食ふべし冬ゝきときハ消爛ス

兼三秋物身ホ入 荒方生秋夜賦 氣入肌以凄凜 新月朏魄 織月文選

灑林蕭索 甲子紀行のごとくホ凡のゝむ身ホ芭蕉

三日月 月賦に出ル 礼記の注 月三日ありて魄ゝ向ゝ云朏ハ盛明ホ魄ゝ生ル○新月纖月玉鉤蛾眉磨鎌ホ三日月ハ八此外種々の譬喩詩多ク水ホ多し○何事ホもゝ似ル三日の月　芭蕉

梨水 水梨形ち青梨ホ似ル褐色

蚯蚓鳴 歌女 秋名主龍地龍子寒蚓ホの諸名ホ○時珍曰東方虫賦云其鳴ゝ長吟故ホ哥女と名ク孟夏ホ蚯結ス雨ゝ

ときハ地ホ出ル晴るゝときハ夜鳴或ハ穴ホ結ぶゝときハ化して百合となる蟲ゝ蟲と穴とおなじ〳〵ゝして雌雄ゝ生ずゝ

蓑虫 鬼の子 和漢三才圖会 諸木の嫩葉漸く舒て老葉巻ゝあり中ホ小虫ゝ生ゝ其虫枯葉ゝ喰ひて糸ゝ吐き用て窠ゝ作る長さ寸ばかり蓑蓑ゝ似て燃ゝ易る艾柱の如ク安ホ枝ホ縋る其虫も又黒色皺段ありて首ゝ長く時々ホ首ゝ出して嫩葉ゝ食ふ其首ゝ動き貌蓑者ゝ似る公羽ホ彷彿ス 枕草紙 ものゝあはれ哀しきもの小のうみゝ生ゝ出ル小ホ似て子ゝ多ゝ生ゝ出ル中ホ小虫ゝ生ゝ出ル中ホ小虫ゝ生ゝ出ル中ホ小虫

州堺の庄、塩穴の下条開口村ふあり、住吉日記祭る神伊
弉諾尊の御子、事勝国長狹、後ふ生玉牛頭天王
と合せ祭る、乃ち住吉の外宮とも、故ふ朝廷二十年ふ一度住
吉の社造て、皆ともあるべくいとき、當社も此義あり、社地、
開口村、本ち村原村の間、俗三村大明神と称し奉り祭る、
泉州府志 社説、云密来山念仏寺、聖武帝の御願ふ依て、行基僧正
開基せる所、社領八十石〇例祭八月一日二日、又大寺祭とも、木ち村開口村原村の産沙神ふて、大念
佛寺の鎮守、

三津八幡祭

十月 摂州西成郡大坂三津の寺町ふあり、三津とハ高津
敷津難波津是、傳へふ昔行基寺院を建て三津寺と
号、後神託ふよりて八幡と勸請、毎年八月十五日祭礼
ありり、社説ふ、当社、清和天皇の御宇、筑紫宇佐の神
男山ふ遷座のとき、西海より初て至りあ、洲中、その旧跡
ふ祝い祭るとも、又一説ふ應神天皇行幸の地ともの、〇
〇摂州難波堀江の人月と此所ふ賞て各深更ふ及び
家ふ帰るこをと月見と称て又
難波の御祓と称て、是八幡祭、

水引の花

和漢三才圖会 水

引草高さ二三尺、葉楊櫨ふ似て皺あり、秋長穂を出、
小き花つく、紅色且蓮四く、纖く紙撚及び水引の如く故
ふ名づく、

水殆潤

月令 ふ出

九月 三度栗 本朝食鑑 上野

州下野州ふ山栗あり、極て小みて一年三度栗ふ収む、
故ふ三度栗と称て、味佳ふらもとせ、古のたぐりう、

水木

和漢三才圖会 美豆木高さ二三丈、葉梅葉
木の葉ふ似て微厚く冬凋む、花藤の花ふ似て
黄色あり、一種土佐の山中ふ出る者高さ一二丈、葉粉
團花の葉ふ似て小し、正月黄花と開く、攢簇て下り垂
る子と結ふ、赤色呼で土佐美豆
木、一つふ〇実と賞して秋ふ、

蜜柑

和漢三才圖会 太知波奈 和
名ハ橘類の總名、今單ふ太知波奈と称ふ、もの、包
橘ふ、專果とし其皮と葉とも乃蜜柑ふ、其実熟せざる
きハ蜜の如し、故ふ名づく、たちまち草 橘ハ淮とも、
化て枳ふ、ものといふ、きろ、ひ、ふ此国ふ、
らん九年母ふ、ものといふ、其樹と移し
て出羽ふ植ふ、ものといふ、枳殼とあるこ、

水の紅葉

川の紅葉お同し、かの部ニるべし、

七月 七夕 七日の夕、

とゝ〳〵ハ、二

星 牽牛 織女 犬飼星 月令廣義 焦林大斗記云、天河鼓 彦星 河の西ふ星あり、煌々たり、

参こ俱ふ出ツるとき牽牛とゝふ、天の河の東ふ星あり、微々たりて氏の下よあり、ゝること織女とゝふ、世ふ雙星とも 倭名抄 尓雅注云、牽牛一名河鼓 和名比古保之々 伊奴加比保之 織女 和名太奈八太 豆女 和訓義解 ヒコ星ヒコハ男子の美称織女の文、も故ふ男星ゝゝ、ゝゝあり、

二星の屋形

唐の天宝年中、宮中七夕ふ錦繡と以て結ひて樓殿ふ、高こ百丈數十人と容べ、花果酒炙と陳ね坐具と設け以て牛女の二星と祭る、○本朝式ハ少く異こ七ツの棚こかき花と折瓜果と備へ、

七種の舟

七種の舟ハ色々の色七色舟ふ積て手向空焼ものの事あり、

るとゝ〳〵七夕ふハ七の数と用ゐ、

新吉原燈籠

一日より 享保元 三十日迄 年江戸吉原の遊女玉菊う追薦のゝため、一年七月中の町の揚屋各燈籠を出す人是より列しまゝて毎年此事あり、その燈籠綾羅と以て錦繡諸物と造て奇麗荘観のゝ、この節男女群集をそれと燈籠見物ゝハ燈籠ふ玉菊う来る夜、

聖霊棚

たの部夫祭の条ふ出ツ、

鹿鳴草

類聚名分 和名抄 鹿鳴草 波木草 々故ふ此名あるべし、八雲異本ふもちなとあり、教長集都うも咲ゆゑ夢多く名ふ八草八秋の山〳〵ふ、

石蒜

大和本草 老鴉蒜 月赤さ花〳〵下品〳〵此時葉ゆて花〳〵故ふ筑里、紫ま撞子の花ゝ〳〵〇彼岸花ゝも い〳〵曼珠沙華の条のよてゝ、

秋海棠

名花譜 秋海棠一名 断腸花、嬌姿景教真ふ美人の病と捲ゝ〳〵性陰と好む、日と見るふ即瘁く、九月枝上の黒子と收め、地上ふ撒ハ明春枝と発ち老根冬を過る者花発き東ふ茂る、大和本草 寛永年中中華より初めて長崎ふ来る、そ以前ハ本邦ふ一色海棠ふ似ゝ、故ふ名づく 云〇

椿 桂

時珍曰椿 桂 名漆秋海棠西瓜の色ふ咲ゆゝ、 詩箋、 椿即ち樹ゆ〳〵車ゝる者故ふ、ゝと椿〳〵〳〵他の桂熟そゝ、ゝハ黄赤惟熟ゝ、ゝとゝ〳〵ふ青黒色搗碎き汁と浸ゝ、ゝと漆桂ゝ〳〵

諸物を漬べし、**澁取** 和漢三才圖会 柿渋造る法、柿一斗故ふ漆の名なり、帝と玉水二升五合ふ和雑ふ持こ編ふ盛り宿と經てこれを搾て渣も又水ふ和て二日と經ふくゝびこれを搾る其用甚こ多し

ちら露 李白詩 秋露如白玉 伊勢物語 ちらさまの何ぞと人のとゝ問ふに露とこたへて消ぬべし

秋物 月の異名なり、

新月 みの部三日月の条ゝ注を、 **ちいまほし** 秘蔵抄 朝教物ふふるみゝの空ふ風ふけばふ雲えまもと宿星の影、

常娥 淮南子 羿不死の藥を西王母ふ請ふ、姮娥こと竊んて以月ふ奔る 後天文志 常娥ハ羿の妻、不死の藥を竊んで月ふ奔るこれを蟾蜍とす、

真如の月 法華玄義 清浄真如ハ雲分の月のごとし、○衆生の真如仏性常に煩惱ふつゝまれても其体ハ少しも染ず汚ずして喻ハ月の雲ふ掩ゝるこゝも其体ハ清く明らかなるが如しこゝと真如の月とゝふゝ真しハ不変の義如ハ不異の義、

篠芒 宗祇曰ものもきゝとハ繼ふ白しの文あり、 **緩芒** 真ふ、 **忍草** 真淵

翁云ふの〻草ハ和名抄の苔の類ふ垣衣とものふゝもみくゝり、古き築地打たる物の端、古き軒端あゝふ常ふ生る草と云、

とゝゆかゝもハ山中ふ多るひとつの草とさてろのけして根をつゝそ軒ふうゝるを云ハ古きをこゝろ得ぬかゝ偽名、○今云忍草ハ本草ふいふ石長生のゆゝびゆゝべしさんぜを石長生ハ四時潤まゝ今俗の擂ふ掛るもの〻冬枯るゝ、○後醍醐帝の廟前ふて御廟年を經て忍ぶハ何とものゝ草 芭蕉 是ハ垣衣ふよ

新澁 七月の部渋取の条ふ出ッ、

鹿 格物論 鹿の性驚烈多し、能良草と別ゝ他獸多くハ十二辰八卦ふ屬ゝ惟鹿然らゝ一千年ふて蒼鹿とゝる又百年ふて白鹿と化し又五百年ふて玄鹿とゝる鹿ふ麋あり麋あり麞あり 大和本草 鹿の角ハ春生し夏長じ秋堅く冬脱ぬ牡鹿ハ鳴き牝鹿ハ鳴ゝ、○七月の末より八月の中ふ九月末まて鳴ゝ、○うせぎ、紅葉鳥、さをしか、夢野の鹿、肩抜鹿、まさゝ、各頭字の部ふこゝもて注を、但をゝ鹿といつるハ誤あり、その部ふ注を、

鹿笛 猟人鹿角の根及び胎

鹿の皮或ハ蝦蟆の皮を以笛を作て吹て牡鹿の音を偽る牡鹿匍匐して来て竟に弥ふ羅て或ハ箭筈ふ入て つれく草 女のたくる足駄を作て此獣田圃ふ出て穀菽を食農 鹿垣 秋の鹿の妻ふ恋て鳴ふ入ること防んとめふ垣を設く是を鹿垣と云 鹿狩 白虎通 王者諸侯田狩 ふ害を除く 鶺鴒 陳藏器拾遺 鶺鴒ハ鶺の如く色青く背長 汎塗の間ふ在て鶺々音速声をなす村民ゴ云 田鷸の化する所○時珍曰今田野の間ふ小鳥あり いまゴ 雨らざる時鳴く是なり 和名抄 鷺 楊氏抄云之木云田鳥 和漢三才 蔓会 按ずるふ俗ふ鴫字を用ふ蓋田鳥の二字を製する歟○和訓栞 多識論 杉雑 喜斗志義○時珍曰杉雑按ずるふ臨海異名志云閩越ふ杉雑あり常ふ杉の樹の下ふ居頭上ふ長き黄毛の冠あり頬青正色垂縷のごとし 鴫 突網 職業盡 下総国荻原辺原中ふ鴫の切り居く動じあるを七八間隔て竿羅を持て鴫の正面ふ向ひ徐らいと付ちぐるくりくと廻て最初大輪ふ廻りて段々近寄まくふ小輪ふ巡りて止々六七尺ふ間近くなりてかの竿羅と投てとらく六七尺の所とみるふ及ぶまでも羅をうつせてとる手練の業是を鴫突と云ハ山城の鳥羽辺多しとぞ聞ける 荒野 鴫突ハ 鴫の羽掻 和訓栞 鷸 萱津のあまのひまころ潮干 羽をもてく音の高く聞のれいふく其数ももろ〳〵百羽ときこも数掻とりおく暁天ふ及くひれもとハ直ふ暁の事なるいつもこと〳〵 古今 暁の鴫の 鶺鴒 白経 羽をとかく羽をきく君ゴ為ハ我を数くれ 和訓栞 俗説 この田沢ふ居時の閑黙をなることもてをうり〳〵 和漢三才圖会 正字未詳 鰐 訓俗云志比良長崎の人呼て比以平と云ふ接ずるふ鰐の状鰐ふ類して頭四く尾鱗紬ふ味もはく鮫ふ似て大なる者三三尺九万足と名く其多くこれのるを以ていく越中鰐養と上ると相傳ゴ云中華の魚ゴて四五月唐船多く入朝の時来て群遊ゼ唐船帰る時九州の鰐唐人肉食の腥き氣を慕ひ船ふ著て入唐ゼ夏月鰐日本ふ多く冬月鰐中華の湊ふ多し 大和本草 シイラ又名ムヒキ 乾紫ゆて猫ゾとい八味美〳〵 八月 白髭

開帳 五日 神祇崇近江打盧白髭大明神八猿田彦也社

説 比良明神と同体〇昔八開帳の元禄中より止む今八只内陣と開て宮殿を拜せしのみ

四月十二の辰の日祭礼神輿渡御あり往古の神門石橋の遺八今水中二町ばかり湖水の沖あり一縁起にも鳥居のありし所と鵜川ら八社頭より二十町ばかり河あり鵜川と号す此川の北と鵜川領ら八別當と白頭山延命寺福壽院と号毎年二月八講あり開帳八月晦

忘

賀八幡祭 十五日 淡海志 四十代天武天皇即位九年壬申近江國滋賀郡ふ無跡八幡一

の御前八幡大井八今の聖真子真之唐光僧の形聖真子八阿弥陀八幡大井の分身〇是山王七社の神ゆ 淡海

国滋賀郡坂本村ふあり見瀬村の神社ふい

あらん今八山王祭の外神事あきまりあり

秋社 月令

廣義暦書云立秋の後五戊の日と秋社と註ふ云

社八后土あり民ゆてそれと祀りむ以て農と祈る

死

活杖祭 此祭八京都猪の熊三条の南褐速の神社ふ

あり 雍州府志 昔刑部省此辺ふあり獄と

断じて以て死刑と行ふ故ふ刑死の人の為ふこの社と建て祭祀と修せり毎年八月神事あり之を死活杖の祭と云〇千本引接寺千生の地蔵ふあそ毎春修する所の念佛會八元死刑人の為ふ修行せしより始りと

四手打、もころ打 きの部破の条ふ注して

紫苑 鬼の

蘇頌曰紫苑三月の内地ふ布て苗と生ず其葉二四相連る五月六月の内黄白紫花と開く黑子と結ん 万葉 萱草吾下紐ふ着有跡鬼乃志許草事に恩安利家里 家持〇鬼魅女草ゆれ紫苑ゆ 油中抄 鬼の

もこ草とハ別の草の名ふあらず忘草ハ愁と忘るこ草

なれい忘るき人と忘れん料ふ下紐ふつけられと更ふ

るとと紫苑ゆ忘草と云名八只事ふあらん猶意ゆれい

鬼のもこ草ゆうとふ云ふ歌の鬼ふわ云ふとうと

ゆの詞ゆ日本紀第一ふ不順也凶目汚穢之所云ふこ云わろ

しと嫌ふ詞ゆ凶の字と云ふ 俊頼抄 昔人の親子と二

人ゆとり此さらかく孝行ふ親ゆ子てのら歎き塚

ふ詣て在り如く有る年ゆ兄弟ゆ

ゆきぬ其兄公ふつゝて私とうゝるゝふ堪ずと思ひるゝ
ゆゝう只ふ止む時ふ忘草ハ思ひをゝれるゝ物ゝと塚ふ
ゝゝと植るゝ弟ハいくゝゝゝと恨ゝそ紫死ハ忘れ草
しと植る兄ハいつの程ゝゝゝゝれて行ゝ世ふ豆草と忘
草といふゝゝゝゝゝゝ弟ハまゝ絶ゝ詣てゝゝる日親
の塚ふ声あり恐るゝゝゝゝゝゝゝれハ君ゝ親の塚と守る鬼
神ゝ兄ハ忘草と植て公ふつゝゝゝゝゝゝゝ

雉に似て鷄の如し、胸の前に白き圓あり、其珠のごとし、背毛に紫赤の浪の文あり、○時珍曰、鷃鴣、桑扈、ともに、俗名、

（翡翠）晉南に懷南らに、江左に翡翠と注云、翡翠と必南（向く）東西に回翔すれども、翅と開くの始の必先に南（翡翠）其心し南を懷いて北に徂き、性霜露を畏れ、晨に出で晩に歸る、絺を夜枕に木の葉を以て身を覆ふ、多く對し啼く、今俗其鳴を謂て行不得哥と、其性潔きを好む、和漢三才圖会、金子景云、鶺鴒其性穀月に隨ひ正月の如きは一さい飛て止む、蓋未知然るもいまだ遠年亦中華よく表ることあり、最も珍しとす、狀雀雛の雌に似て頭に鶏の如し、

藻鹽草　此鳥は寒うるとき鳥に仍て秋の末なれば紅葉の散るに背中に負ひて雪霜の寒をふせぐ、故に寄生の鳥の上毛の紅みとあり、

鶏　和漢三才圖会、今鶏青鶏一物、鶏は山林に在て原野に出ず、形雀に似て黄赤色、翅に黑き縞の斑あり、脚掌黑し、

新酒　本朝食鑑、新酒は凡新稗の白米一斗を用てこれを釀し、須加利酒と濾布囊に填て舟に入れ其酒の水半滴る復布囊に入て壓ときは酒おのづら

滴り出つ酒滴り尽て後汁と取滓を去られと新酒とす、○新造中及醸醸袋洗、各其頭字の部にわかつ、注ス

九月

四の宮祭

十日　近江国滋賀郡大津の駅にあり、比叡国常住仲哀天皇小禪師火々出見尊桜ゐる小禪師塩土の老翁を祭る神四座、大比叡大巳貴小神殿に故に四座と以この地に住む里民ども、この神鎮座の東官幣使四位某の卿に故に四座と以四位の宮と号もと髮、四神鎮坐ゐるに小四位と号もとる、社説云祭る神五座、大比叡小比叡乙比叡小禪師塩土の老翁に小禪師と本社に故に四の宮と、例祭九月十日大津浦中の大祭に神輿二基に山王一邊物造花木を出し、夜に入て相撲有、

下鳥羽祭

十日　山城国宇治郡下鳥羽に、あり、祭る神牛頭天皇と号もと、例祭九月十日、下鳥羽及び横大路の土人家居神にす、神輿一基のり名勝志云神社に法傳寺の奥二町むこうり森の中にあり、

白川祭

十二日　名勝志云、滿天神の祭に、て洛北白川の里南山の上にあり、振社山王春日八幡紀事神輿一基鉾五本あり、○社説云祭る神天滿宮に多名

の尊祠社ハ前ふ同じし天満鎮座ハ寛喜八年三月十三日ゑ
旅所ハ本社鳥居の前二町むこう西ふわゝ例祭九月十日
土人産沙

十三夜

後の月、二夜の月、豆名月、栗名月、月見ハ我朝の風ゝ
神ゝゝ、
豆名月、栗名月、月見ハ我朝の風ゝ
ちゝと近世のえせ儒者ふ天邊將滿、一輪月、又光彩遍空
輪將滿ゝいふる詩又明の十二家詩ふ鄭ル谷何大復が
十三夜の月と題ぶゝいふる詩を引て其朝ふを十三夜の月
と賞をゝいひて附會の説ゝ信景云今彼集十二家詩ゝ
るふ是八月十三夜ゝて九月十三夜ゝあゝも其他ゝも九月十
三夜の月と賞せゝ詩文ゝ一句一章ゝあゝゝ
其人臨時の興ふして、天下の名月ゝゝゝ事ハ我朝のゝ
旧風ゝ、右中記七十五代崇德院保延元年九月十三夜、今宵
雲清月明ゝ是ゝ寛平法皇明月無双のよゝ
仰出さるゝ依て我朝九月十三夜と以明月の夜ゝ、常盤記
生態
勢
右黒ふ路語光卿の御説を引て云十三夜の月と賞
せゝ正ゝき起ゝハ天暦七年九月十三夜始て月の宴ゝ行
いゝるゝいふゝ遺例ゝふり来ゝゝ但此宴ハ本八月十五夜の
御遊びとおゝれて行いゝるゝ其由ハ八月十五夜ハ先帝朱雀

の御国忌ふ當ゝるゝふ概ゝも後れて此九月ふ其遊ゝ行い
ゝるゝ此月ゝゝゝ十五日ハ猶其日次も忌ゝゝれゝて、
十三夜ふ定て此月の宴を開き行ゝゝゝ、○忠道公十
三夜翫月詩云、閑窓寂々月相臨、従禹窮秋望亘崇、潘
室昔蹤凌雲訪、蔣家旧徑蹈霜尋、十三夜影勝於古、数
百年光不若今、馮前軒因首見清明此夕價千金、○唐ふ
富士あゝいふゝふの月も見よ素堂○後の月ゝハ十五夜ふ対
ゝて云ふ○二夜の月十五夜の月ゝくゝ二夜の月ゝ賞せ○
栗名月、豆名月ハ浪華の俗十五夜ゝ芋名月
ゝいひ、十三夜を栗名月、豆名月ゝいふゝ、

芝神明

祭 十日より 江戸芝増上寺大門の傍るあり、神領十五石
十日まで 別當金剛院神主西東氏當社旧地、増上寺の
山際るあり、故ふ飯倉明神ゝ号ゝ、祭礼九月十日より廿一日迄て
神幸
あり、此節時ゝゝて秋雨多しゝゝを以て世俗神明のめぐり
祭ゝゝふ祭礼の間社内ふ於て生姜ゝ高ふ、豆ゝ振勝、生姜ゝふ
ふ本朝醫方傳ふ云薑ハ穢土ゝ去神明ふ通ゝ上俗ゝゝの
事ゝ誤ゝ傳ゝゝ生姜ゝ賣もれゝふこの外擂割箒ふ藤
の花ゝ重き内ふ餡ゝ盛りてゝれゝゝ風木箱ゝ称ゝ但し

風木の餘りゐて作れるもとゐる謂ふべし、城南寺祭
恭詣の人必生姜し此ちき箱を買て帰る、

廿日 神社啓蒙 城南の社ハ山城国烏羽の里にあり、祭る所
の神、坐鳥羽天皇、○社説云祭る所二十二社の内十社、
伊勢、石清水、松尾、稲荷、賀茂上下、平野、春日、以上城南神
と号す、例祭九月廿日神輿三基あり、この地人皇七十四代鳥
羽上皇の離宮ありて王城の南 鹿ケ谷祭 廿四日 紀事 浄土村
にあるゆゑ城南の離宮とゐる、

十禪師祭云 洛東銀閣寺の門前北の方ハ十禪師の
社あり、同所ハ八所明神の社あり、神号詳からず、土人産泓
神を、祭礼九月二十四日 今九 雍州府志 鹿ケ谷 猩々菊
天皇祭云 今祭祀微みて記もふ及ばず、
黄猩々ハ万重大てん乱猩々本紅也 紀 女花 菊の異名
尖て大てんハ猩々の如くあてはまる、
女節 女莖の異名あり、 羊 兼和の色 菊の異名 藻塩
是ハ山ようてゐふ、
草 唐ハ菊を
仁和天皇より始てゐて遊ひゐ、故ハ兼和の色と申よ、此

ころひまく菊の品も分くもそ、黄ゐと用ひられ〳〵黄
菊どきして兼和色とも藕我菊とも申くるや、云藻塩草の
説くの如くしかとも類聚国史ハ桓武帝の菊の御くこと載
らるゝ、兼和帝より菊とはじめて愛しかひ、
只此帝わきて菊とゐて遊びゐひ、
く、後の哥ハ多くもち菊とゐる、 もち菊 和訓栞 菊、大要
黄、を貴ぶ、詩人の賞ずる所、薬用ハ入もまく同じくるふ哥
ふ多くかくよくしハ、新羅菊の義くといふ、花史在編ハ菊品
新羅 一名倭菊千 芍 芍薬の根分 芍薬其花肥大
兼純白とゐ、そゐ、あらんと欲ゐ、
壤とくゐ、毎年九月根を取削り去る、 柴栗 栃栗のこと 熟柿 暵ハ秋の
熟柿哉 椎の實、椎柴、椎の葉、 大和本草 椎 聞
も考、
本草ハ云もあり、 羅山文集 余幼年より椎ハ木の名ゐ果
あるを太平御覽ハ在と聞く、後ハ文考て蓋胡説歟、項面
書韓山志を見るハ椎ハ科子、其末尖て錐ハ似ゐ、
故ハ椎といハ宋志ハ椎ハ作る木に従ふ 下 畧 和漢三才

歯会 椎子 鐵樹 其葉椶に似て鋸齒細く強く冬も枯
葉落ず其実長く尖て筆頭に似て紫褐色仁白く両片
もある云 丸榧 銘栗 椎子の様相似たり小椀の如し俗呼
で供器とす○季吟云堀川百首に椎葉を冬の題に出
せり其故如何冬こもる一説あまで実につきて椎 松子
に秋季を持しふ 椎柴也 葉も実も秋とす

新松子

海松 大和本草 海松五葉あり若水日信州
戸隱山あり然るに日本に本草なり
から松と訓ずるは非なり
五〇一日本の産は朝鮮より来るなり。 倭名抄 松子
漢語抄云五葉松 ○青球と
子和名万豆乃美 貞享式 此式
大坂の里語に新松子とす 新蕎麥 ハ例の賞翫之
奈何とかれば初冬に食て 新米 食療
ハ秋なる前後の働と賞して 本草
糯米新熟の者は気を動し
年を經る者は痼病を発す 霜踏鹿 千首 かりのこ
霜置て岡べの道は
さくらの声 称名院

名

名の部に
任せ出し

い

七月

楸

の葉と戴く 夢華録 唐の時立秋の日京師楸の葉
を賣る婦女児童剪て花の樣にす
てうん 一葉 桐一葉 淮南子 一葉落而天下知秋○一
と戴く
葉は桐とも柳ともいへり句体おのづ
一葉の舟 一葉の水に浮びうかぶ舟に 御会 初
秋の事
一葉の舟詩文多し
暮秋に 彦星 去の部二星
の条に出ず 火取香 棚機に手向
西北机に居香爐一口納殿の百和香四両盛之 江次第
公事根源 机の上に火とりに終夜空焼物あり 蘭森子
唐胡森なり 楸 時珍曰楸葉大にして早く脱つ故に字
の部に注す 楸と 榎樹は小にして早く秀故
ふこれと類とす 花軍 楜 ヒサギ キサゲ カフ
テコブラ ライテンキリ 人家往々これを栽高さ二三丈白
鐵樹に類して皮赤龍の鱗の如し葉は杏木に類して
大或は尖こと或は三尖夏筒子の花とひらく小にして白色
紫点あり凋て莢を結ぶ 数十簇 周 大和本草 時珍
とりて枝の間に垂る長さ尺餘 蜩 曰小にして色青

緑ある者、尔雅註云小青蟬也此せミ山中に有り、鶯ふくく故に名く、常の蟬より小にして青赤に音略こん、鬧に堪くらう、寒きき鳴く、

兼三秋物

引板

拾穂抄 板に木と添て鳴こつけて引あら し鹿と鷺 大和本草 一名 八月菱

一本芒

大和本草 一叢に多く叢生ます、

取茹菱 時珍曰菱實一名 蔆或は沙角この角稜峭 ふと蔆といふ俗呼て凌角こすと中暑自潮中 ふ生ず、葉実ともに小く其角硬して人と刺其色嫩うある者青く老る者黑し嫩ある時刺食ふ甘美こ老る時は蒸しこと食ふ、

大和本草 穆

時珍曰穆、苗艾赤の如し八九月茎と抽んで三蔆あり細花と八月九月これと採る、

瓢簞、百生

千生 青瓢簞草 会 苦瓠 俗 和漢三才画

ひらく、炭りて栗の穂の如し、三云瓢簞と壺盧と一類にして別種なる者明けし巣花ふみ壺盧ふ似て瓢の味食ふ堪ひ四方ある者多く炭斗ふ作る長して細腰ある丸酒樽ふ作るべし長五六すの者あり、俗百生と称ス二三寸の者あり、千生と称ス細

腰本末相均しき者俗呼て平蕈 和漢三才画会 平茸山林の湿地よりもこ苦楝 て闇夜とりく、珍味なり、の樹多くこまと出ず十月盛ふ其形蕈ふ似て瘦傘薄く蓋し故に名く大さ二四寸亦至て大なる者あり灰白色裏白く細き刻こあり性柔ふ脆く其柄多くは正中ありくど畧偏て生ず、大小義生ず味淡く甘 鴻 和漢三才画会 菱喰状ち雁ふ類して大あり背頸俱灰色翮深黑其尾本白く末黑し腹白く脇黄褐黑くして鼻の辺ふ黄の條あり其肉の味雁ふ劣らず 鴨 和漢 脂もまく多し臭香鶴の肉ふ似ること有り、

三才画会 俗云比与土里状ち鸐鴿ふ似て尾長く蒼灰色頭上の毛乱ず起眼の辺ふ微赤色と帯ふ胸臆灰色腹の下灰白く俱ふ黑き斑あり嘴利く脚脛短く掌ま三蒼黑く常ふ群ずまと飛啼好て草木の實と食ふ或は云山茶花 鶏 古抄秋こ貞享式ふ云 日雀 和漢・才画会 俗ど食ふ、冬の部ふ云て注ず、

三云比伽羅状四十雀ふ似て小く頭皆赤色頬の辺ず白黑相交ふ腹白く翅尾黑く其根澤あり 鶸

河原鶏 和漢三才圖会 俗云比和止里雀ようかく全体黄色にして青を帯ふ頭背頸翅ふ黒を交ふ尾黒く腹黄白嘴灰白脚黒し其舌清滑よく轉る又河原鶏状鶏ふ似て稍大く頭背灰白く眼の後微黒く背ふ黒き斑あり翅蒼黒ふして黄を交ふ 和漢三才圖

鰒漬 会 二三すむ

本草 唐鶏紅鶏蓼鶏ふ同じく状略之

ようの小鰒と用て醢と成人造法鮮鰒一升洗ハずして塩三合和し三日ゐて後石とゆこと壓すべし或ハ同く茄子生薑穂蓼番椒ふ漬るも又佳し鰒の字未詳 本朝食鑑 魁ハ小鰒なり

九月

と魚 九日 公事根源 十月の旬のことふあらざる人ハ日を

賜氷

氷魚を取こ〻ふ例あり 年中行事 ものみじ折〻給ふしるきこのちひさき内侍

百菊 滑稽雜談 いまて草ふ云和朝よりあひて菊と愛する中ふ殊ふ百菊ふして百種の名あるものなり傳へふ足利將軍義輝公御園ふ植らるゝ御寵愛あり義景藤孝兩人ふ贈られ〻百種の菊あり人百菊ハこの種あら〻 和名抄

鴨上戸

ふの部

ふ出ず

錐栗 時珍曰栗稍小きもの山栗ともいふ 和漢三才圖会 栗の皮ふ刺ありて尖らざるを錐栗と名

瓢の樹 和漢三才圖会 其木の葉女貞ふ似て厚く狹く長く微淡し三四月小細花を開く深赤色実を結ぶ大さ豆の如し自ら裂る中子細小く黒色別ふ其葉の面ふ孔の如くあるもの脹出て中ふ小き蟲あり化し出づ穀ふ孔ありて塵埃を吹去ハ空虚となる大なる者ハ桃李の如し其文理椰子の如し人用ひて胡椒秦椒ふ代ふ故ふ俗瓢の木とゆふ或ハ小兒戯ふ吹て笛とし駿州ふ多くこれあり祭礼ふこの笛を吹て神輿ふ供奉を瓢ふ代ふ故ふ俗瓢の木とゆふ或ハ小兒戯ふ吹て笛とし

檣藤 時珍曰其子檣の形ふ象る故ふ名く蛇系黒色微光る大さ一三寸山ふして偏ふ人多く肉と剔き去り葉瓢ふ作て腰ふ垂 廣州記 字彙 林再藤ふ似て掬ふつく通草のごとし

穂 八生る稲ふ

古今 川ふそる田ふ苅る人ちのふふ出ぬ世と今ハらふわきもてぬとの よるくもぢ

七月

百子姫 捌機七姫の内ふ百子の池より名くといへり 百子の池 ふの部 七子亀

の条ふ

紅葉の橋 古今 天の川わみぢとはしふわ

出川、真淵翁云、かくぢとそーこわくせぐふや、秋と待こ
まり、
ところとふのこ、紅葉の橋ハ秋ハわこぢと尊こてれバぐ
初秋ふて紅葉せぬ比ゆもうらぐ凡の秋のさまもてつふ
のこ、中暑此紅葉と橋ふとけくをこてろ得ゆこるのやそ
今ゆむゐるあやまりくるが多し、○青藍云此古今集の三の
あり人天の川原ふゆみぢの橋けるを趣ふ古くるこまうるを、
又棚機のまうるんとするとき、紅涙とおとけを、紅葉
ゆみちのちーとふ説ハ、後ふ設けるるべし、

の帳 藻塩草 紅葉の戸むりとハ錦の戸帳と七夕ふいひ
夫木 かくぐぎの河瓜くちぬたれくこの、
ゆくちぬのたくう浪や、文珠會 八日 公事根源 是ハ東
うくらん、後九条内閣、寺西寺ふそ行ゆる、
仁明天皇天長十年七月八日、大法師泰善ちめて文珠会
と修ふ、天政官府 其略曰、文珠会ハ畿内郡邑廣く此会
を設け、兼食ホとなして貧者ふ施しゆく是又文珠涅
槃経の文ふ依るこ云ゆ若衆生ありて文珠師利の名と聞ん

ふ十二億劫生死の罪と除却せん若礼拝供養
まる者ハ生々の處恒ふ諸公の家ふ生まるこ云、

かくぐ 秘蔵抄ふ出

つし 稲妻とふ、**桃の子** 時珍曰桃の性早花植安く
従ふ十憶と兆しふ ○子繁し故字木兆ゆ

兼三秋物 堅月 説文 望
其多きをのこ云ゆ、
ゆこ日と相望む君ふ朝ゆるゆ如し月ふ満
ゆ、**紅葉鳥** 鹿の異名
ゆひ臣ふゆひ壬ふゆふ壬ハ朝ゆるゆ、
こ 藏玉 もぞれゆるこの田の山のもと、**桃吹** この部木綿
ち鳥ゆこちの衣きこやゆくらん、の条ふ出ル、

藻ふ住虫音ふ鳴 本草約言 紫草其中ふハ螺螄
ゆり 天和本草 約言ふつハ蛤古
寄ふゆるゆ、藻ふ付て殼の一先ゆる螺螄、
分殼の意こ、古今 采雅抄 蜑の川藻ふ付て此し一我ゆ
と身とほちぐ反ふゆて名づるこ 古今 蜑のゆる藻ふ
もむ虫のこれゆこ、ねとこそゆめ世とゆつこし直ず
朝臣○御傘

鵙 和漢三才圖会 鵙 音見 兼名苑又鶺鴒
ふハ雑ゆ、と用ふ日本紀百古鳥と用未詳 鵲形

鳩ふ似て小く、頭背尾ふ至て黄褐色、眼及び嘴顔の容ハ鶉ふ似て、眼の辺ア黒く、眼上の白き條一筋ふ引、嘴黒く〻く末曲る、頰臆白く腹黄赤黒き横彪あり、翮白く、羽黒し、脛掌黒く、爪利〻て毎ふ小鳥と搏てこれと食ふ、其声高く喧〻、奇異といつべし〻〻

○秋ふ至てよく鳴〻、

鵙の草莖、鵙の早贄

奥 俗

抄 むゝ〻ける男、野と行て女ふあひぬとのく加さらへつきて其家をとゝふふ女鵙のあとる草ぐきをさゝして曰、我家をうけ草莖のもぢふ行ゝとる里ふ行ゝとゝふ、男後ふ、それらをとゝうめぐをとりと契ゝてとりぬ、その後心ふ行もひあぐらおもけふつうまろり、私をうりこるほどふ、とまれくてゆうまりぬ、次のゝ〻の春、こゆくありし野ふ行てとゝ〻草とゝる、八霞こゝ〻く聲てもゝく見えず、ゝねもまあぐあとしあく帰さぬといゝり、これ故時作の傳あり、

袖中抄 鵙の草莖とゝ鵙の草ぐるとゝ、

哥林良材 鵙の草莖ハ鵙ハ時鳥の沓ぬひそて有るが沓手と取てゝ〻ぐり〻ふゝて其ゝりふゝるゝりめ物と、草の莖ふ〻〻もとのるといふゝり是と鵙の早贄とゝのゝ人

藻塩草 鵙早贄とゝふゝとゝてゝ人の草莖ふゝとゝる虫ふ〻ふ蛙ふどとゝて刺て時鳥の為ふゝく、ゝぶみハゝゝとゝゝ八雲の御説ふ説々あり、此説ふ過べからず、

[ひくうぐひす] 鵙の性ゝて必蛙或ハとうげふどを取く、草木の立枝ふ刺貫き晒ゝ〻ゝ、これを鵙の早贄とゝ人気疎き別莊ふとゝまゝあり、ゝまのあくゝゝとゝゝ

○諸説〻〻ゝる本説ゝとゝる後の人取用ひく、ゝる哥とあるで、これ〻ゝとゝゝの説ゝもこゝひこ句作あるべ、

鵙落

紀事 山林の間四ふ鵙の目と縫ひ架頭ゝ居傍ふ鵲竿と設て鵙鳥と執る是と鵙を落ゝ、

八月

木犀

花の条ふ出、

九月

百夜草

藏主 名ゝ〻

菊の異名あり、

ゝ社部桂の

ゝ人翁が庭の百夜草花ときてこと白妙ゝ[illegible]大和の國三輪の里ふ老翁ゝり人彼庭ふ一本の菊とゝるゝて此翁ゝてゝのぐべの菊秋冬ゝもゝて、春夏ゝでも花も葉もゝゝ〻、所の者不審ゝて委くゝゝ〻ゝ聞ゝ、七月一日より毎夜菊の上露と器物ゝゝくゝゝ百夜ゝり、毎月此花と並ゝれゝ依て此菊四季ゝゝゝ、仍百夜草と呼ゝ、

紅葉

和訓栞 紅葉とゝゝ人

紅出しの義ぶ[illegible]の反ぢ[illegible]といふ[illegible]ぎ葉とのべきを略し、
てかもぢ[illegible]こいとり、中暑[illegible]
かもぶ[illegible]ぢ千の反づ[illegible]
ちるもあり[illegible]の反たり、○かもぢまる[illegible]ハ楓櫨荏、白
膠木、蔦、檀、柏、楢、榎、梅、櫻、正木ホ[illegible]各頭字の部ホ[illegible]
註も、○楓のかもぢ[illegible]故花[illegible]ハ櫻とあ[illegible]
かもぢとい[illegible]楓のもう[illegible]
へそあ下る花ハ[illegible]
こぶ[illegible]
うぶきかぶ葉 [illegible]旨法印 紅葉の舟 和訓栞 源氏ホ紅
葉をもこぐ[illegible]
たる舟とも[illegible]紅葉の[illegible]
かもぢのもぶ[illegible]
時記ホ馬琴氏紅葉ク[illegible]ちるのうハ[illegible]色[illegible]
の花ホ[illegible]
又陸佃が埤雅ホ茶褐色ハ黄黑色[illegible]
ハ早く色つきくるぶ、雨露のくるふもあり黄黑と茶褐
色ふふりてちるもとい[illegible]故ふりつちる秋あり、
下かもぢうちる山の夕ーぐれぬれてやひとり鹿の鳴らん、

家語 家兄羅文云かつちるハ數々ちるあ色、ホ此說[illegible]
おぼつかなしかのちるとのるハ盛ホ深さるかもぢのそ[illegible]
くといちりそ[illegible]
の[illegible]
ると狩とい[illegible]

俊頼集 をぐれやくさの
原のもぶぢ狩、うのむ蔭あ[illegible]紅葉衣 桃華

紫葉 表黄、裏 [illegible]芳、九月[illegible]一說ホ面裏青、文武紅葉面
黄裏青、青紅葉表青黄裏紅、其外爐紅葉、紅葉、重蝦ホ紅葉
等品々 [illegible]麁文云増山の井ホ重陽の下ホ出[illegible]
[illegible]あり 紅葉土器 禁中重陽宴[illegible]
[illegible]し、御厨子所の預り高橋氏、もとゆ[illegible]紅葉
土器の名目あ[illegible]ホ、按ずるホ菊の盃ホ對[illegible]
[illegible]し 紅葉鮒 和漢三才圖会 深秋その鱗[illegible]
[illegible]愛ぢ[illegible]を紅葉鮒とい[illegible]

七月

施餓鬼 施餓鬼棚 紀事 此月朔日より十
五日ホ至て寺院の意ホ
任せて[illegible]と修も、その法門前ホ檀と四隅ホ幕[illegible]と須弥
の四州ふ比[illegible]寺僧その上ホ座し經を誦し、中央ホ種々の供

物を備ふ是ハ鬼子母神の子ととり食ふ故ふ佛戒めて今よ
り浄ら食ハ別ふ与へんと誓ひ給ふこの故ふ末世の仏才子ふ
勧して毎日浄飯七粒づゝを供へその飢渇をとゝくいまゝし云、
○一説ふ目蓮の母餓獄の中ふ墮ちてこの功徳をまのあたり
諸の餓鬼とゝて食と得ゝ！ひもすがらゆゝ

施餓鬼通覧

廣大施餓鬼の法浄き所と点定し地と掃ひ棚と作る長き
三尺ふ過ぐゝまし但桃樹柘榴の外用ふるところあれ鬼神ゆゑ
ゆゑてこゝを食ふをゝそれ或ハ浄地の上大石の上或ハ泉池
江海流水中、これ川餓鬼ふ用ふ東ふ向うて施ゝ元時と時定め
てこゝとと行ふ大幡三本こゝ咒語と書て云唵摩呪嚧喇
呼吃婆婆訶、こゝと室樓閣經の咒ゝ又七如来の幡とわゝ
別ふ焦百鬼王と用ふるめれ、施食のゝゝめ、面前鬼ふ始ら愛、

倶舎論頌 鬼ハ月と日とゝと、五百歳、

摂待 門茶

仏祖統紀 宗旨傳日

人間の一月と一日ゝして壽五百歳、
義井と城南の棟社ふ鑿法華水と云ふ以て行者ふ飲ゝむ、
亭をその上ふ作ゝて施をふ湯茗と以す、屋と結ふて數楹
創て摂待と云ふ○往来の人
ふ茶と施ゝまゝり門茶ゝも云、

洗車雨、洒涙雨

天中記七

月の六日の雨と洗車雨と云ふ七日の雨と洒涙雨と云ふ

藻塩草 車と洗ふ雨と云ふ七夕の別と云ふ○この夕ゝ雨ふれば天
の川水漲ゝて二星會ゝ難ゝこと云ふ
俗説、この洒涙雨と云ふ誤りしあや、

施火燒

大文字焼 鳥居の火

船形りの火

紀事 七月十六日今宵東山浄土寺の山上
妙法の火 ふ薪と以て大字と点ぜ、此字畫九筆の及ぶ
處ふあらぜ傳ふ室町家繁昌の日、遠望遊觀の為これと
点ぜり故ふ一条通りと正面ゝと○一説ふ延徳元年七月十
六日、相國寺横川和尚始てこゝと作る是將軍義尚追恒
のゝめゝ、凡この月六日より薪と伐点火まゝるふ至ゝること
ふ預ゝるれ數十家あり、今日申の刻各伐乾ところの薪
と擔ひ山上ふ登ゝ凡大文字一畫長さ百五十間余五尺むゝり
と隔て薪木と積事一堆ゝみ數四百八十余所各薪と積終り
て後日の没ゝると待ゝ同時ふ火と点ゝもこの外北山松ゝ寺ふ
妙法の火と点じ船岡山ふ船形りの火と点じ愛宕山ふ鳥
鳥居形の火と点じ洛外所々の山岳ふ原野ふ諸人集ゝて、
枯麻の枝樹の枝破子公卿基の類と燒く、善福寺童
とゝと聖昊の送火とゝひ又施火とゝ、

相撲 十五日 江戸麻布雑色町にあり麻布山と号す開山了海上人は親鸞上人の孝子なり今日開山了海上人の忌日なり故に寺内に祭る所の麻布権現の社前にて童相撲あり報恩のこころなり

仙花 剪紅羅 剪沙花 剪秋羅 とも云

翁花 花の形刻して右て小刀或は鋏を以てきりなせるがごとし俗にせんといふ秋深紅の花とひらく種類数品あり 松本センシ 小倉センブシセン

カンヒ フレクロ 三四月 五六月も咲 眼皮は二類異種 フレクロ

恐て此花和種に昔嵯峨清涼寺の北に寺ありて仙翁寺と云ふ其寺絶て跡も珍花生ず時人仙翁花とも云ふ

兼三秋物 柏子八又 十六柏子 ○

千秋樂 盤渉調の曲也 体源抄 千秋楽 王子降誕七夜に奏す盤渉調は秋の野に萩女郎花風に吹しなびく如く吹きく ○ 俳書に千秋楽を出して万歳楽秋風楽を出さず秋風楽は漢の武帝の時出来て秋声の辞なり

八月 秋本すは八月一日なるべきか

釋奠 献能 続日本紀 聖武天皇天平二十八年八月癸卯釋奠服器及儀式を改め定む ○ 二月に同じく春の甘の部にあり 公事根源 あるる日釋奠の胙とまゐらせる 藏人持て朝餉の間にまゐる 藏人答てうんやのつるきの奉るる昨日の釋奠の胙 音と文字とをかくして高く掌持て簾の中に入る 此度は二月に あるべきに胙と献もは八月に限るべし 兼る猶有職の人 尋ぬべし ○ 釋奠の翌日なる 事く昨といひ ひろぎのこと

鶺鴒 ひの部 橘貞鳥 の条に注と

千振 胡黄連 ひの部 瞿曇 の条に注と

千生 の条に注と

九月 **泉涌寺舎利會** 八日 洛の泉涌寺舎利殿にあり毎年九月八日舎利会と行ふ音楽あり律師 湛海宋の白蓮寺より 珊瑚 の部に出

梅檀 の部に出

仙蓼 受持の仏牙あり

實 時珍曰其子金鈴の如し熟する時は黄色金鈴と名く形に象る ○ 梅檀は楝 夏の部にあり

七月 **硯洗** 硯つの部 机洗の条下に出

水灯會

十六日 城州宇治郡大和田黄蘗山万福寺ふたり人覺
八華人黄蘗隱元琦禪師明暦中の建立ゝ紀事 今春
宇治川の船中ゆゑゝを修ゝ水中絶食の法事ゝ其
式船二艘を双べ中の剏ゝうふ岡屋の前ふ出先ゝ流ふ
沂ゝて宇治橋の下ふ至る暮ふ及で船中數个の燈臺
を点し僧徒左右ふ座を列ね七如来の牌を安し供物を
備へ經巻を誦し音磬をうちて流ふ隨ひ下ゝ
後三百六十个の燈を宇治川ふ浮へ流ふ
散乱せ ゝ恰も螢火の如しその内白紙を以て蓮花を
造ゝ内ふ艾心を置ゝ熱艾ふ硝石を以て煮る火を
その末ふ点ゝ或ハ流ゝ或ハ沉ゝ伏見豊後橋の
下ふ至るゝ僧徒その刻ゝうふ岡屋の前ゝ帰
る其間遊覧の船数千ゝ月令廣義南国の凡俗中
元の夜家々各美飯を具へ齋供ゝ門前ふ羅或ハ桐燭
の所傷亡の野鬼を祝祀ゝ畢ゝて水燈三十六をゝ
流水ふむかへて浮ゝ名づけて度孤ゝとふ燈ハ紙燈あり

相撲 部頭使 漢書注 兩ゝ相當ゝて力を技藝射時ふ紙載ゝ故ふ角紙ゝ事原

史記秦の二世甘泉宮ふ在て樂を角力戲俳優戲ゝ
漢の武帝ゝ此の戲を好ゝ即ゝ今の相撲ゝ垂仆紀 大和国當
麻蹶速と出雲國野見宿禰ゝ力を撲ゝ蹶速野見ふ
勝ゝあくゝもゝその腰を踏折ゝて死ゝ野見ゝ當家
の祖ゝ扶桑畧記 柏原天皇の時より代々天子皆悉ふ相
撲を好ゝ貞觀以後ゝ寂然ゝそ無事ゝ今聖主ゝれを稽
古又興ゝ〇先ゝ二三月のころ大將以下陳の座
ふ於て相撲使のゝを定ゝ諸国七道ふ遣ゝ相撲人を
召ゝ事根源 相撲 江次第 仁寿殿 東遊の相撲 供御人 相撲ゝ奉行
あり 仁寿殿ふ五南殿出御のゝ時ゝ是ハ諸国の供御人
仁寿殿ふ於て召合の抜出ふあり
国の勝負諸
の御覽ぞゝうゝあつめて七月ふ相撲の節ゝ
奉ゝて左右の次將ふ相撲あゝ先十六日の間ふ召仰あり上御勅ゝ
近衛方ゝ分て国々ゝ使ゝ下して相撲ゝ召ゝこれゝ召集
ふゝうゝ使ゝ〇廿六日ふ内取ゝ廿六日ふ内取ゝ
廿六日ふ内取ゝ

延元三年江記に云角力人三十人淡路行列その装束烏帽子狩衣
横鼻褌に差細狩衣の上に帯を着下袴に着を徒跣各三十人
ふ[illegible]ふ取て勝負あり、廿八日 大の月も八九日 召合 小の月も七日
あつし、[illegible]云召合接出八左右相撲相合江次第に云勝方乱声
時に次に左勝負右勝負のこときに右先ツ勢留利に奏に左
綾三と奏に又せんけいあるやきを他の舞に奏すに天白
南殿に出御王卿参上まに大将相撲の奏に執る十七番更に
勝方乱声あり又廿九日 技手として角力とをりて御覧ぜ
らるに神亀三年に始まて諸國より召上せらる寛平七
年に八童相撲と御覧あるを角力の起りと申に日本紀
垂仁天皇七年七月當麻邑に勇士あり云○助手最手加
手ふどこれ相撲ふる所に助手是と服手とに江次第
[illegible]鶏服ふどらぶ[illegible]ふらう名と設け

薏苡仁

[illegible]撲合頭字の部に分[illegible]注

和漢三才画会 [illegible]に類し葉の間に枝ともろもろて穂と出
に実と結ぶ其稍の末而に白花と開く凡草木の花落
て実を結ぶ此花と実と別に形四く末尖に端に白絲三條と
出て畧[illegible]くもきに絲脱去て孔とあり上下通ずに児絲を
貫きて念珠とも、

西瓜

和漢三才画会 慶安中 黄蘗隠元入
朝の時西瓜扁豆の種と携へ来り

始て長崎に種 本朝食鑑 水瓜に西瓜と俗に瓜中水多
故に名く 大和本草 三月種と下し蔓延て地に布四五月
黄花と開く甜瓜の花のごとし、

鈴虫

和漢三才画会 金鐘蟲 月鈴児
俗云鈴虫此に蟋蟀の類真黒
松虫に似て首小く尻大く背窄く腹に黄白色あり夜鳴
声鈴と振ぐ如し里里林里里林とふどー○此鈴虫の
外まの部 松虫

すげの庭鳥

異名八類 [illegible]の異名
の条に[illegible]

[illegible]の山にまつ[illegible]
蓬が杣のもけの庭鳥

兼三秋物芒 尓雅 薄草の聚て生

と薄とふ又芒とふ杜栄に○時珍曰芒兼皆ものこと
[illegible]て大く長き四五尺甚快利かて人と傷ること鋒刃の
如し七月長き莖と抽んて穂を[illegible]子[illegible]蘆葦の花のごと
者に○縵芒 篠芒 鷹の羽芒 糸芒 簾芒 十寸穂芒
麻芋穂の芒 真蘇芋の芒 穂芒 花芒 相撲草 和漢
尾花 鬼芒等各頭字の部にもちて注

三才画会 野原湿地にあり葉地に布て義に忍冬に似く
微扁く石菖に似て浅く秋莖と起て嶺に穂ごとに青白

色細子あるべし、まどもらえぞを、其莖扁く強健長さ六七寸小児莖と取て穂を結結て繼の如くし、二筒と用ひ、其稍めふさ〳〵えさみ、両人莖を持て透徹材四羅材とこの相引く、切らる方輪〳〵、部こる度〳〵、

すごのる

もぐと鹿とろるハ誤〳〵、先板の諸仏ろるてふ

ろこひて、秋の部ふ出もふよりて、てふ贄して

其ところを注と、古今まがるもハ秋の萩原朝ごちて旅

ゆく人をの〳〵ろうん、真湖公翁云もぐるハ日本紀ふ螺蠃

と書てをるとあり、一ふい似我蜂ことも云、此蜂ハ桑の

木の虫をひい来て、巳が巣ふて七日呪ひぬるハ巳が如き蜂

とあるとどうりさて其子ハ一度巣をこもて又帰来らぬ

ゆゑ其如く今別ゆきて、えろうとも云られぬ人まもハ帰るを

ろうとまこんとこもわがきてこるもり、中畧此の何とも言ち

れぬ萩原とろふつきてまがるハ鹿の事くもて、ひさ爲

説をもいつ〳〵、俳諧の書ハ後の説ども

ふるよりく物もをぐくる誤多し、

八月

胡

芋

芋の莖をふ大和本草唐の芋の

莖ふ煮て食し、生ふて酢とくして食べ、

鱸鉤

鄭鮹

大和本草鮒魚大なる者二三尺三月以後七月まて肥也暑月脂多くして味よし、八月よりやせる、夏秋さ〳〵鮒〳〵

鮒とあるす、夏月腸の味よし、ツモロタとふ腸あり、脂多く味よし、ふるつとヒイブとふ松江ふるぶし、中華ふ江の鮒ハ其大サ日本のヒイゴの如くと云、河鮒味尤よし、暑月の佳品ふ海と河との間ふあるもの味よし、漁人これと釣戈ふて突てとる、猿蓑鰣つる

ろろとなるもの〳〵鮒つり半残

九月

任吉相撲会

十三日宝の市　拾芥抄九月十三日任吉相撲會社家説神

外市　興玉出嶋頓宮へ渡御傳々供あり、津守の

神主勅使代として宣命と讀畢て、相撲十三番童相

撲三番あり、瓚鼻褌の上ふ注連と纏ひて手合あり、是

今日の神支〳〵、〇一説ふ〳〵神則〳〵黄金の升と作て、

て、新穀の稲と奉ることるべ、ようて農家用ふる処の升を

此処ふ持来て賣りこ〳〵を以て種々の市人群集ひる

故、宝の市〳〵ふ中宮社の新嘗会〳〵心得べ〳〵今ハ神輿

と別殿へ迁〳〵奉りて、五穀新嘗の神膳ふて奉る相撲

会の事中頃より沙汰ふ〳〵宝の市外市是〳〵〇升買て

分別うする月 **住吉の神送** 晦日 九月晦日、摂州住吉の神輿を出嶋見うめ、芭蕉の仮殿へ渡御、即祓と修まこれと住吉の御菅の後ろふ、祝祠あり、文比祭と称もて、出雲石と云所あて祢宜出雲と遣ふ拝むこれと神送るとの八今日四天王寺石の鳥居の遣ふもまうと神送つまあり大坂所々の神社も又神送りの神支爲入大水為蛤 月令 此記戌月之候爵為蛤あり、蛤雀物化為潛物九月節

醉楊妃 百菊の内に、大白入薄紅かゆて万重大々輪、**芒散** 其花老るありて、風ふもとゞ八て時絮の如く散乱もるこ鵞毛の如、

追加

ほ **七月** **星草** 大和本草 穀精草、沢中畠の中ふ叢生もて、葉の中より一莖と抽んで其形其蘭ふ似て、莖の末ろ白花の四きあるこ ○俗太謟のブチとりふ、

り **七月** **琉球芋** 大和本草 甘藷 葉八番薯と義菜の葉ふ似さう、根八瓜樓根う似さう、根の下ふ短き蔓あり、根の餘のひげあり、又鶯卵ふ似て大きふり、鴨の卵ふ似て小ちるもあり、大ふる八重さ一斤あり、長きあり、四きにわたる、夏月蔓長く生も、中暑此種元禄の末、琉球より薩州ふ渡る、煖土ふよろし、寒地ふ植もて生せむ、

ぬ **八月** **鶏** 大和本草 和呂 鬼ツ 鶏ことの八常のゝ多くこもり三倍わ大ふ、ほゝ多し山中ふあり、鶏の字順の和名抄ふ唐韻と引けるこ中華の書ふ八怪鳥こといへる、

を **九月** **万年青九前おき** 此詞増山の井ふ出ス万年青のまえおき、牡丹の脚松の胴とて立花ふ用ふるふゝ、但し池の坊三ヶの傳受ふまゝ妻ゝふる

し **八月** **鳴の羽盛** 鳴の羽ゝ、千鳥の羽ゝ、ゝゝ料ら理ふもる事ふ、切ゝる頭翅を以ゝ全体のさゝを作ゝ、その脊のゝろへ焼ゝる肉と盛ゝる、れと鳴

増補歳時記栞草秋之部終